572
267.

2

0007270000

0007270-000

572－267

最新個人識別法学

根本顕太郎・著

松華堂書店

昭和５

ABH

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

26.12.1.

コ-2175
1

根本顯太郎著

最新個人識別法學

東京
松華堂發行

572-267

序言

私カ今回本書ヲ著述致シマスニ當ツテ第一ニ考慮セネハナラヌコトハ斯學ノ研究目的及ヒ實際方法ヲ如何ナル順序ニヨリテ論述シタナラハ最モ能ク大方諸士ニ了解サレ得ルカノ問題テアリマス。元來斯學ノ研究ハ難解テアルト一般ニ認メラレテ居ルノテアリマスカ其ノ原因ハ他ノ一般科學ノ如ク編述カ系統的テナカツタリ又論述ガ理論的テナカツタコトニ歸スル樣ニ思ハレルノテアリマス。此ノ缺點ニ鑑ミマシテ本書ハ爾來ノ著述ニ一層考慮ヲ加ヘマシテ大方諸士ノ御了解ニ便スル次第テアリマス。

本書ハ以上ノ理由ニ基キマシテ次ノ目的ヲ以テ編述シタモノテアリマス。

第一ニ本書ハ斯學ノ使命及ヒ任務ハ如何ナルモノテアルカ又斯學ノ社會ニ對スル效益ハ幾何テアルカ又斯學ノ今後ノ改善進歩ハ如何ニセネハナラヌカ先ツ最初ニ此等ノ問題ヲ明カニシ且ツ實例ヲ擧ケテ斯學研究ニ便シタノテアリマス。

近來個人識別法ノ發達ト共ニ斯法ノ運用ハ益々敏活ト精緻ヲ要スルニ當リ特ニ斯法最善ノ適用ヲ研究致シマス斯法基礎學ニ關スル本邦書ハ殆ント絶無ト云ツテヨイノテアリマス、故ニ本書ハ司法實務家ノ爲メ斯學講習用ノ教科參考書トシテ編述致シタノテアリマス。

次ニ本書ハ尙ホ進ンテ專門ニ斯學ヲ攻究セント欲スル大方諸士ノ爲メニ註解及ヒ備考ヲ附シ且ツ本邦及ビ歐米ノ參考書ヲモ掲ケテ以テ研鑽ノ資ニ供シタノテアリマス。

本書編著ノ目的ハ如斯次第テアリマシテ此ノ小冊子ヲ以テ今日最新科學ノ新建設ノ爲ニ聊カ資料トナルコトヲ得ハ余ノ最光榮トスルトコロテアリマス。

昭和五年十一月

著者識

附記

本書ニ於ケル指紋法ノ說述ハ專ラ指紋法ノ原理ヲ解說スルヲ以テ目的トシテ居リマス。

指紋分類法ニ於テ內端ノ標準點ハ中核蹄線ノ肩點又ハ中核蹄線ノ內頂點及外頂點ヲ標準トスル三種ノ說ガアリマスガ本書ニ於テハ夫等各說ノ是非ヲ論セス專ラ現行規程ノ原則原理ト致シマス基礎學理ヲ解說シテアリマスカラ其點ハ現行規程ト對照シテ御了解ヲ願ヒマス

本書附錄ニ於ケル指紋取扱規程ハ其後改正セラレマシタカラ豫メ御承知ヲ願ヒマス。

本書第一章第二章ニ於テハ個人識別法學史研究ニ就テ說述シ之レヲ緖論ト致シマシタ、第三章第四章ニ於テハ指紋法ノ理論及應用ヲ說述シ之レヲ本論ト致シマシタ第五章ニ於テハ社會政策及行刑政策ニ關スル最近個人識別法ノ情況ヲ說述シ之レヲ結論ト致シマシタ。

本書ハ以上ノ如ク專ラ斯法ノ基礎學トナル原理原則ヲ解說シ以テ指紋法講習ニ

際シ指導ノ任ニ當ラルル諸賢ノ參考用ニ供スル爲メ著作致シマシタモノデアリマスガ尙ホ編纂及校訂上ニ不備ノ點ガ少ナクナイコトト存ジマスガ之レハ孰レ次版ニ於テ訂正增補スル心算デアリマスカラ宜シク御諒察ヲ願ヒマス。

本書ニ於テ尙ホ御了解ノ出來難イ箇所ガアリマシタラ松華堂發行ノ指紋法大意又ハ拙著指紋法解說ニ就キ御參考願ヒタイノデアリマス。

昭和五年十一月

著者識

最新 個人識別法學目次

第一章　個人識別法概論……一
第一節　總說……一
第二節　指紋法……五
一　指紋ノ原則……五
二　指紋法ノ研究及目的……七
第三節　指紋法制度ト其沿革……一六
第二章　比較個人識別法……二七
第一節　人體測定法ト指紋法……二七
一　序說……二七
二　人體測定法及指紋法……二七
第二節　指紋法ノ諸方式……三五
第一　分類法……三六
第二　分類法(副分類法)……三八

第三章　指紋法ノ組織……五七
第一節　指紋原紙……六三
一　原紙作成法……六三
二　指紋押捺法……六三
三　器具ノ用法……六四
第二節　指紋分類式及原紙排列法……六六
一　指紋分類式……六八
二　原紙保存函及索引法……六八
第三節　指紋法實務……六九
第一款　指紋取扱規定……七〇
一　原紙取扱方法……七〇
二　原紙樣式及記載要旨……七〇
第二款　原紙管理法……七一
一　原紙整理……七三
二　原紙ノ檢査及記入……七三
三　保存紙ノ樣式及設備……七五
四　氏名索引法……七五
第二款　指紋統計……七六
第四章　個人識別法學ト犯罪搜査學ノ原理及應用……七六
第一節　總說……八一
第二節　指紋利用ノ實例……八一
第三節　指紋鑑識法……八八
第一款　指紋印象……八八
第一　線……九八
第二　線ノ性質上ニ於ケル不變不同ノ原則……九八
第三　線ノ特性及名稱……一〇一
第四　線ノ種類……一〇四
第二款　對照法……一〇七
第三款　複寫法……一〇八
第五章　結論……一一七

附錄目次

指紋原紙取扱規程……一三一
指紋分類學要覽……一五〇
指紋法用語ノ調査及研究……一五八
指紋法用語一覽表……一六四
附圖……一六九

最新個人識別法學

根本顯太郎著

第一章　個人識別法概論

第一節　總說

茲ニ個人識別法ニ就テ說述スルニ當リ先ツ第一ニ個人識別法ノ意義及性質ヲ簡單ニ說明セネハナラヌ近世個人識別法ト謂フト吾人ニハ耳新ラシク聽エルカ之ハ個人ノ異同ヲ識別スルコトヲ目的トスル制度ヲ主眼トスルモノヲ稱スルノテアル。

吾人ハ日常生活ニ於テ最モ緊急ニ最モ痛切ニ必要ヲ感スルコトハ自己ヲ他人ト混同スルコトナク完全ニ證明シ且ツ又他人ノ異同ヲ確實ニ鑑別スルコトテアル。

凡ソ人カ集合體ヲナシテ社會ヲ組織スルニ至レハソコニ各個人ヲ區別認識スルト謂フコトハ自然

的ニ必要ニナツテクルモノテアツテ如何ニ幼稚ナ野蠻人部落テモ人間ニハ夫々名カアルトカ其ノ他何等カノ方法ヲ人々ノ間ニ區別カ立テラレテ居ルモノテアル又吾々祖先ノ未開時代テアツタ古代ニ溯ツテ見マシテモ今日所謂個人識別法ノ萠芽トモ認メラルヘキモノカ知ラス識ラス慣習上ニ行ハレテ居ツタ形跡カアルノテアルソレカ近代ニ至ツテハ漸々其ノ必要ニ迫ラレ斯レカ制度トナリ法規トナツテ現ハレタ次第テアツテ今日ノ戸籍ノ制度ナトハ第一ニソノ例テアル此ノ如ク今日文明國ニ於テ社會秩序ヲ保ツ上ニ如何ニ個人識別ノ方法カ必要テアルカト謂フコトカ了解サレルノテアル尙ホ最近ニ至ツテハ吾人人類ハ先天的ニ個別的ニ人體及精神上ニ區別ヲ生シテ居ルコトカ發見サレ種々ナル研究カ行ハレテ居ルノテアル試ミニ吾々人體ノ外形カラ觀察シテモ各人ハ第一面貌ニ相違カアル骨格ニ相違カアル尙ホ之ヲ仔細ニ見ルト目、鼻、耳、口、手、足、身長、頭、額、毛髮等際限ナク數ヘラレルノテアルカ今日ノ研究テハ吾人ノ肉體ハ微細ナル血球ニ至ルマテ相違カアルコトカ實驗サレテ居ルノテアツテ吾人ノ身體ハ一見同樣テアル樣ニ見エテモ微細ノ點ニ至ルト悉ク相違點カアルノテアル今日ノ指紋法テアルトカ人體測定法テアルトカ謂フ個人識別法ノ基礎ハ實ニ此ノ自然的ノ原理ヲ應用シテ成立ツテ居ルノテアル(註一)。

(註一) 本邦ノ古代ニ於テ我々祖先カ使用シ來ツタ貸借關係ノ證文ヲ見ルト今ノ印章ノ代用トシテ手ノ食指又ハ中指等ノ全部ノ型ヲ氏名ノ下ニ押捺シタモノカアル蓋シ之ハ各人ノ指節ノ長サカ互ニ異ナルモノテアルト謂フ信念カラ自己證明ニ用

キタルモノテアル即チ當時ノ社會ニ於テハ之ヲ以テ一種ノ證據ト認メタノテアル夫ヨリ後世ニ至ツテハ手形、花押、爪印、拇印、印章制度等カ發達シテ個人識別ノ法制カ幼稚ナカラ制定サレテ居ツタノテアル此等ノ事實ヲ尙ホ詳細ニ知ラウト思ヘハ「古事類苑ノ政治部、印章制度」「廣文庫ノ手形拇印爪印」ノ部ヲ參照ニナレハヨイ

尙ホ世界各國ノ古代刑法ニ於テモ不完全ナカラ個人識別法ノ應用カ認メラレルノテアル即チ普通犯罪人ニ對シテハ身體中執レノ局部タルヲ問ハス衣類ヲ蔽フヘキ部分ニ犯罪ノ種類ニヨリ特殊ノ黥印ヲ施シ犯罪人識別ノ方法トシテ居ツタノテアル又我國ノ例テハ昔ハ罪人ノ腕又ハ額ニ刺文ヲ施シ又ハ其ノ鬚ノ毛ヲ拔イテ標シトシタノテアル後ニナツテ罪人ハ其ノ腕ニ上リ龍下リ龍ヲ彫ツテ此ノ刺文ヲ隱シタト謂フ話テアル以上ハ孰レモ往昔ニ於ケル個人識別法ノ例テアルカ當時ノ識別法ノ手段ハ今日ノモノニ比較スレハ甚タ幼稚野蠻タルコトヲ免レナカツタノテアル之ニ依ツテ見テモ昔時ヨリ種々個人ノ異同ヲ識別スルコトニ付テハ苦心ヲシテ居ルコトカ了解出來ルノテアル

個人識別法ハ之ヲ二種トシ一ヲ形式的個人識別法ト謂ヒ他ノ一ヲ實體的個人識別法ト謂フノテアル廣義ニ於テハ個人識別法ハ形式的個人識別法及實體的個人識別法ヲ含ムモ今日個人識別法ト謂フノハ實體的個人識別法ヲ謂フノテアツテ人體測定法及ヒ指紋法ノ如キハ之ニ屬スルノテアル。(註二)

(註二) 蓋シ形式的個人識別法ノ標準ハ人ノ身分關係一切ヲ登錄スル戸籍簿タルコトハ各國共ニ一致スル所テアル我國ニ於テハ法律ヲ以テ戸籍簿ニ關シ規定スルトコロアリ即チ人ノ出生アリタルトキハ屆出ノ義務カアルノテアル先ツ名ヲ定メ出生ノ旨ヲ屆出ルコトヲ命セラルルモノテアル苟モ人ノ異同ハ此ノ屆出ニヨリ決セラレルノテアル。

以上ノ如ク人ノ身分關係ヲ登錄スル戸籍簿ハ單ニ形式的ニシテ實體上個人ノ異同ヲ識別スルコト能ハスト雖モ今日一定ノ人カ如何ナル氏名、年齡其ノ他ノ身分關係ヲ有スルヤニ就テ明確ナル證明ヲ與フルモノハ戸籍簿ニ外ナラス此ノ證明ハ法律上公正ノ力ヲ有スルモノナルカ故ニ戸籍簿上ニ於ケル身分關係ハ人ノ異同ヲ判別スヘキ法律上ノ標識ナリト謂フコトヲ

得ルノテアル人々ハ自己ヲ表示スル方法トシテ種々ナル名稱ヲ用フルコトヲ得然レトモ法律ノ認ムル所ハ獨リ戸籍簿上ノ氏名ニ限ルノテアル左レハ戸籍簿上ニ於ケル身分關係ハ形式的ナリトハ言ヘ法律上之ヲ措テ他ニ人ノ身分關係ヲ示スヘキ標準ナキ所以ヲ知ルコトカ出來ルノテアル斯ノ如ク形式的個人識別法ハ法律上ノ身分關係ヲ明ニ知ルノ利アリト雖モ實體的ニ個人ノ異同ヲ識別スルノ效カナイノテアル形式上個人ノ異同ヲ判別スル戸籍ヲ整理保存スル外尙ホ現代ニ於テハ實體上個人ノ異同ヲ識別スル方法即チ個人識別法ヲ講スル必要ヲ生スルニ至ツタノテアル。

諸般ノ法律關係中此ノ必要ヲ感スルコト最モ深キモノハ刑事關係テアルサレハ各國ノ學者殊ニ刑法家及ヒ刑事實務家ハ相競フテ實體的個人識別法ノ案出ニ精力ヲ盡シタノテアツテ斯ノ如クニシテ個人識別法カ刑法學者若クハ刑事實務者ニ依ツテ研究發達セシメラレ今日ノ大成ヲ來シタ所以テアル。

個人識別法ノ歷史ハ吾人ニ最モ興味アリ且ツ有益ナル實例テアツテ而シテ吾人ハ之ニヨリ先ツ個人識別法ノ目的ニ就テ知ルトコロカアルテアラウ現代ノ個人識別法ハ單ニ個人ノ異同ヲ判別スルニ止マラス社會上ノ諸種ノ不正行爲及犯罪ヲ豫防スル方法トシテ採用セラルルニ至ツタ即チ爾來實體的個人識別法トシテ一般ニ行ハレタノハ「ベルチオン」氏ノ人體測定法テアツタカ近來指紋ニヨル實體的個人識別法カ發見サレテヨリ世界各國ハ競フテ之ヲ採用シ我國ニ於テモ遂ニ犯罪人異同識別法トシテ指紋法ノ實施ヲ見ルニ至ツタノテアル。

指紋ニヨル個人識別法ハ其ノ當初ニ於テハ單ニ神幻神祕ナル新奇術又ハ未開野蠻ナル一種好奇心ノ方法ト看做サレ少シモ之ヲ顧ル者カナカツタノテアルカ遂ニ近代ニ至リ指紋ノ個人識別法ニ及ホス效果ノ偉大ナルコトカ駁論ノ餘地ナキ諸大家ノ證明ヲ得ルニ至リ漸ヤク識者ニ愼重ノ態度ヲ以テ研究セラレ殊ニ斯法ハ刑事當局者ニ多大ノ刺戟ヲ與ヘ今日ノ普及ヲ觀ルニ至ツタノテアル。

吾人ハ指紋法學習ノ第一階梯トシテ此等指紋法ニ甚大ノ功獻ヲ致シタル學者ノ研究及ヒ實驗ニ就テ多クヲ知得セネハナラヌ即チ指紋法ノ研究及目的竝ニ其ノ順序發達ヲ知ルコトヲ要スルノテアル以下次章ニ之ヲ述ヘン。

第二節　指紋法

一　指紋ノ原則

指紋法ハ各個人ノ有スル指頭ノ乳頭線即チ指頭隆線ヨリ成ル無限ノ種類ヲ有スル指紋ヲ基礎トナスモノテアツテ即チ各個人ノ指紋ハ指頭內面ニアル隆線ノ組織形狀カ一種ノ印章ノ如ク各個人固有ノ特徵ヲナス紋樣ヲ創リ決シテ他人ト相混同スルコトナク而シテ人ノ出生ヨリ死亡ニ至ルマテ決シテ變更スルコトナキモノテアル之ヲ指紋ノ原則ト謂フノテアル。(註三)

斯クノ如ク指紋ノ組織カ眞ニ際限ナキ特徵ト終生不變萬人不同ノ原則ヲ有スルコトハ指紋研究ノ諸學者カ蒐集セル研究材料又ハ其ノ實驗ト著書ニ據リ詳知スルコトカ出來ルノテアル。

爾來多クノ指紋學者カ證明スルトコロニヨレハ指頭隆線ハ種々ナル性質ト種々ナル特徵ヲ有スルヲ以テ假令相類似スル指紋ニ在リテモ全然同一ナル指頭隆線ヲ有スルモノハ決シテナイノテアル若シ隆線ノ特徵相同シク指紋ノ紋樣相同シキモノアリトセハ之レ同一人ノ指紋タルコト確

實ニシテ他人ノ指紋ニ非サルコトヲ證明スルモノテアル故ニ偶々各人相類似ノ指紋ヲ有スルコトアリトスルモ其指紋ヲ精密ニ檢スルトキハ其ノ指頭隆線ニ大小アリ長短アリテ相同シカラス尙大小長短ハ相符合スルモ一ハ細クシテ一ハ太キ等自ラ其ノ間ニ差異ヲ生シ全然正確ニ符合スルモノナク從ツテ同一人タル外ハ必ス或個所ニ何等カノ相違點アルヲ發見スルノテアル。

以上ノ如ク指紋ハ各自相同シカラサル自然ノ體型カアツテ各人ノ指紋カ互ニ相違アルコトハ恰モ各人ノ面貌風采カ異ナルト同樣テアル此ノ指紋ノ特徵ハ多クノ指紋學者ノ說明ヲ俟タスシテモ容易ニ實驗シテ了解スルコトカ出來ルノテアル。

試ミニ友人ノ指紋ヲ檢シ之ヲ己レノ指紋ト對照スルトキハ必ス其ノ相同シカラサルコトヲ見ルヘク又家族各々其ノ指紋ヲ對照スルモ決シテ同一指紋ヲ見ルコト能ハサルモノテアル之ヲ何百何千何萬ノ人々ニ及ホシテ實驗スルモ同一指紋ハナイノテアル偶々類似ノ指紋ヲ發見スルト雖モ其ノ線ノ大小長短ヲ精密ニ比較對照シ指紋ノ體型ヲ見ルトキハ同一人ノ指紋ニ非サルヨリハ斷シテ其ノ相同シカラサルコトヲ發見スルノテアル斯ノ如ク指紋ハ親子兄弟ノ血族間ト雖モ同一ノモノハ決シテ存在スルコトナク又自己ノ手ニ於ケル指紋ヲ檢スルモ左右十指悉ク互ニ相異ナルモノテ決シテ同一指紋ハ存在スルコトカナイノテアル。(註四)

(註三) 陰線ハ人體ノ發汗作用ヲナス目的ヲ以テ指頭內面ノ皮膚カ乳頭狀ニ隆起セルカ故ニ之ヲ乳頭線又ハ指頭隆起線又ハ單ニ陰線ト謂フノテアル。

(註四) 平素日々ノ實驗ハ吾人カ容易ニ指紋形狀ノ種類無限ナルコトヲ立證シ得ルモノテアル卽チ指頭隆線ニヨリ形成サレタル指紋ハ吾人ニ最モ接近シテ居ル血族關係者間ニ於テ瞭然タル差異アル事ヲ示シテ居ル又血統、遺傳(父母子孫ノ關係)ノ影響ニ據リ指紋ノ重要價値ヲ何等喪失スルモノテナイ事ヲ知ル又男女同性間、異性間、人種、氣候、緯度、文明ノ程度等モ指紋ノ特徵上ニ影響ヲ及ホスコトナキモノテアル。

二　指紋法ノ研究及目的

指紋ハ初メ往古ノ巫女、巫術師等ニヨリ個人ノ運勢ヲ豫言スル材料ニ利用サレタルモノテアツタカ輓近ニ於テハ指紋ノ線ノ特徵ハ個人ノ符合ヲ確定スル材料トシテ價値アルコトカ一般ニ知ラレ世界諸國至ル所ノ警察官憲ハ總テ個人識別ノ目的ニ對シ此ノ指紋法ヲ採用シ多大ノ效果ヲ擧ケテ居ルノテアル。

指紋法カ斯ノ如ク公益多大ナルハ今ヤ何人モ疑ヲ容レサルトコロニシテ而シテ用務ニ對シ其ノ學理上ノ適用ニ對シ夥多ノ事實ト實驗ヲ獲得セルモノナルコトハ識者ノ既ニ知ルトコロテアル。

今茲ニ指紋法ノ發達ヲ助成シ以テ指紋法研究ノ系統的順序竝ニ編成ニ功献セル幾多學者ノ研究實驗及學理ヲ左ニ揭述セント欲スルノテアル指紋法ニ於ケル此ノ細微ナル科學的研究ノ起源ハ西曆一八二三年(以下西曆ヲ略ス)ニ溯ルモノニシテ「ドクトル、フアーン、エヴアンヘリスタ、プルキン

イエ」氏ニ其ノ功ヲ負フモノテアル卽チ氏カ獨逸ブレスラウ大學ニ於テ提出セル大學論文「觸感機關ト皮膚組織ノ生理研究詳解」　是レナリ而シテ氏ハ指頭隆線ノ紋形ヲ類別シテ九種トナシタ。（註五）

（註五）「プルキンイエ」氏ノ指紋法

「プルキンイエ」氏ハ指紋ヲ分類シテ(1)弓狀紋、(2)突起弓狀紋、(3)甲種蹄狀紋、(4)乙種蹄狀紋、(5)有胎蹄狀紋、(6)渦狀紋、(7)楕圓渦狀紋、(8)環狀紋、(9)二重及双胎蹄狀紋ノ九種トシタ此等指紋ノ學名ハ凡テ羅甸語テ記サレタノテアツテ氏ハ實ニ指紋ノ初メテノ命名者テアル。

此ノ分類法ハ今日ヨリ之ヲ見レハ不完全ヲ極ムト雖モ博士カ指紋ヲ分類スルノ端ヲ啓キタル功ハ決シテ之ヲ沒ス可カラサルモノテアル。

氏ノ此ノ研究ハ遂ニ同時代ノ法醫學者ニ於テ細心ノ注意ヲナサシムルニ至リ又後年幾多ノ指紋研究學者ノ學理ノ基礎ヲナスモノテアル。

「プルキンイエ」博士以後ニ著名ナル指紋學者ハ「ガルトン」氏、「フォルジオー」氏、「フレ」氏、「ヘンリー」氏、「ブセッチ」氏、「ロッシエル」氏等テアル。

而シテ「プルキンイエ」氏ノ指紋研究ハ單ニ之ヲ生理學上ニ於テ學理的ニ考察セシノミテ一八五八年ニ至ルマテ何人モ未タ個人ノ符合ヲ確定スル目的ニ對シ指紋ヲ適用スルコトカナカツタ然ルニ印度ベンガル民政廳事務官「サー、ウイリアム、ジエー、ハーチエル」氏ハ公正證書ノ作成ニ對シ初メテ指紋ヲ實際ニ應用シタノテアル卽チ有筆者ニ對シテハ署名ニ添ユルニ拇指指頭ノ指紋ヲ捺押セシメ無筆者ニ對シテハ指紋ノ捺押ノミヲ以テ署名ニ代用セシメルノテアル此ノ方法ヲ應用スルコト二十八個年ノ久シキニ亘リ甚タ好結果ヲ收メタノテ同地ノ立法廳ニ於テハ遂ニ法律ヲ以テ此ノ新法ヲ認可スルニ至ツタノテアル印度ニ於テハ今日猶ホ契約證書ニ對シ「ハーチエル」氏ノ創設セル方法ヲ應用シテ居ルノテアル。（註六）

（註六）ハーチエル氏略傳

中ノ際著（William Herchel,Skin Fuurrows of the Hand) 1880

指紋法創始者トシテノ功績ハ實ニ「サー、ウキリヤム、ハーチエル」氏ニ歸セナケレハナラヌ氏ハ個人識別ノ方法トシテ指紋印象ノ實際的效用ヲ發見シテ其ノ名聲ヲ擧ケタ人テアル氏ハ彼ノ天王星ノ發見者トシテ勇爵ヲ授ケラレタ有名ナル星學者兼化學者「サー、ヂョン、フレデリク、ハーチエル」氏ノ孫テアツテ氏ハ英國牛津大學ヲ卒業ノ上マスター、オブ、アーツ、ノ學位ヲ獲得シ印度ノ官吏トシテベンガル洲ニ赴任シタ同洲ノフーリー縣ニ多年奉職中氏ハ個人識別ノ方法トシテ指紋印象ヲ實際的ニ應用スル最初ノ實驗ヲ試ミタソレカ丁度一八五九年テアル最モ氏ノ直接ノ目的ハベンガル司法裁判所ニ於テ當時盛ンニ行ハレタ被告人ノ替玉ヲ見破ルコトニ適用シタノテアツタ卽チ或ル特別ノ場合ヲ除ク以外ニ署名ノ比較ノミニ依ツテハ到底防止スルコトカ出來ナイノテ指紋ヲ利用スルニ至ツタノテアル之レカ好成績テアツタノテ氏ハ印度全般ニ亘ツテ民事上ノ目的ノ爲メニ此ノ指紋制度ヲ採用スル推薦的報告ヲ發表シタカ此ノ忠告ハ容レラレナカツタ氏ハフーリー縣ヲ去ツテ他ノ方面ノ事業ニ與ハルニ至ツタノテ此ノ企劃モ其ノ儘ニ拋棄サレテ居タノテアルカ氏ハ其ノ後ベンガル洲徵稅員會ノ書記コーチベハー洲ノ委員トシテ勤メテ居タ其ノ間モ此ノ制度ノ研究ニ對スル氏ノ熱心ハ少シモ減退シナカツタ併シ乍ラ氏ノ此ノ努力ハ遂ニ酬キラレテ其ノ後三十年ヲ經タ頃ニハ此ノ制度カ氏ノ豫期シタル以上ニ世界ノ諸地方ニ廣ク用

キフルル線ニナツタノテアル

「フランシス、ガルトン」氏ハ有名ナル英國ノ人類學者ニシテ氏ハ人類學上ヨリ指紋ヲ研究シ又「ベルチオン」氏ノ人體測定法ノ分類法ニ基キ個人識別ノ方法トシテ指紋ヲ利用スルコトノ可ナルヲ研究シ遂ニ一八八八年倫敦市ロイヤルインスチウートニ於テ開設セラレタル會議ニ指紋法ノ適用ヲ主張シテ時ノ政府ニ認メラレタノテアル。

氏ノ指紋研究中最モ有名ナルハ指紋法ノ基礎ヲ確立セル指紋原則ノ發見及其ノ學理ノ證明ニシテ又最モ指紋法ニ功獻セルハ指紋ノ分類法ヲ進歩改善セシメタルコトテアル。

卽チ氏ハ人ノ指紋ヲ組織スル指頭隆線ノ性質及特徵ヲ研究シ人ノ指紋ハ終生不變ニシテ萬人不同ノ原則アルコトヲ證明シタノテアル又氏ハ指紋ト遺傳ノ關係ヲ研究シ其ノ多少ノ例外ヲ除ク外遺傳カ指紋ノ構造上ニ於テ其ノ識別法タル效力ヲ變更スルコトヲ得ルカ如キ程度ニ於ケル影響ヲ及ホスコトナキモノナルコトヲ證明シタノテアル。

「ガルトン」氏ノ指紋學ノ學理一度發表サレテ以來數多ノ學者ハ種々ノ目的ヲ以テ盛ンニ指紋ノ研究ニ從事スルニ至リ殊ニ法醫學者及解剖學者ハ指紋ノ隆線竝ニ其ノ特徵ヲ利用スル實際上ノ適用ニ關シ實驗研究スルトコロアリ且ツ有益ナル著述ヲ發表シタノテアル殊ニ佛國學者ノ研究ハ「ガルトン」氏ノ學理ヲ基礎トシテ研究シ之ニ一層有力ナル證明ヲ與ヘ尙指紋ト刑事人類學トノ關係ニ於ケル研究ニ及ヒ斯學ニ有益ナル效果ト進歩トヲ與ヘタモノテアル。（註七）

（註七）ガルトン著

指紋識別及索引法（Francis Galton, Method of indexing finger marks）1891,

指紋學（——, (Finger Prints) 1892.

「ガルトン」氏ハ「ハーチエル」氏ノ後ヲ承ケテ斯法ノ發達ニ力ヲ盡シタ人テアル

氏ハ數十年ニ亘リテ此ノ方法ノ研究ニ一身ヲ委ネ以テ大ニ之カ進歩ヲ促シタコトハ前述デ明カデアル氏ハ卽チ「ハーチエル」氏カ英領印度ニ於テ蒐メタル各種ノ材料ニ基キ一層之カ研究ノ歩ヲ進メ各種ノ實驗ヲ經テ人ノ指頭ニ存スル隆線ハ故意ニ因ルカ又ハ過失ニ基キ指頭ヲ傷フニ非サレハ人ノ一生ヲ通シテ變更セサルヘキコト及ヒ各人ノ指紋ハ互ニ相異ナリ同一人ノ指紋ニ非ラサレハ決シテ符合セサルコト等ヲ證明シタノテアル。

氏ハ其ノ實驗トシテ蒐集セル六百四十億個ノ指紋中一トシテ絕對ニ類似スル所アルモノナシト謂フ。

氏ハ又實驗トシテ人ノ一生ヲ小兒、青年、壯年、老年ノ四期ニ分チ此ノ各時期ニ於テ人ノ指頭隆線ニ變更ヲ來スコトナキヤ否ヤヲ精密ニ試驗シ其ノ結果指頭隆線ニ毫末ノ變更ヲ生セサルコトヲ證明シタノテアル。

如斯「ガルトン」氏ノ多年ノ研鑽ハ以テ指紋ニヨル個人識別法ノ基礎ヲ建設スルニ至ツタノテアル。

佛國リヨン市ノ「ドクトル、フオルジオー」氏ハ個人識別法ト醫學ニ關聯シテ特ニ指紋ニ就キ深ク研究セル所カアツタ實ニ氏ノ著述論文ハ科學上ノ眞價ヲ有スル實驗ヲ網羅スル優秀ナル研究テアツテ氏カリヨン大學ノ法醫學研究室ニ於テ實驗セル試驗ハ總テ先進ノ諸學者カ到達セル根本ノ結論ヲ確證スル好結果ヲ奏シタモノテアル。（註八）

「ドクトル、フレ」氏ハ又佛國リヨン市ノ法醫學者ニシテ氏ハ指紋ニ關スル豐富ナル實驗ヲ蒐

集シ以テ斯學ノ研究ヲ簡易ナラシメンカタメ一定ノ順序ニ據ル指紋ノ分類法ヲ設定シ後進學者ノ發見ト類別ノ基礎ヲ設置シテ本問題ノ研究上ニ效力アル材料ヲ貢献セル所カアツタノテアル。(註九)

佛國學者ニシテ尙ホ著名ナルハ「ドクトル、アッシ、ド、ヴアリニー」氏及「アリックス」氏ニシテ「ヴアリニー」氏ハ一八九一年巴里市ノ「科學雜誌」上ニ指紋ニ關スル好個ノ論文ヲ掲載シ以テ「ガルトン」氏ノ學理ヲ初メテ佛國ニ紹介シ指紋ノ有用正確ニシテ能ク科學ニ適セルヲ贊シ此ノ方法ノ適用ヲ勸誘セル所カアツタ氏ノ論文ハ大ニ佛國學界ニ斯學ノ研究心ヲ喚起セルトコロアリ「フオルジオー」氏及ヒ「フレ」氏ノ如キハ實ニ氏ノ論文ニ感化サレ「ガルトン」氏ノ學理ヲ研究セルモノテアル。

又「アリックス」氏カ深ク傾注セル研究ハ精神病者ニ於ケル指紋ノ特徴ノ關係テアツテ又動物ノ指紋ト人間ノ指紋ノ特徴ノ研究ハ其ノ著名ナモノテアル氏ノ研究ハ後ニ「フオルジオー」氏及ヒ「フレ」氏ノ實驗ニ好材料ヲ提供シタノテアル。

(註八) 「フオルジオー」氏ノ研究ハ指紋ノ解剖學上ニ於ケル獨特ノ特徴ハ永久不變ナルコトノ問題ニ關シ有用ナル研究ナシ且ツ至當ナル其結果ヲ發表シテ曰ク「指紋ノ乳頭線ノ形狀年々變更シ其ノ指紋ノ特徴ヲ示ス細點ニシテ若シ微少ノ變化ヲ生スルコトアリトセハ其ノ重要ナル價値ハ忽チニシテ消滅シ指紋形狀ノ正確ナル符合ヲ示ス確固不動ナル證據ハ忽チニシテ何等ノ價値ヲ有スルコトナキニ至ルノテアル然ルニ指紋ニ於テハ幸ニシテ斯ノ如キ變化ヲ呈スルコトナキモノテアル是ヲ以テカ新生兒ノ指紋ハ老人トナルニ至ルマテ常ニ變化スルコトナク年齢ヲ重ヌルニ從ヒ指紋ノ形狀ハ多少鮮明ナルノ觀ヲ呈スヘシト雖モ指紋ノ線ノ性質ハ總テ其ノ細目、方向、分岐、交叉ニ於テハ全然不變ナリ玆ニ於テ指紋ノ永久不變ナル事實ハ科學上ニ於テ承認スル原則ナリトス」ト論證シテ居ルノテアル。

「フオルジオー」氏ハ又「ガルトン」氏ノ如ク指紋線ノ永久不變ナルコトヲ實驗スル爲メ木乃伊ノ指頭ヲ試驗シ古人ノ屍體ニ鮮明ナル指紋ノ存在ヲ認メ得タコトヲ證明シテ居ル。

氏ハ尙ホ又「ガルトン」氏カ一定ノ程度ニ於テ指紋ノ種類中ニ遺傳アルコトヲ承認セル問題ニ就キ氏ノ實驗ハ遺傳性影響ノ全然無關係ナルコトヲ確言シテ居ルノテアル「フオルジオー」氏曰ク「余ハ指紋中ニ遺傳ノ形跡ヲ認メタルコトナシ」ト。

(註九) 「フレ」氏ノ研究

「フオールジオー」氏及ヒ「フレ」氏ノ實驗ハ重ニ「ガルトン」氏ノ研究ヲ確ムル爲メニナサレタルモノテアルカ本問題ノ如キハ夫レニ一歩ヲ進メタモノテ卽チ精神病者及犯罪人ニ特有ナル指紋ノ特徴ヲ發見セントスル研究デアツテ本問題ハ刑事人類學ニ屬スルモノテアル。

「フレ」氏ハ自己ノ診斷セル精神病患者ノ指紋中ニ於テ「アリックス」氏カ猿猴ニ於テ實驗セル指紋ノ種類ヲ百人ニ付キ一六ノ割合ニ於テ發見シ「フオルジオー」氏モ尙以上ノ割合ヲ以テ發見セリト謂フ。

蓋シ此形狀ハ人類ニ類似スル獸類ニ於テ普通ナリト雖モ人類ニ於テハ極メテ稀ナルモノテアルヲ以テ斯ノ如キ猿猴ノ指紋ニ最モ接近スル形狀ヲ有スル指紋ノ人間ハ卽チ是レ動物性ヲ有スルモノニシテ諸般ノ種類ニ屬スル不良民テアルト斷定スルノテアル。

又「フオルジオー」氏カ佛國ノ犯罪人ニ就キ實驗セル結果ハ「アリックス」氏ノ實驗セル形狀ニ類似スルモノ二三%ヲ發見シ「フレ」氏モ同樣ノ結果ヲ取得セリト謂フノテアル。

佛國刑法學者ハ以上ノ如キ研究ト論據ニ基キ指紋ノ形狀ノ特徴ニ據リ不良民及犯罪人ヲ普通ノ良民ヨリ區別スルコトヲ得ルヲ可能ナリト認ムルノテアル。

然シ斯ノ如キ特徴ノ立證ハ犯罪人ヲ先天性ニヨル者ト論定スルモノテアツテ指頭隆線ノ特別ナル形狀ハ一種ノ紋樣トシテ身體ノ機關ヨリ發スル不可抗力ニ據リ犯罪ニ陷ルヘキ刺擊ヲ蒙ル精神上ノ不具者ヲ識別スルニ至ルモノテアツテ若シ此ノ方法ニシテ眞ニ確固タル證明ヲナスコトヲ得ハ刑事上ニ一進歩ヲ來スモノテアル。

然シ以上ハ重ニ佛國學者ノ研究ニ止マリ此ノ問題ハ刻下確定セル解決ヲ得タノテハナク今後更ニ新ラタナル研究ト堅忍不拔ノ實驗トニヨリ刑事人類學者及ヒ法醫學者カ將來著手スヘキ研究要件テアル。

備考　人類ニ酷似セル猿猴ニ多ク見ラレル指紋ハ螺旋形ヲナス渦狀紋テアツテ其ノ中心カ多少伸張スル形狀ノモノカ多クアルト謂フノテアツテ此等ニ就テハ「アリツクス」氏カ一八八八年「手及足ニ於ケル乳頭線ノ形狀ノ研究」ト謂フ論文ヲ發表シテ動物ノ指紋ト人間ノ指紋トヲ比較研究シテ人ノ精神狀態ニ就キ研究シタノテアル又英國テ有名ナル犯罪人ノ指紋ヲ見ルト中心ノ小サク縮少シタ有胎紋ノ指紋テアル又米國紐育市動物園ニ於ケル黑猩々ノ指紋ヲ見ルト楕圓形渦狀紋テアル。

最近ニ於テハ獨逸國ノ「ドクトル、ポール」氏ハ指紋ト個性及種族トノ關係又指紋ト性及遺傳ノ關係等ヲ研究シ確カナ實驗ヲ得タコトヲ發表シテヰル即チ氏ノ研究ニヨルト渦狀紋ト弓狀紋トノ配置ハ男ト女トテ大ニ異ナル事カ解ツタ更ニ注目スヘキ事實ハ意思薄弱者ノ指紋ハ悉ク蹄狀紋テアツタト謂フ又多數ノエヂプト學生ト獨逸學生ヲ比較シテ其間ニ種族的特性ノアル事ヲ發見シタ尙ホ指紋ト遺傳ニ就テハ次ノ如キ現象カアルヲ語ルノテアル即チ弓狀紋ヲ持ツ男女カ互ニ結婚スレハ其子ハ總ヲ弓狀紋テアルト又兩親ノ指ヲ研究シテ其ノ子ノ性能ヲ知リ得ルト謂フノテアル以上ノ研究ハ「ガルトン」氏ノ研究ト多少相違點カアルノテアルカ研究資料トシテ興味アルモノテアル又我國ニ於テハ現任市谷刑務所典獄補兒島三郎氏ハ個性ト指紋トニ就テ熱心ナル研究家テアツテ「指紋上ノ個人」ト云フ著述カアル。

「サー、エドワード、ヘンリー」氏ハ彼ノ英國ニ於テ有名ナル指紋法學者ニシテ氏ハ「ガルトン」氏以後ニ起リ大ニ斯學ノ發達ヲ促進シタノテアル氏ノ斯學ニ對スル功績ノ大ナルハ指紋ノ分類ヲ完成セシメ之ヲ個人識別法ノ實際ニ適用セシメタルニアル即チ氏ノ分類法ハ世之ヲ稱シテ「ヘンリー式」ト謂フノテアル此ノ「ヘンリー」氏ノ指紋分類法カ發表セラルルヤ英國及ヒ其ノ植民地ノ如キハ從來施行シ來リタル人體測定法ヲ廢シ全然氏ノ指紋法ヲ採用スルニ至ツタノテアル而シテ今日歐洲大陸ニ於テモ氏ノ指紋法ヲ採用セサル國ナキ程ノ普及ヲ見ルニ至ツタノテアル然レトモ氏ノ指紋分類法ハ稍ヤ複雜ニ過キ學習ニ容易ナラス之ヲ以テ尙ホ改良ノ餘地ナキニ非ス即チ「ヘンリー式」ニ對シ新法ヲ案出セルハ「ブセッチ氏」及「ロッシエル」氏テアル。

ヘンリー氏著書
指紋ト犯罪人與同識別法（E. R. Henry, Finger Print as a method for the indentigication of the criminals). 1899
指紋ノ分類ト指紋ノ歴用（——Classification and of finger prints). 1805—1900

亞爾然丁國ヴエーナス、エーアスノ個人識別所長「ユアン、ブセッチ」氏ハ「ヘンリー」氏ニ次テ有名ナル指紋法大家テアル氏ノ分類法ハ「ヘンリー式」指紋法ノ複雜ニ過キ實務上ノ不便尠ナカラサルニ因リ一層簡易ナル分類ノ新法ヲ案出シタモノテアル即チ氏ノ分類法ハ「ブセッチ式」又ハ「亞爾然丁式」ト稱スルノテアル氏ノ指紋法ニ於ケル功績ハ今喋々スルマテモナク顯著ナ事實テアル。

ブセッチ氏著書
亞爾然丁式指紋法（Tunn Vucetich, confrencia sobre el cistema dactiloscopico, Laplata) 1904

獨逸國ハンブルヒノ警視總長「ロッシエル」博士ハ以上ノ諸學者カ種々研究セル結果ヲ材料トシテ更ニ研究ヲ重ネ遂ニ斯學ヲ大成スルニ至ツタノテアル爾來英國其ノ他歐米諸國ニ於テ廣ク行ハレタル指紋法ハ「ヘンリー式」及ヒ「ブセツチ式」テアツタカ氏ノ指紋法ハ最新式ノモノト認メラレタノテアル卽チ氏ノ指紋分類法ハ「ヘンリー式」指紋分類法ニ比シ一層新機軸ヲ出シタルモノテアツテ其ノ分類法ノ特長ハ正確ニシテ何人モ容易ニ之ヲ學ヒ且ツ之ヲ實施シ得ルニアルノテアツタ氏ノ發明ニ成ル原紙排列及索引ノ方法ハ極メテ簡便ニシテ悉ク一定ノ數字ヲ以テ指紋ヲ分類スルノテアル此ノ分類法ヲ稱シテ「ロッシエル式」又ハ「ハンブルツヒ式」ト謂フノテアル我邦ニ於テハ則チ氏ノ法式ヲ採用シタモノテアル。

ロッシエル氏著書
ハンブルグ式指紋法 (Mr Roscher, Hand buchder Daktzloskopie) 1905

第三節　指紋法制度ト其沿革

印度ニ於テハ一八九二年初メテベンガル州ニ「ベルチオン式」人體測定法カ實施サレタ之レ實體的個人識別法採用ノ初メテアル次テ一八九四年ニハ「ガルトン式」ノ指紋法カ測定法ト共ニ併用サレタノテアル實ニ今ヨリ二十八年前ノ事テアルカソレハ未タ完全ナモノテハナカツタ遂ニ一八九七年ニ至ツテ卽チ「ハアチエル」氏カ印度ヲ去ツテカラ約二十年ヲ經テ當時印度ノベンガル州警察長官テアツタ英國ノ「ヘンリー」氏（後ニ倫敦警視總監）カ印度ノ警察部ニ指紋ノ制度ヲ採用シタ之レ實ニ世界ニ於ケル指紋法適用ノ嚆矢テアル其後「ヘンリー」氏ハ英國ニ還リ「ガルトン」氏ノ指紋學ニ基キ其ノ分類法ニ一層改良ヲ加ヘ一九〇一年七月ヨリ指紋法ノ制度ヲ英國及ヒウエールスニ於テ施行スルコトニナツタノテアル今歐米諸國ニ行ハルル指紋法式ハ概ネ氏ノ法式ニ倣ツタモノテアル。

南米諸國ニ於テハ此ノ年ノ前後ニ殆ント指紋法ヲ採用セサル國ハ無イ程テ就中亞爾然丁國ニ於テハ首府ニ中央識別所ヲ設置シ又本州裁判所管轄區域內四個所ニ各支部ヲ置キ「ブセツチ式」指紋法ヲ採用シ好成績ヲ收メテ居ルノテアル。

又ブエノス、アイレス州ニ於テハ同法ノ適用範圍ヲ擴張シテ大小ノ事項ニ於ケル憲兵隊ノ活動ニモ之ヲ適用シテ居ルノテアル。

又ブエーノス、アイレス州刑事訴訟法典中ニ於テハ左ノ條項ニ就キ指紋法ノ司法上ノ效果ニ對シ承認ヲ與ヘラレタノテアル。

一　個人識別所ハ個人識別ノ爲メ證據ヲ提出セントスルノ目的ヲ以テ起訴ヲ受ケタル被告ノ指ヲ撮取シ同指紋ニ前科事項ヲ添ヘ之ヲ當該判事ニ交附スヘシ。

二　總テ司法上ノ調査ヲ要スヘキ屍體ニ對シテハ指紋法ニ據リ其ノ埋葬前ニ於テ個人ヲ識別スヘシ當該判事ノ許可ナキトキハ同屍體ヲ埋葬スルコトヲ得ス犯ス者ハ罰金ニ處スヘシ個人識別所ハ埋葬ノ後チ屍體ノ實檢ヲ要スヘキトキ同屍體ノ狀態如何ニ據リ實檢ニ當リ豫メ個人ノ識別ヲ執行スヘシ。

三　新ニ逮捕セラレタル逃走者ハ個人識別所ニ於テ新ニ個人識別ヲ受クヘシ。

四　總テ起訴ヲ受ケタル被告ノ前科ニ關シテハ出獄者タルニ拘ハラス猶ホ同一ノ個人識別所ニ就キ其ノ書類ヲ請求スヘシ。

五　總テ釋放命令及同理由並ニ總テ有罪又ハ確定判決ノ停止及終了ニ關スル事項ハ之ヲ個人識別所ニ移牒スヘシ。

六　總テ犯罪ノ場所ニ於テ若干指紋ヲ遺留シ並ニ發見シ犯人ヲ識別スルノ資ニ供シ得ヘキモノト認定スルトキハ其ノ物件ノ全部又ハ一部ハ注意ヲ加ヘテ完全ナル狀態ヲ保存セシメ必ス之ヲ蒐集シテ個人識別所ニ送附スヘシ。

今日南米ニ於ケル指紋法制度ノ建設者トシテ「ブセッチ」氏ノ功蹟ハ實ニ偉大ナモノカアル氏ハ個人識別法ノ改良家トシテ世界ニ有名テアルコトハ前述ヲ以テ明カテアル氏ノ指紋法ニ關スル著述ノ劈頭ニ於テ曰ク「吾人ノ目的ハ先ツ近世ノ個人識別法ニ新徑路ヲ示サントスルニアリ而シテ本問題タルヤ實ニ研究ノ至難ナルモノアリト雖其ノ重要ナル制度ナルコト世界一般ノ周知スル所トナリテ其ノ研究ノ目的物及ヒ人類ノ裁判ニ對シテ世界共通ノ點ヲ有スルニ至レリ人類ノ裁判ハ個人識別ニ關スル事項ニ對シテハ從來多大ノ貢獻アリタルコト勿論ナリト雖尚ホ個人識別ノ過失並ニ錯誤アリテ害毒ヲ流シタルコト多大ナルモノアリ刑法上ニ於テハ寧ロ結果不良ナル個人識別法ノ存在セサランコトヲ冀望スルヤ素ヨリ辨ヲ俟タサル所ナリトス此故ニ本問題ハ眞面目ノ研究ヲ要シ且ツ改善ノ必要ヲ認ム是實ニ吾人カ全力ヲ集注シテ斯學ノ發達ヲ圖ル所以ナリトス此ヲ以テカ遂ニ本書ヲ公ニスルニ至レルナリ」ト。

氏ノ事業ハ人體測定法ノ實務ニ適セサルヲ認メ個人識別法ニ適用ノ目的ヲ以テ指紋ノ分類法ヲ研究スルコト十有餘年ニシテ遂ニ今日ノ主唱スル「ブセッチ式」指紋法ヲ發明シタノテアル

亞爾然丁共和國政府ハブエーノス、アイレス州警察部ニ氏ノ指紋法式ヲ採用シ且ツ首府ラ、プラータ市ニ中央個人識別所ヲ設立シ而シテ氏ハ其ノ所長トナツタノテアル

備考　「ブセッチ」氏ハ指紋ノ撮取ヲ官吏ニモ應用シテ居ルノテ左ノ訓示事項ハ指紋法實際ノ參考トナルモノナレハ特ニ掲ケルコトニシタ。

第一條左ノ事項ヲ訓示ス

統計及ヒ個人識別所長「ドン、フアーン、ヴセーチツク」氏ノ提出ニ係ル警察官吏ノ個人識別及ヒ監獄署ニ於テ編成スヘキ帳簿ニ關スル立案ニ基ツク決議中ニハ左ノ事項ヲ含有スルモノトス。

治安警察部内ニ就職ヲ志願スル者並ニ各警察署ニ於テ現職ニ就キ執務スル者ノ個人ヲ識別センカタメ指紋法ノ適用ヲ設定スルハ各警察署ノ秩序風紀名聲ヲ維持スルニ便益多ク且ツ必要ナルニ由リ本事項ニ關シ個人識別所長ノ提出セル立案ヲ各警察署ニ於テ適用スルコトヲ認可シ特ニ左ノ事項ヲ嚴守セシム。

一　個人識別所長ハ同所助手ヲシテ警察官ニ機具等ノ使用ニ必要ノ教程ヲ授ケシムヘシ。

二　警察署長ハ同教程ノ練習ヲ終了セルトキ部下ノ署員ニ命シテ巡査ノ官等ニ至ル警察官吏ニ對シ總テ個人識別ヲ實施セシメ體格檢査ヲ行ヒ右手指ノ指紋ヲ撮取シ圖式中ニ指定スル場所ニ之ヲ充實スヘシ。

三　體格檢査ノ外猶ホ左右兩手指ノ指紋ヲ撮取シ其ノ原紙ヲ廻送スヘシ。

四　現職ニ就キ執務スル者並ニ就職ヲ志願スル者ノ體格檢査調書並ニ指紋原紙ハ個人識別所ニ交附シ警察官指紋本部帳簿ヲ編纂セシメンカタメ之ヲ警視廳ニ廻送スヘシ。

五　警察署長ハ部下ノ署員ヲシテ總テ指紋法ノ智識ヲ取得スルコトヲ得セシムヘキ方針ヲ採ルヘシ。

六　法令部警察官ヲ經由シテ本命令ニ規定スル實務ノ執行ヲ好良ナラシメンカタメ警察署員ヲ教習スヘキ訓示ヲ別ニ發布セシムヘシ。

七　個人識別所長ハ警視廳ヲシテ必要ノ處置ヲ施スコトヲ得セシメンカタメ本命令中ノ事項ヲ脫漏シ又ハ之ヲ遵守セサルコトアルヲ認ムルトキハ之ヲ同廳ニ報告スヘシ。

八　身元不明ノ死亡者アルトキハ屍體ニ就キ指紋ヲ撮取シ規定ノ形式ニ據リ之ヲ警視廳ニ送附スヘシ。

九　監獄署ハ被告ヲ收容スルトキ入獄者帳簿中ニ收容ノ當時順號ニヨリ該當スヘキ番號、時間等ヲ記入シ猶ホ被告ト共ニ送付スヘキ書式中ニアル其ノ他ノ記入事項ノ拔萃ヲ作成スヘシ猶ホ固定監禁セル時日並ニ出獄ノ時刻及ヒ時日ヲ記入スヘシ。

一〇　監獄署ハ體格檢査ヲ執行セシメンカタメ總テ最近二十四時間ニ收容セル被告ヲ毎日個人識別所ニ押送スヘシ。

一一　猶ホ被告ト共ニ本部帳簿ニ記入スル番號及ヒ種別即チ入獄者帳簿中ニ記入スルコトヲ要スヘキ事項ノ記入ヲ經テ再ヒ還送ヲ受クヘキ體格檢査調書ヲ送附スヘシ個人識別所ハ同調書ノ裏面ニ從來ノ前科即チ監獄署ニ於テ記錄上ニ保存スルコトヲ要スヘキ事項ヲ記入スヘシ。

一二　監獄署ハ個人識別所ニ於テ必要ノ事項ヲ帳簿ニ記入スルコトアルヘキタメ總テ被告ヲ豫メ同所ニ押送スヘク直チニ之ヲ「シエルラ、チーカ」監獄ニ押送スルコトアルヘカラス以上ノ事項ヲ遵守執行スヘシ。

千九百〇二年九月九日

署名

ルイース、エーメ、ドイエナールド

最近指紋法ヲ最モ廣キ範圍ニ應用シテ居ルノハ北米合衆國テアル今其ノ情況ノ一班ヲ左ニ掲ケヨウ。

北米合衆國ノ各市ノ警察署テハ前科犯アルモノニ就キ指紋臺帳ヲ作成シ前科犯人ノ認識及逮捕ニ備ヘ又變死者ヲ認識スル方法ニモ供セラレテ居ルノテアル。

又各市ノ裁判所ニ於テハ常習淫賣婦、常習泥醉者、浮浪人、掏摸其ノ他ノ常習不良者ノ指紋ヲ採リ裁判ノ補助資料トシテ居ルノテアル。

又各市ノ懲治監テハ工場ニ勞役スル者ノ常習犯人ヲ認識スルニ供セラレテ居ル。

又紐育市ノ民事係ニ於テハ市役所監督ノ下ニ同上ノ事項ヲ豫防スル爲メ之ヲ市ノ一般民事事件ニ應用シ尙又將來合衆國政府ニ於テハ民事刑事ニ關スル以上ノ如キ事件ヲ指紋法ニヨリ認識スル局

ヲ特設セントスル企劃モアル又各州ノ監獄ニ於テハ囚人ノ認識ニ備ヘル爲メ種々ノ犯人ニ就キ指紋ヲ採リ脫獄ナトカアツタ場合ハ之カ逮捕ノ用ニ供セラレテ居ル又合衆國ノ陸軍テハ徵兵ノ際指紋ヲ採リ不正再度入營者ヲ調査スル方法ニ使用シ効果ヲ收メテ居ル。（註十）

（註十）米國陸軍省ノ報告（大正五年度）ニ依ルト同國陸軍テ採ツタ指紋ノ數ハ二十九萬一千〇百八十一ニシテ其ノ内八萬千九百三十一ハ召募ノ際ニ採ツタモノテ米國テハ軍隊ニ此ノ指紋法ヲ採用シタル爲メ再度ノ入營志願者中ニ以前ノ脫營ヲ僞ルモノ入獄ヲ僞ルモノ等ヲ發見セルコト同年度ノミニテモ四百六十七人ニ及ヒ更ニ此ノ法ニヨリ以前軍隊ニ在リタル者カ其ノ死亡シタル際姓名ナトノ判別セサルモノ又ハ僞名ニヨリ再度ノ入營ヲ志願シ犯罪者トシテノ逮捕ヲ免レントシタルモノナトモ指紋對照ニヨリ發見シタト謂フコトテアル。

又同國海軍省テモ士官及ヒ海兵ノ右手ノ指紋ヲ取リ其ノ横ニ生年月日ヲ記入シテ身分帳ヲ作リ同上ノ事項ヲ豫防スル方法ニ使用シテ居ルノテアル。

又貧民產婦病院テハ多數ノ產兒ヲ取扱フノテ若シ產兒ノ標識カ脫落等ニヨリ紛失スルトキハ產兒ノ識別ニ苦シミヤヤトモスルト混同スル虞カアルノテ臺帳ヲ作成シ母ノ氏名ト嬰兒ノ指紋ヲ採ツテ置クコトニヨリ之ヲ防止スル方法等ニモ使用サレテ居ル。

又保險會社テモ保險者ノ指紋臺帳ヲ作成シ多數ノ保險者ノ僞證事件ヲ豫防スル用ニ供シテ居ル其ノ他旅行免狀ニ此ノ指紋ヲ押捺セシメテ效果ヲ發揮スルコトカ證明サレテ居ル。

又紐育市ノ銀行テ署名ト共ニ指紋ヲ採用シ預金者ノ署名ヲ僞筆シ預金ヲ詐取スル者ヲ防ク方法トシテ好結果ヲ得タコトカアル。

斯ノ如ク米國テハ種々ノ目的ニ指紋カ利用サレテ居ルノテアル。

又米國テハ從來郵便貯金局員ニ限リ採用ノ當初指紋ヲ撮ル規定カアツタカ最近ノ報導ニヨルト近來郵便物ノ紛失ヲ初メ郵便關係ノ犯罪カ激增シタノテ之ヲ取締ル一方法トシテ一般郵便事務員ノ指紋ヲ撮ルコトニナリ更ニ進ンテ之ヲ官吏全般ニ及ホスコトニ決定シタ既ニ英國政府テハ强制的ニ印度人全部ノ指紋撮影ヲ了ヘ引續キ他ノ領土民ニモ强制中テアル佛蘭西及ヒ白耳義モ亦同樣ノ計畫ヲ有シ獨逸テハ既ニ實行ニ著手シテ居ルト傳ヘラレル。

米國ノ今回ノ計畫ハ實ニ英國ノ先例ニ倣ツタモノテアルカ米國ニ於ケル郵便事務員ハ現在三十二萬人ニ及ヒ官吏ノ數ハ五十萬ヲ越エルノテコノ夥シイ人員ニ就テ各個ニ指紋ヲ撮リ之ヲ組織的ニ整理スルノハ容易ノコトテナイ現ニ實行中ノ郵便局員ノ分ハ悉ク華盛頓ノ中央郵便局ニ保有シ別ニ之ヲ寫眞ニ複寫シテ本人ノ勤務スル各地ノ郵便局ニ送達スル方法ヲ取ツテ居ルカ汽車汽船等ノ郵便係員ノ指紋ハ中央郵便局ニノミ保存スルコトニナツテ居ル一旦撮ツタ指紋ハ退職ノ際ト雖モ絕對ニ本人ニ返附シナイ方針テアル此ノ制度ハ今後二三年間ニ完成サレル筈テ然ルトキハ郵便局員初メ官吏ノ犯罪カ著シク減スルタラウト期待サレテ居ル尙ホ郵便局員ハ今回ノ政府ノ計畫ヲ一般ニ好感ヲ以テ迎ヘテ居ルト謂フコトテアル。

佛國ニ於ケル指紋法ハ寧ロ英國ニ於ケル同法ノ發達ニ促カサレテ當時聲名隆々タル法醫學、人類學ノ大學教授及ヒ刑法學者ニヨリ盛ンニ研究サレタノテアル彼ノ佛國ニ於テ有名ナル刑事人類學者テアル「ロンブロゾー」氏ノ如キモ其ノ一人テ指紋法ノ效果アルヲ認メ多大ノ贊辭ヲ呈シテ居ルノテアル曰ク「指紋法ノ研究カ舊式刑法學者ノ不確實ナル個人識別法ノ學理ヲ掃蕩スルト共ニ倍々開明世界ニ普及スヘキモノナリ余ハ之ヲ科學ニ據ル司法警察學中ノ新學科ナリト謂フナリ」ト謂フテ居ルノテアル。

佛國ハ元來人體測定法ノ發明國ニシテ同法ヲ以テ世界ニ誇リトナシテ居ルノテ從ツテ同國ノ個人識別法ハ人體測定法ヲ以テ標準トシテ居ツタノテアルカ近來指紋法ノ研究隆ナルノ事情斯ノ如キモノアルヲ以テ遂ニ一八九四年佛國巴里人身測定所ニ於テ「ベルチオン」氏指揮ノ下ニ測定法ト共ニ指紋法ヲ併用スルコトトナツタノテアル。

指紋ノ學理的研究ハ獨逸ノ「プルキンイエ」氏ニ初マツタノテアルカ獨逸國ニ於ケル現代指紋法ノ實施ハ最近「ロツシエル」氏カハンブルク警視廳ニ於テ施行シタルニ起原ヲ成スモノテアル(註一一)

(註一一) 實體的個人識別法ノ標準ハ各國共ニ同一ナリト言フ能ハス英國ハ指紋法ヲ標準トシ佛國ハ人體測定法ヲ標準トシテ居ル獨墺諸國ノ如ク此兩法ヲ併用スル國ニ於テハ一國ニ於テ區々ニ渉リ統一スル所カ無イノテアル例ヘハ獨逸國伯林警視廳ハ人體測定法ヲ標準トシ同國ハンブルク警視廳ハ指紋法ヲ標準トシテ居ルノテアル。人體測定法ト指紋法トヲ比較スルトキハ孰レニモ捨ツ可カラサル長所アルト同時ニ短所アルコトハ亦爭フ可カラサル所テアル然レトモ其ノ孰レヲ以テ個人識別法ノ標準ト爲スヘキカハ世論既ニ定評アレハ玆ニ論シナイ。

我邦ニ於ケル個人識別法ノ沿革ハ抑モ明治二十五年一月前大審院長法學博士横田國臣氏ノ提議ニ依リ歐洲ノ制度ニ倣ヒ犯罪人名簿卽チ犯罪者ノ氏名索引ニヨル犯罪人異同識別法(形式的個人識別法)トシテ司法省ニ創設シタノテアツタカ元來犯罪者ハ眞正ノ氏名、年齡、出生地ヲ申立テス僞名ヲ以テ前科ヲ隱蔽シ刑ノ加重ヲ免レントスルモノテアルカラ犯罪人名簿ノ效果ハ誠ニ薄弱ノモノテアツタ當時ノ民刑局長タル現任大審院長法學博士平沼騏一郎氏ハ刑事政策上甚タ之ヲ遺憾トシ次テ歐米ヲ巡遊シ各國ノ司法制度ヲ視察ノ際當時歐洲諸國ニ行ハルル指紋法ノ制度ヲ研究サレ歸朝ノ後同指紋法ノ必要ヲ提議サレタノテアル。

玆ニ於テ司法省ハ犯罪人異同識別法取調委員ヲ設ケタノテアル委員長ニハ平沼法學博士ヲ委員ニハ前司法次官法學博士小山溫氏現任大坂控訴院長法學博士谷田三郎氏前監獄事務官眞木喬氏同豊野胤珍氏檢事古賀行倫氏及ヒ當時司法省參事官故法學博士大場茂馬氏ノ諸氏ヲ任命シタノテアル同取調委員會ニ於テハ犯罪人異同識別法トシテ「ベルチオン」氏ノ人體測定法ヲ採用スヘキカ若クハ指紋法ヲ採用スヘキカニ付調査ノ結果人體測定法ハ其ノ方法複雜ニシテ練習モ亦容易ナラス殊ニ精巧ナル機械ヲ要スルカ故ニ莫大ナル費用ヲ要ス然ルニ指紋法ハ之ニ反シテ其ノ方法簡易ノタメ練習モ容易ナリ且ツ費用ヲ要スルコト少ナク而モ其ノ成績良好ナルコトハ英國其ノ他ノ實驗

スル所テ明カナルノミナラス歐洲ニ於テハ益々此ノ方法發達セシトスルノ實況ナルヲ以テ遂ニ之ヲ採用スルコトニ決議シタノテアル時ニ明治四十一年九月十四日犯罪人異同識別法取調會ノ報告書ヲ發表シタ實ニ今ヨリ十四年前ノコトテアル。(第二章第三節議定書參照)

之ヨリ前不完全ナカラモ我國ニ於ケル個人識別法ノ存在シタノハ警視廳ニ於ケル索引票テアルコレハ警察ニ於テ認メタ犯人ノ氏名索引テアツテ身長、年齡及特徵等モ記入スルモノテ歐洲ノ索引票ノ制度ニ倣ヒ案出セラレタモノテアツテ明治十八年警視林誠一氏(後檢事長)ノ提議ニヨルモノテアル其後明治四十一年十月十六日司法省指紋部ヲ置キ本邦ニ指紋法ヲ實施スルニ當リ警視廳ニ於テモ明治四十五年六月同法ヲ採用スルコトトナツタノテアル。

第二章　比較個人識別法

第一節　人體測定法ト指紋法

一　序說

吾人ハ近世個人識別法ニ就キ研究スヘキ重要ナル目的夥多存スル中ニ其ノ最モ要點ト目ス可キモノヲ左ニ掲ケテ見ル。

第一ハ普通個人識別法ノ比較研究卽チ人體測定法及ヒ指紋法ノ研究之ナリ。

第二ハ指紋法諸法式ノ相互比較研究之ナリ。

第三ハ指紋法ノ諸法式ト本邦ニ於ケル指紋法ノ比較研究卽チ之ナリ。

二　人體測定法及指紋法

人體測定法ハ佛國ノ「アルホンス、ベルチオン」氏カ始メテ唱導シタルモノテアツテ氏ハ巴里ニ於テ人類學ヲ專攻セル人ナルカ個人識別法トシテ人體ニ於ケル骨ノ尺量ヲ測定スルコトヲ研究シ遂ニ現行人體測定法ヲ發明スルニ至ツタノテアル。(註一二)

人體測定法カ初メテ實地ニ施行セラレタノハ一八八〇年テアツテ卽チ氏カ巴里警視廳ノ個人識別局長トナリ氏自ラ指揮シテ同法ノ普及ヲ計ルニ及ヒ巴里市ニ於ケル諸種ノ常習犯罪ノ鎭滅ニ對シ偉大ナル效力ヲ認メラレ同法ハ忽チ歐米各國ニ採用セラルルニ至ツタ次第テアル。

今尙ホ同法カ世界文明國ニ於テ實行サレツツアルノヲ見テモ其ノ效果ノ大ナルニ基クトコロカアルノテアル。

「ベルチオン」氏ノ說ニヨレハ人ノ骨格ハ人カ丁年ニ達スルト同時ニ其ノ發達カ止ミ終生變更セス又人ハ各自ニ相異ナル骨格ヲ有シ二人ノ人ノ骨格ハ全然相同シキコトハ有リ得ヘカラサルニヨリ人體ノ測定ニヨリ容易ニ各個人ヲ識別シ得ルト謂フニ基クモノテアル。

此ノ「ベルチオン」式ノ長所ハ其ノ分類法ニアルノテアツテ指紋法ノ分類法モ之ニ習フタ點カ多イノテアル。

彼ノ指紋學ノ泰斗タル「ガルトン」氏モ指紋學ノ基礎ヲ確定スルニ至リタル原因ハ「ベルチオン」氏ノ人體測定法ノ刺戟誘發ニ因ルコトヲ氏ノ著述ニ於テ明言シテ居ルノテアル又「ロツシエル」氏カ指紋分類法ニ新法式ヲ案出シ指紋ニ悉ク數字的標識ヲ用キタノモ範ヲ此ノ「ベルチオン」法ノ分類式ニ採ツタモノテアル。

個人識別法トシテ人體測定法ヲ適用スルトキハ左ノ諸點ヲ根據トナスモノテアル。

測定サル可キ要點ハ毎年多少ノ改良カ加ヘラレタノテアルカ其ノ重ナルモノハ身長、頭縱徑及頭横徑等ノ尺度ヲ測定スルモノテアル。

以上ノ測定ヲナスニハ精巧ナル器具ヲ要シ且ツ熟練ナル測量技手ヲ必要トスルノテアル而シテ尙又測定ノ標準ヲ確定スル爲メ測定概算表ヲ設ケ其ノ測定ニ誤謬ナカラシメンコトヲ期シテ居ルノテアル而シテ又前述セル如ク人體測定法中最モ重要ナル點ハ其ノ分類法テアツテ其ノ測定シテ得タル尺度ヲ大中小ノ長短ニ從ヒ三種ニ分チ而シテ測定原紙ノ排列ハ先ツ之レヲ男女ノ二部ニ區別シ次テ男子部ヲ更ニ丁年者ト未丁年者トニ區別シ卽チ以上合シテ三部ニ分類スルノテアル而シテ「ベルチオン」式ノ分類法ノ特徵ハ悉ク數字ノ標識ヲ用キテ分類シタコトニアル。

「ベルチオン」式ハ以上ノ如ク人體ニ於ケル骨ノ尺量ヲ測定スル以外ニ尙ホ寫眞ヲ應用シテ人體局部ノ形狀ヲ撮影シ個人識別法ノ目的ヲ完全ニ遂行セン事ヲ期シ測定法ト共ニ此ノ寫眞法ヲ併用シテ居ルノテアル。

卽チ「ベルチオン」氏ノ寫眞法ハ人ノ風姿、外觀ヲ一目瞭然タラシムルモノテアツテ其ノ正面ヨリノ撮影ハ人ノ顏面ノ輪廓ノ如何又ハ鼻、口、眼、眉ノ形狀ヲ始メ額、頰、顎ノ如何ヲ明カナラシムルヲ得ルノテアル又側面ヨリノ撮影ハ寫眞ニヨリ側面ヨリ見タル頭部ノ輪廓ヲ始メ鼻高、鼻長ノ如何、額及顎ノ隆起ノ程度及特ニ個人識別法上偉大ナル效力ヲ有スル耳ノ形狀ヲシテ一目瞭然タラシムルモノテアル。

以上ハ「ベルチオン」式測定法ノ概要テアルカ同法ハ前述ノ如キ長所アルト共ニ短所モ亦少ナカラス殊ニ指紋法ニヨル個人識別法カ發見サルルニ及ヒ人體測定法ハ著シク其ノ不完全ヲ覺エ漸ク之レヲ批難スル者續出スルニ至リ遂ニ近來各所ニ於テ同法ヲ排斥スルノ情況ニナツタノテアル。（備考）

之ニ反シ指紋法ハ近來世界文明諸國ノ競フテ採用スルトコロトナリ益々隆盛ノ狀況ヲ示シテイルノテアル其ノ理由ハ今茲ニ論述スルマテモナク實際ニ於ケル指紋法ノ效果顯著ナル事實カ良ク證明シテ餘リアルモノト謂ハネハナラヌ而シテ又本編各章ニ於テ論述スルトコロハ汎テ右理

由ヲ説明スルモノニ外ナラヌノテアル。

（註二）人體測定法

ベルチヨン氏肖像　人體測定法（Alphons Bertillon, Das anthrometrische Signament）1895

一　測定法

甲　身長測定

身長（直立セル全身長ヲ測定ス）

乙　頭部測定

（イ）頭縱徑（鼻根ト後頭突起部ヲ挾ム頭部縱巾ヲ測定ス）

（ロ）頭橫徑（左耳及右耳ヲ挾ム頭部ノ橫巾ヲ測定ス）

二　測定概算表

身長測定（一）恕スヘキ尺度（五ミリメートル）一分六厘六マテノ差（二）測定者ノ過失（小錯誤）（七ミリメートル）二分三厘

餘ノ差（三）非認定（大錯誤）（十五ミリメートル）五分嵶

頭縱徑及頭橫徑測定、一分ノ$\frac{1}{2}$乃至$\frac{1}{3}$即チ三厘三毛ヨリ五厘マテノ差違ハ之ヲ恕ス

三　測定器

（イ）測定コンパス（半圓形ノ度盛ヲ有セル兩脚器）

（ロ）測身定規（普通測身器ニ同シ）

以上ハ重ナル測體器テアル而シテ測定概算表ハ(1)眞實ニ接近スルコトヲ要スヘキ程度即チ同一ト認ムヘキ程度(2)誤謬ト認ムヘキ相違ノ程度(3)符合セサルモノト認ムヘキ差異ノ程度カ規定サレテ居ルノテアル測定法ノ基礎ハ實ニ骨ノ量尺ヲ測定スルニアルノテアツテ普通ハ次ノ部分ヲ測定スルノテアリマス(1)全身長(2)兩上肢長(3)半身長(4)頭長(5)頭幅(6)右耳長(7)左下肢長(8)右中指長(9)右小指長(10)左前膊長又以前ハ眼球ノ色彩等ノ特徴モ算ヘラレテ居タカ年々其ノ方法カ改良サレテ今ハ前述ノ身長頭部ノ測定カ重ナモノテアル其ノ他寫眞法等カアルカ此處ニハ之ヲ略ス。

備考

測體法ニ對スル反對説

反對説ノ一

(1) 同一人ニ對シ度々適用セル測體尺度ハ實驗上全然相違スル別個ノ結果ヲ生スルコトヲ明ニセリ是レ即チ測體法ノ大缺點ニシテ其根底ノ誤謬實ニ拔ニ存スルモノナリ量尺ハ測量手ヲ異ニスル毎ニ相違シ且ツ反對スル結果ヲ生スルモノニシテ獨リ全身半身及ヒ耳ニ於ケルノミニ止マラス猶總テノ尺度ニ於テ然ルモノニシテ個人識別ニ對シ疑問ヲ起サシムルノ所以ナリトス故ニ實際上ニ於テハ諸國ニ於テ次第ニ測身法ヲ放棄シ裁判上ニ於テハ危險ナルモノトシテ之ヲ排斥スルニ至レリ。

(2) 吾人カ「ベルチヨン」法ノ量尺ヲ信據スルコト能ハサルノ事態ハ須ク吾人ノ注意ヲ要スルモノナリ抑モ二名ノ測量手ニシテ時ヲ異ニシ同一人ノ頭ニ對シ同一ノ位置ニ於テ兩脚規ヲ配置スルコトヲ得ヘキカ而シテ二名ノ測量手カ各自別個ニ測定セル量尺ニ於ケル寸分ノ差異ハ以テ能ク「無罪ノ人ヲ絞臺ニ送リ殺人罪ヲ犯シタル惡漢ヲ赦免スルニ至ルコトヲ得」ルニ至ルヘシ事態實ニ斯ノ如キモノアリトセハ「ベルチヨン」法量尺ノ名稱ヲ冠スルニ拘ハラス猶ホ是等尺度ヲ個人識別ノ目的ニ對シテ正確ナルモノト認ムルコトヲ得ヘキカ余ハ確信ス總テ警察官中誤謬ニ據リ個人ニ不法ノ刑罰ヲ加フルコトニ對シテ同意スル者アルヲ聽カラサルコトヲ彼ノ著名ナル法學家骨テ其ノ意見ヲ吐露セルコトアリ「假リニ有罪ナル者九十九名ヲ逸スルコトアリトスルモ司法ノ劍ヲ以テ無罪ナル者一名ヲ傷ツクルコトナキニ優ル」ト如此ンハ無罪者ニ刑ヲ科シ犯罪者ヲシテ刑ヲ免レシムルノ奇觀ヲ呈スルニ至リ刑罰權ノ基礎ヲ危カラシメ社會保護ノ精神ニ反スルニ至ルヘシ。

反對説ノ二

人體ノ發育ハ複雜極マリナキ四圍ノ狀況ニ據リ影響ヲ蒙ルモノニシテ之レカタメニ正規ノ發育ヲ急速ナラシムルコトアリ又ハ遲滯セシムルコトアルモノナリ此ヲ以テカ人體測定法ノ如キ狹隘ニ失スル劃一ノ界限ヲ設定スルコト能ハサルモノナリトス。

エストラスブルゴ大學教授「プフイツネル」氏カ晩近發表セル研究ノ結果ニ據レハ人體ハ年齡四十歳ニ至ルマテ發育ヲ繼續スルモノニシテ年齡二十歳ニ於テ停止スルモノニアラスト。

反對說ノ三

「ベルチオン」氏カ主張スル人體測定法ハ個人識別法トシテ不正確ナルコト複雜ナルコト誤謬ニ陷リ易キヲ以テ遂ニ疑惑ト錯亂ヲ生セシム。

測定法ハ其ノ適用上尺度ヲ測定スル方法ニ於テ測量手ヲ異ニスル毎ニ誤謬ヲ生シ易キコトハ其ノ缺點ナリ。

同一人ヲ識別セントカ爲メ相繼テ適用セル測身法ノ結果カ數字上輕微ノ差異アル三種別異ノ量尺表ヲ生スルノ事實ハ「ベルチオン」法ノ正確ナルコトヲ否定スルモノナリトス。

指紋法ニ於テハ測定ノ必要ナケレハ之レニ基ク誤謬ヲ生シ得ヘキコトナシ總テ指紋ハ之ヲ反復スルコト幾回ニ及フモ同一ノ符號ヲ呈スルモノナリ。

「ベルチオン」法ニ於テハ測定カ不正確ニ採ラレタルカ又ハ正確ニ採ラレタルモ誤測定又ハ誤記アリタル場合後ニ至リ之レヲ發見又ハ補正スルコト能ハス而シテ其ノ測定原紙ハ官署ニ永久ニ保管サレ完全ナル補正ヲナスコトヲ得スシテ全部ノ效力ヲ無效タラシムルモノナリ斯ノ如ク測定法ニ於テハ一度誤測又ハ誤記サレタルモノカ原紙ニ作成サレタル以上ハ到底之ヲ補正スルコト能ハサルナリ指紋ハ身體ヨリ絕體的ニ確實ナル印象ヲ採ルカ爲メニ轉寫又ハ記錄ノ誤謬ヲ驅逐スルコトヲ得又回轉印象ト平面印象カ印寫サレテ押捺順序ノ誤謬ヲ防禦スル爲メ採用サレ而シテ又兩者ヲ比較スルコトニ據リ分類ノ誤謬ヲ訂正シ得斯ノ如ク指紋法ニ於テハ原紙作成後ニ於テ指紋ノ誤捺誤分類ヲ隨時ニ補正シ得ル便利アリテ毫モ索引ニ支障ヲ來スコトナシ。

今日個人識別法ノ理想トシテハ實體的識別法ニ據リ其ノ標準ハ指紋法タラサル可カラサルコトハ事實ノ證明スルトコロテアルカ指紋法及測定法ハ互ニ長短アルコトヲ免レス故ニ指紋法ハ「ベルチヨン」式卽チ人體測定法及寫眞法ノ長ヲ採リ之ヲ補充スルヲ要スヘキテアル又形式的個人識別法ト實體的個人識別法トハ互ニ調和ヲ得セシムルヲ以テ便利ナリトス今實際ニ於テ世界各國政府ニ採用サレタルモノハ皆此等諸法式ヲ調和セシメタルモノテアル。

備考　下ニ掲ケタル保存箱ハ人體測定原紙ヲ納ムヘキ箱ニシテ指紋ヲ併用セルモノテアル。

函ノ番號ハ頭縱徑、頭横徑、身長、及ヒ右手ノ指紋ノ大小ニ因リ區分セラル。

指紋番號＝00.00—39999.(小) 40000—69999.(中) 70000—99999.(大)

函ハ第一ヨリ第八十一ニ至ル八十一個ノ抽斗ヨリ成ル八十一個ノ抽斗ハ頭縱徑ノ大小ヲ標準トシテ大別シ之

測定原紙保存箱

頭縱徑	1 小	2 小	3 小	4 小	5 小	6 小	7 小	8 小	9 小	頭縱徑
頭横徑	小	小	小	中	中	中	大	大	大	頭横經
身長	小	小	小	小	小	小	小	小	小	身長
指紋數	小	中	大	小	中	大	小	中	大	指紋數
同	10 小	11 小	12 小	13 小	14 小	15 小	16 小	17 小	18 小	上
同	小	小	小	中	中	中	大	大	大	上
同	中	中	中	中	中	中	中	中	中	上
同	小	中	大	小	中	大	小	中	大	上
同	19 小	20 小	21 小	22 小	23 小	24 小	25 小	26 小	27 小	上
同	小	小	小	中	中	中	大	大	大	上
同	大	大	大	大	大	大	大	大	大	上
同	小	中	大	小	中	大	小	中	大	上
同	28 中	29 中	30 中	31 中	32 中	33 中	34 中	35 中	36 中	上
同	小	小	小	中	中	中	大	大	大	上
同	小	小	小	小	小	小	小	小	小	上
同	小	中	大	小	中	大	小	中	大	上
同	37 中	38 中	39 中	40 中	41 中	42 中	43 中	44 中	45 中	上
同	小	小	小	中	中	中	大	大	大	上
同	中	中	中	中	中	中	中	中	中	上
同	小	中	大	小	中	大	小	中	大	上
同	46 中	47 中	48 中	49 中	50 中	51 中	52 中	53 中	54 中	上
同	小	小	小	中	中	中	大	大	大	上
同	大	大	大	大	大	大	大	大	大	上
同	小	中	大	小	中	大	小	中	大	上
同	55 大	56 大	57 大	58 大	59 大	60 大	61 大	62 大	63 大	上
同	小	小	小	中	中	中	大	大	大	上
同	小	小	小	小	小	小	小	小	小	上
同	小	中	大	小	中	大	小	中	大	上
同	64 大	65 大	66 大	67 大	68 大	69 大	70 大	71 大	72 大	上
同	小	小	小	中	中	中	大	大	大	上
同	中	中	中	中	中	中	中	中	中	上
同	小	中	大	小	中	大	小	中	大	上
同	73 大	74 大	75 大	76 大	77 大	78 大	79 大	80 大	81 大	上
同	小	小	小	中	中	中	大	大	大	上
同	大	大	大	大	大	大	大	大	大	上
同	小	中	大	小	中	大	小	中	大	上

チ三部トナス卽チ第一ヨリ第二十七迄ハ小ノ部、第二十八ヨリ第五十四迄ハ中ノ部、第五十五ヨリ第八十一迄ハ大ノ部トス各部ヲ更ニ三個ニ區別ス一—九、一〇—一八、一九—二七ノ如シ。

斯ノ如ク測體法ニヨル分類法ハ先ヅ頭縱徑ノ大小ニ從ヒテ人ヲ大中小ノ三ニ區別シ其ノ區別セラレタル一ヲ頭橫徑ノ大小ニ從ヒ更ニ大中小ノ三ニ區別シ其區別セラレタル一ヲ身長ノ大小ニ從ヒ更ニ三分シ尙ホ進ンテ此三分シタル一ヲ右手ノ指紋ノ數ニ基キ大中小ノ三ニ區別スルコトヲ得斯ノ如クスルトキハ人ヲ三ノ四乘卽チ千二百四十三ノ種類ニ分ツコトヲ得ルノテアル人體測定原紙ノ分類ハ此ノ理ニ基キテ分配シ各其ノ屬スル函ヲ定メタルモノテアル。

各函ニ如何ナル原紙ヲ收ムヘキカハ各原紙ノ表面上部ノ中央ニ記載セル函ノ番號ニヨリ之ヲ納ム。

(一)頭縱徑小、頭橫徑中、身長大、指紋小ナル原紙ハ函第二十二號ニ納ム。

(二)全部中ナル時ハ函第四十一號ニ納ム。　(三)全部大ナル時ハ函第八十一號ニ納ム

(四)全部小ナル時ハ函第一號ニ納ム。

但シ一函中ニ堆積セル原紙ハ悉ク指紋番號ノ順ニ排列ス例ヘハ原紙中、指紋番號一萬五千、二萬、二萬五千ノ三個アルトキハ一萬五千ヲ先ニシ二萬五千ヲ最終ニ排列スルモノナリ。

第二節　指紋法ノ諸法式

指紋カ個人識別ノ目的ヲナス方法トシテ公ニ認メラレタノハ初メテ英國ニ於テ「ヘンリー」式指紋法カ採用サレ世界ニ斯法ヲ紹介シタノニアル。

其ノ以後歐米ノ各國官省テ此ノ指紋法ヲ採用シタ而シテ現今ニ於テハ斯法ノ諸點ニ改善カ加ヘラレ實際公務に適合シタ種々ノ法式カ案出サレタノテアル。

吾人ハ左ニ各國指紋諸式ノ概要ヲ列擧シテ參考ニ供シタイト思フノテアル。

「ヘンリー」式指紋法ノ梗概

指紋法ニ於ケル最モ重要點ハ其ノ指紋分類ノ良否ニアル「ガルトン」法式ニ於テハ指紋型種ヲ分ツテ三大分類(弓狀紋、蹄狀紋、渦狀紋)トシテ居ル然ルニ「ヘンリー」式ニ於テハ卽チ弓狀紋、蹄狀紋、渦狀紋、混合紋(變體紋)ノ四大基本分類トスルノテアル之レ實際適用ニ便利ノ目的ヲ以テ「ガルトン」法式ニ改良ヲ加ヘタ點テアル。

指紋ハ數字的價ノ標識ヲ附シテ分類サレ指紋原紙保存箱ニ納メラレルノテアル而シテ保存箱ハ32ノ縱ノ區劃ト32ノ同數ノ橫ノ區劃ヲ有シ而シテ總テ千百二十四ノ小舍柵ニヨリ組成サレルノテアル而シテ原紙カ一柵中ニ堆積スルヲ防ク爲メニ副分類ノ方法カ設ケラレテアル此ノ副分類ヲ設ケタノハ在來ノ分類法ニ對シ改良ヲ加ヘタ要點テ「ヘンリー」式ノ進歩テアル。

指紋公式(指紋分類式)ハ十指ノ指紋カ對ニ於テ組合ハサレ而シテ規定ノ價カ附セラレルノテアル。

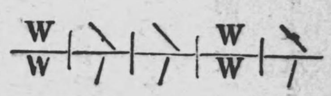
指紋公式作成ニ必要ナル指紋記號ハ左ノ如クテアル。

蹄狀紋＝L　渦狀紋(混合紋ヲ含ム)＝W　甲種蹄狀紋＝／(左手ニアル時)／(右手ニアル時)乙種蹄狀紋＝／(左手ニアル時)／(右手ニアル時)弓狀紋＝A及ヒa(副分類)甲種蹄狀紋＝R及ヒr(副分類)乙種蹄狀紋＝U(副分類)

指紋公式

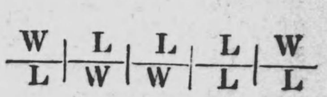
（1）

右手左手



（2）

分子分母



（3）

分子分母

$$\frac{16}{0}\,\frac{0}{8}\,\frac{0}{4}\,\frac{0}{0}\,\frac{1}{0}$$

$$=\frac{17}{12}+\frac{1}{1}=\frac{18}{13}\therefore\frac{13}{18}$$

（4）

指紋記號

$$\frac{13}{18}\quad\frac{U}{U}\quad\left(\frac{10}{10}\right)14$$

第一分類法

第一分類ニ於テハ指紋カ二分類ニ區別サレル卽チ蹄狀紋（弓狀紋ヲ含ム）及渦狀紋（混合紋ヲ含ム）テアル而シテ渦狀紋ニハ指紋ノ對ニヨリテ規定ノ價カ附セラレルカ蹄狀紋ニハ0トシテ價カ計算サレナイノテアル而シテ第一對ハ右拇指ト右示指＝16　第二對ハ右中指ト右環指＝8　第三對ハ右小指ト左拇指＝4　第四對ハ左示指ト左中指＝2　第五對ハ左環指ト左小指＝1テアル。而シテ右拇指、右中指、右小指、左示指、左環指カ分母トナリ而シテ右示指、右環指、右拇指、左中指、左小指ハ分子トナル。（公式(2)參照）

公式(2)ハ公式(1)ヲ指紋ノ對ニヨリ分類シタルモノテアル。

公式(1)ハ右手拇指カ渦狀紋、同示指カ蹄狀紋、同中指カ蹄狀紋、同環指カ渦狀紋、同小指カ蹄狀紋、左手拇指カ渦狀紋、同示指カ蹄狀紋、同中指カ蹄狀紋、同環指カ渦狀紋、同小指カ蹄狀紋テアル（ヘンリー式原紙雛形參照）

「ヘンリー」式ニ於テハ以上ノ如キ指紋ヲ有スル原紙ヲ先ツ記號ヲ以テ分類スルノテアル(1)式ハ其ノ形式ヲ示シタモノテアル以上ノ指紋ヲ有スル原紙ニ分類番號ヲ附スルニハ先ニ指ノ對ニヨリ(2)ノ如キ公式ヲ作成シ之ヲ指ノ對ニヨリ規定サレタル價ヲ附スルノテアル卽チ(2)公式ノ形式ニヨリ第一對ノ分子ノW＝16テアル第五對ノ分子W＝1テアル同樣ニ第二對ノ分母ノW＝8テアル第三對ノ分母ノW＝4テアル斯ノ如ク渦狀紋ノミ價ヲ計算シ蹄狀紋ハ價ヲ計算セス單ニ0トスルノテアル（但シ五個ノ對ノ分母、分子全部カ蹄狀紋テアル場合ニ限リ1ノ價ヲ附スルノテアル）而シテ(3)式ノ如キ分數ヲ得分子ハ分子ノミ加算シ17ヲ得分母ハ分母ノミ加算シ12ヲ得$\frac{17}{12}$ノ分數ヲ成ス然ル時分母ト分子ニ各1ヲ加ヘ$\frac{18}{13}$ノ分數ヲ得之ヲ轉倒シテ$\frac{13}{18}$トナス之レ卽チ第一分類番號テアル（(2)式ハ分類式ヲ記號ヲ以テ示ス(3)式ハ(2)式ニ數字ノ價ノ割當ヲ示ス）

以上ノ如キ分類ニテ示セル指紋原紙ハ縱13行橫18行目ノ原紙保存函ノ小舍柵ニ收メラレルノテアル。

（註意）指紋ノ對ハ左ヨリ數ヘテ第一對第五對ニ至ルノテアル(2)式ニ示セル指紋ノ對ハ向ツテ左ヨリ第一對ハWL第二對ハLW第三對ハLW第四對ハLL第五對ハWLテアル。

第二分類法（副分類法）

第一分類番號ノ下ニ分類サレタル原紙カ一柵ニ堆積スレハ再ヒ副分類法ニ據リ分類サレルノテアル副分類法ニ於テハ左右兩手ノ示指中指カ用ヰラレル原紙雛形ニ於テ左右ノ示指ハ乙種テアルカラ $\underline{U}\,\underline{U}$ ノ記號ヲ以テ表ハサレル（又左右示指ニ弓狀紋カアル時ハ $\underline{A}\,\underline{A}$、右示指ニ弓狀紋左示指ニ甲種カアル時ハ $\underline{A}\,\underline{R}$ 右示指ニ弓狀紋左示指ニ乙種カアル時ハ $\underline{A}\,\underline{A}$ ノ如キ附號カ附セラレル而シテ又右示指ニ弓狀紋同掏指ニ弓狀紋其他ノ指ニ甲種左示指ニ甲種同掏指ニ甲種其他ノ指ニ弓狀紋カアル時ハ $\underline{aAr}\,\underline{rRa}$ ノ如キ附號カ附サレルノテアル）又 $\underline{U}\,\underline{U}$ カ堆積スル場合ハ左右兩手ノ示指中指ノ指紋ノ線數カ計算サレルノテアル線ノ計算法ハ線數9以下ナレハ1ノ記號ヲ附シ10以上ナレハ0ノ記號ヲ用ヰル但シ線ノ追跡ノ場合ハ上出ノ線數10以上ナレハ1（上流）上及下出ノ線數2以下ナレハM（中流）下出ノ線數3以下ナレハ0（下流）ノ記號ヲ附スルノテアル原紙雛形ノ場合ハ左右示指中指ハ乙種テアルカラ先ツ左右示指ノ線數ヲ計算スルト左右共ニ9以下テアルカラ $\frac{1}{1}$ テアル次ニ左右中指ノ線數ヲ計算スルト左右中指ハ10以上テアルカラ $\frac{0}{0}$ テアル卽チ以上ノ副分類番號ハ $\frac{U}{U}\left(\frac{10}{10}\right)$ トナル此分類番號ノモノカ再ヒ堆積スレハ最後ニ右手小指ノ線數カ計ヘラレ其ノ線數カ記載サレル卽チ原紙雛形ノ指紋ハ14線テアルカラ其副分類番號ハ $\frac{U}{U}\left(\frac{10}{10}\right)14$ トナルノテアル(4)式ハ卽チ指紋分類番號ノ形式テアル。

第一分類ニ於テ $13\frac{}{18}$ ノ原紙ハ縱十三行目横十八行目ノ卽チ（イ）ノ小舍柵ニ納メラレル同樣ニ $\frac{1}{1}$ ノ原紙ハ縱一行目横一行目卽チ（ロ）ノ小舍柵ニ納メラレル $\frac{32}{32}$ ノ原紙ハ縱三十二行目横三十二行目卽チ（ハ）ノ小舍柵ニ納メラレルノテアル。

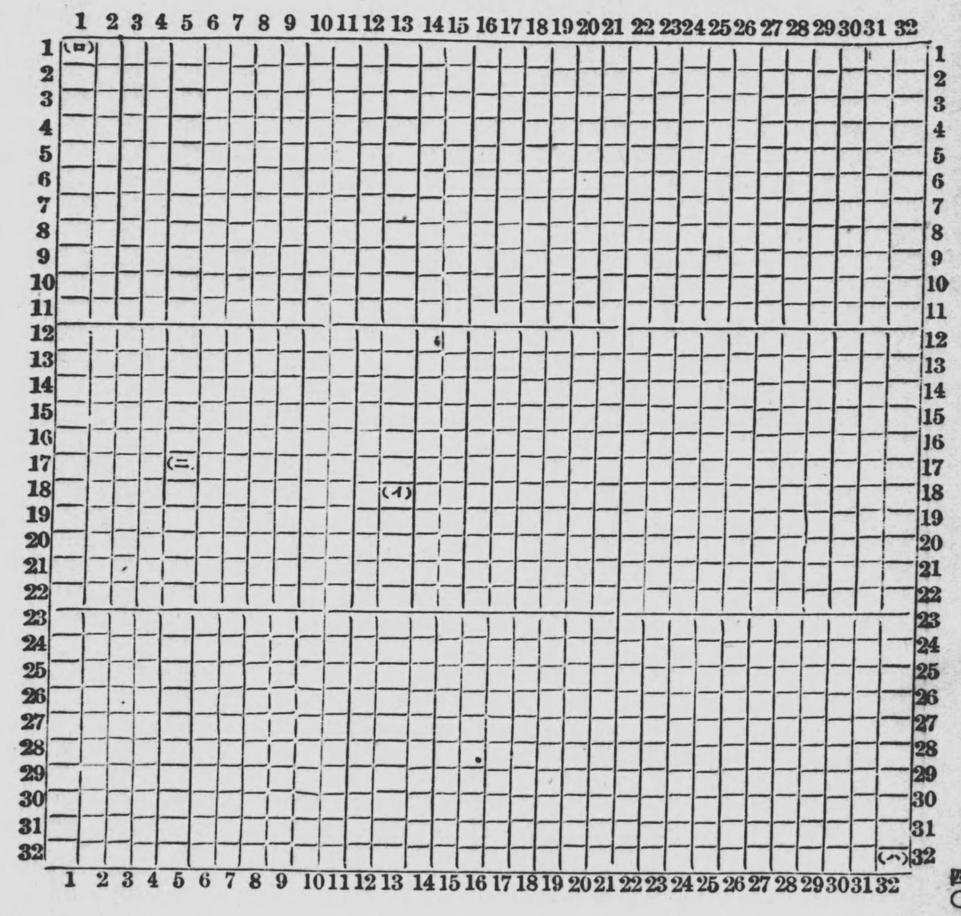
「プセッチ」式指紋法ノ梗概

「プセッチ」氏ノ法式ハ先ツ指紋ヲ弓狀紋、蹄狀紋、渦狀紋ノ三種ニ大別シ更ニ三角島ノ存在ヲ認ムルコトアルト之ヲ認ムルコトナキノ如何又ハ其ノ個數及線ノ方向位置ニ據リテ指紋型種ヲ四個基本別トシ拇指ヲ起點トシテ分類ヲ起シ三角島ヲ有スルコトナクシテ曲線ノミヲ有スルモノヲ弓狀紋ト稱シ三角島ノ延長區域ヲ包圍スル線卽チ標準蹄線ノ方向カ指紋觀測者ノ左側ニ赴クトキハ之レヲ內側（甲種）蹄狀紋ト稱シ右側ニ赴クトキハ之ヲ外側（乙種）蹄狀紋ト稱シ三角島二個ヲ有スルモノヲ渦狀紋ト稱ス原紙排列ノ實際上ニ於テハ此等名稱ヲ示スニ用語ノ頭字ノミヲ以テスルモノトス其ノ他ノ手指ハ指紋中ニアル同一ノ位置ニ從ヒ之ヲ分類スルモノナリト雖其ノ名稱ヲ示スニ數字ヲ以テスルモノナリ卽チ左ノ如シ

弓　狀　紋＝A（1）。　內側甲種蹄狀紋＝I（2）。

外側乙種蹄狀紋＝E（3）。　渦　狀　紋＝V（4）。

ヘンリー式指紋原紙保存函雛形



之ヲ以テ拇指ニ弓狀紋、示指ニ渦狀紋、中指ニ外側(乙種)蹄狀紋、環指ニ內側(乙種)蹄狀紋、小指ニ渦狀紋ノ分類ヲナスヘキ指紋ヲ有スル手ハA4324ノ形式ヲ以テ之ヲ示スモノトス該狀態カ假リニ右手卽チ分

類ノ順序上第一ニ檢査スヘキモノニ發現スルモノトセン然ルトキハ其ノ指紋現象ノ綜合ヲ呼ヒテ種別ト稱ス。

左手ニ於ケル場合ニ對シテモ亦其ノ指紋ニ同一ノ名稱ヲ適用スルモノナリト雖モ右手ニ對スルモノト區別ヲ明瞭ナラシメンカタメ其ノ綜合ヲ呼テ類別ト稱スルノテアル。

此ヲ以テカ既ニ記述セル右手ヲ示スニハ種別A4324ヲ以テシ左手ノ指頭ニ於ケル指紋卽チ拇指渦狀紋、小指弓狀紋ナルトキハ之ヲ示スニ類別V2341ヲ以テスルモノトス。

ブセツチ式指紋原紙保存函雛形

第一函

種別 A1111—1444 類別 AIEV1111—1424 1

第二函

種別 A1111—1444 類別 AIEV1131—1444 2

該區分別及小區分別ニ關シテハ猶ホ百〇四萬八千五百七十六個ノ配合ヲ作スコトヲ得ヘシ其ノ原紙排列法ハ左ノ如シ

原紙排列表

種別A 基本別							
區分別	區分別	區分別	區分別	區分別	區分別	區分別	區分別
示指 中指 環指 小指	示指 中指 環指 小指	示指 中指 環指 小指	示指 中指 環指 小指	示指 中指 環指 小指	示指 中指 環指 小指	示指 中指 環指 小指	示指 中指 環指 小指
1111	1311	2111	2311	3111	3311	4111	4311
1112	1312	2112	2312	3112	3312	4112	4312
1113	1313	2113	2313	3113	3313	4113	4313
1114	1314	2114	2314	3114	3314	4114	4314
1121	1321	2121	2321	3121	3321	4121	4321
1122	1322	2122	2322	3122	3322	4122	4322
1123	1323	2123	2323	3123	3323	4123	4323
1124	1324	2124	2324	3124	3324	4124	4324
1131	1331	2131	2331	3131	3331	4131	4331
1132	1332	2132	2332	3132	3332	4132	4332
1133	1333	2133	2333	3133	3333	4133	4333
1134	1334	2134	2334	3134	8334	4134	4334
1141	1341	2141	3341	3141	3341	4141	4341
1142	1342	2142	2342	3142	3342	4142	4342
1143	1343	2143	2343	3143	3343	4143	4343
1144	1344	2144	2344	3144	3344	4144	4344
1211	1411	2211	2411	3211	3411	4211	4411
1212	1412	2212	2412	3212	3412	4212	4412
1213	1413	2213	2413	3213	3413	4213	4413
1214	1414	2214	2414	3214	3414	4214	4414
1221	1421	2221	2421	3221	3421	4221	4421
1222	1422	2222	2422	3222	3422	4222	4422
1223	1423	2223	2423	3223	3423	4223	4423
1224	1424	2224	2424	3224	3424	4224	4424
1231	1431	2231	2431	3231	3431	4231	4431
1232	1432	2232	2432	3232	3432	4232	4432
1233	1433	2233	2433	3233	3433	4233	4433
1234	1434	2234	2434	3234	3434	4234	4434
1241	1441	2241	2441	3241	3441	4241	4441
1242	1442	2242	2442	3242	3442	4242	4442
1243	1443	2243	2443	3243	3443	4243	4443
1244	1444	2244	2444	3244	3444	4244	4144

備考 種別ハ(右手拇指ナリ)Aハ(弓狀紋ナリ)即チ本表ハ右手拇指ニ弓狀紋ヲ有スル原紙ノミノ配列表ナリ

種別A二五六＝類別二六二、一四四

種別I二五六＝類別二六二、一四四

種別E二五六＝類別二六二、一四四

種別V二五六＝類別二六二、一四四

總計種別百〇四萬八千五百七十六列ナリトス即チ256×1024＝262,144×4＝1,048,576＝4,10乘ナリ

指紋原紙ノ分配ハ凡テ種別類別ニヨリ區分セラレ整理排列スルモノトス即チ指紋原紙ハ二個ノ原紙函ニ保存セラル第一ノ原紙函ハ種別A、I、Eニ該當スル分類ヲ含有スルモノトス其分函百八十個アリ總テ種別及類別ニ對シ一定ノ形式ニ據リ之ヲ配置スルモノトス分函ニハ其ノ前扉ニ識票ヲ貼付ス。

第二ノ原紙函ニハ種別Vニ該當スルモノ及ヒ總テ切斷指、畸形指等ヲ藏置ス其ノ分函百八十個ニ對シ識票ヲ付ス。

識票ニ依リ見ル如ク一分函中ニ藏置スル指紋原紙ハ一種對四類ヲ包含スルモ函中ニ於テ更ニ之ヲ一類毎ニ分離セリ即チ色彩ヲ異ニスル色票一葉ヲ表面ニ置キテ類別AIEVノ四束ニ結束スルモノナリ。

原紙雛形ハ右手拇指ハ渦狀紋、示指ハ蹄狀紋(外側)、中指ハ蹄狀紋(外側)、環指ハ渦狀紋、小指ハ蹄狀紋(外側)、左手拇指ハ渦狀紋、示指ハ蹄狀紋(內側)、中指ハ蹄狀紋(內側)、環指ハ渦狀紋、小指ハ蹄狀紋(內側)テアル即チ右手種別ハ V3343 左手類別ハ V2242 テアル。

「ロッシエル」式指紋法ノ梗概

此ノ法式ハ「ヘンリー式」指紋記號ヲ以テ分類スル方法ヲ改良シテ指紋ノ全部ニ數字的價ヲ配當スルノテアル卽チ先ツ指紋ヲ弓狀紋、蹄狀紋、渦狀紋ノ三大分別トシ左表ノ如ク指紋ニ數字ノ價ヲ配當スルノテアル。

- 弓狀紋 (1)
- 蹄狀紋
  - 甲種 (2)
  - 乙種
    - (3)
    - (4)
    - (5)
    - (6)
- 渦狀紋
  - 上流 (7)
  - 中流 (8)
  - 下流 (9)
- 缺損指紋 (0)

「ロッシエル」式ニ於テ最モ特長トスルトコロハ其ノ價ヲ一乃至九及〇ト爲シタルコトテアツテ之レ實ニ「ロッシエル」氏ノ發明ナリ。

氏ノ分類法ニ依リ指紋ニ價ヲ付スルニハ一々統計ノ結果ニ基キタルモノテアルカ故ニ左ニ之ヲ示サン。

ハンブルグニ於テ數萬ノ材料ニ就キ爲シタル統計ノ結果ニ依レハ弓狀紋ハ其ノ數全指紋ノ千分ノ約五十ヲ占メ甲種蹄狀紋ハ同ジク千分ノ約五十、乙種蹄狀紋ハ千分ノ約六百、渦狀紋ハ千分ノ約三百而シテ指紋缺損スルカ又ハ指頭缺除シタルモノ千分ノ約五ヲ占ム以上ノ指紋ノ種別ノ數ノ割合ニ據リ弓狀紋ニハ(1)甲種蹄狀紋ニハ(2)乙種蹄狀紋ハ其數ノ割合他ノ指紋ニ比シ大ナルヲ以テ更ニ之ヲ四分シ內端ト外端トノ間ニ介在スル線數一乃至九ヲ有スルモノニハ(3)ノ價ヲ附シ十乃至十三ヲ有スルモノニハ(4)ノ價ヲ附シ十四乃至十六ヲ有スルモノニハ(5)ノ價ヲ附シ十七以上ヲ有スルモノニハ(6)ノ價ヲ附シタルナリ而シテ渦狀紋ノ數ノ割合ハ乙種蹄狀紋ニ比スレハ小ニシテ其ノ他ノ指紋ニ比スレハ大ナルカ故ニ之ヲ三分シ上流渦狀紋ニハ(7)ノ價ヲ附シ中流渦狀紋ニハ(8)ノ價ヲ附シ下流渦狀紋ニハ(9)ノ價ヲ附シタ而シテ缺損指紋ハ特種ノ指紋ナルカ故ニ特別ノ價ヲ付シ零トナシタ斯クシテ兩手ノ指紋ハ $\frac{00000}{00000}$ ヨリ $\frac{99999}{99999}$ マテノ分數式ニヨリ表示サル之ヲ指紋方法番號ト謂フ右ノ如キ方法ニヨリ指紋ヲ分類シテ指紋番號ヲ得タル時ハ指紋番號ハ原紙ノ右肩ニ記載サレ原紙ヲ收ムヘキ函ノ番號ヲ示スノテアル。

指紋原紙ヲ收ムヘキ函ハ〇萬ヨリ九萬ニ至ル縱行及橫行共ニ十行ニ區劃サレ數字ノ標識ヲ付シタノテアル而シテ函ノ內部ハ總テ百箇ノ柵ヲ有シ其ノ內ニ原紙ヲ整理排列セルモノテアル指紋番號 $\frac{00000}{00000}$ ヲ有スル原紙ハ分子ヨリ零萬零千零百零十零ト讀ミ次ニ分母ヲ零萬零千零百零十零ト讀ムモノニシテ原紙ヲ排列スルニハ先ツ分子ヨリ零萬ト讀ミ函ノ萬位ノ標識(縱行)ノ〇萬ト對照シ次ニ零千ト讀ミ函ノ千位ノ標識(橫行)〇千ト對照シ(イ)ノ柵ニ納ムヘキナリ同樣ニ指紋番號 $\frac{99999}{99999}$ ヲ有スル原紙ハ先ツ分子ヨリ九萬ト讀ミ函ノ標識九萬ト對照シ次ニ九千ト讀ミ函ノ千位ノ標識九千ト對照シ(ロ)ノ柵ニ納ムルナリ同樣ニ指紋番號 $\frac{44444}{44444}$ ヲ有スルモノハ(ハ)ノ柵ニ納ムルモノトス而シテ一柵中ニ於テ分子ノ百位十位一位ノ順ニ排列シ分子

ロッシエル式
指紋原紙保存函雛形

千位 ＼ 百位	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
0	イ									
1										
2										
3										
4					ハ					
5										
6										
7										
8										
9										ロ

ノ數位ニ於テ同一番號ノ原紙カ一柵中ニ堆積スルトキハ尙分母ノ各數位ノ順序ニヨリ整理排列スルコトヲ得ルノテアル。

上圖ノ雛形ニ示セル原紙保存函ハ原紙一萬枚ヲ納ムヘキ函ニシテ尙ホ數萬ノ原紙ヲ納ムルニハ各萬位ニ從ヒ各一函ヲ要シ函ノ縱行ノ標識ヲ千位トシ横行ノ標識ヲ百位トナセハ原紙保存函及函ノ柵ハ隨意ニ擴張シ得ルノテアル

（第三章原紙保存函雛形參照）

各國諸法式ノ比較

（一）原紙ノ様式

指紋法ノ各國法式ニ就テハ前述ニヨリテ其ノ大要ヲ明カニシタサレト尙ホ明瞭ニ各指紋法式ノ區別ヲ知ル爲メニ諸國原紙ノ様式、雛形ヲ掲ケ極メテ簡略ニ説明ヲ試ミヨウ。

左ノ上圖ハ卽チ「ロッシエル式」（獨逸式）原紙雛形テ本邦ニ於ケルモノト同一形式ノモノテアル又中圖ハ「ヘンリー式」（英國式）原紙雛形テ下圖ハ「ブセッチ式」（亞爾然丁式）原紙雛形テアル現時

ロッシエル式
指紋原紙雛形

指紋番號 $\frac{4}{4}\frac{5}{4}\frac{7}{9}\frac{5}{5}\frac{8}{8}$

	示指	中指	環指	小指	拇指
左手	乙種蹄狀	乙種蹄狀	上流渦狀	乙種蹄狀	中流渦狀
	4 | 9	5 | 13	7 |	5 | 14	8 |
右手	示指	中指	環指	小指	拇指
	乙種蹄狀	乙種蹄狀	下流渦狀	乙種蹄狀	中流渦狀
	4 | 9	4 | 11	9 |	5 | 14	8 |

ヘンリー式

指紋番號 $\frac{13,U,10}{18,U,10}14$

	拇指	示指	中指	環指	小指
右手	渦狀紋	蹄狀紋	蹄狀紋	渦狀紋	蹄狀紋
	W	＼	＼	W	＼
左手	拇指	示指	中指	環指	小指
	渦狀紋	蹄狀紋	蹄狀紋	渦狀紋	蹄狀紋
	W	/	/	W	/

ブセッチ式

指紋番號 種別 V3343 / 類別 V2242

類別	左手	V渦狀紋	2蹄狀紋	2蹄狀紋	4渦狀紋	2蹄狀紋
		拇指	示指	中指	環指	小指
種別	右手	V渦狀紋	3蹄狀紋	3蹄狀紋	4渦狀紋	3蹄狀紋

世界諸國ニ行ハルル指紋法式ハ重ニ以上ノ三式テアルカ又ハ之ニ類似ノモノテアル斯ノ如ク各國諸法式ヲ比較シテ見ルトキハ互ニ差異點アルコトヲ認メ得ルノテアル指紋原紙雛形ハ同一指紋ヲ各國法式ニヨリ分類セルモノテアルカ分類ノ結果ハ斯様ナ相異ヲ示シテ居ルノテアル卽チ「ロッシエル式」ニ於テハ指紋ヲ悉ク數字的ニ分類スルニ反シ「ヘンリー式」ハ記號ヲ主トシ數字ヲ從トシテ分類シテ居ル而シテ又「ブセッチ式」ハ數字及記號ヲ用ヰ以上二式ノ中間ヲ採用セルカ如キ觀ヲ呈スルモノテアル。

（二）標準指紋

「ロッシエル式」ハ左手示指指紋ヲ標準指紋トシ押捺ノ順序ハ上欄ニ左手示指ヨリ中

指、環指、小指、拇指ノ順序ニ從ヒ下欄ニハ左手同樣右手ノ示指ヨリ拇指ニ至ル順序ニ押捺スルノテアル。

「ヘンリー式」ハ之レニ反シ右手示指ヲ標準指紋トシ上欄ニハ右手ノ拇指ヨリ指ノ順ニ從ヒ示指、中指、環指、小指ヲ押捺シ下欄ニハ右手同樣左手ノ拇指ヨリ小指ニ至ル順序ニ押捺スルノテアル。

「ブセッチ式」ハ右手拇指ヲ標準指紋トシ押捺ノ順序ハ先ツ下欄(別種)右手ヨリ初メ上欄(別類)左手ヲ後ニスルモノトス卽チ下欄ニハ右手拇指ヨリ初メ指ノ順序ニ從ヒ示指、中指、環指、小指ノ印象ヲ押捺シ次ニ上欄ノ左手拇指ヨリ指ノ順序ニ從ヒ小指ニ至ル印象ヲ押捺シテ了ルノテアル

「ロッシエル式」カ左手示指指紋ヲ標準トシタノハ指紋分類統計上左手示指ニ表ハレル指紋型種ノ配合ノ數カ最モ良ク平均ヲ保チ指紋原紙排列上最モ都合カ良イカラテアル(議定書參照)之ニ反シ「ヘンリー式」カ右手示指、拇指指紋ヲ標準トシタノハ普通人ハ平素右手ヲ使用スルコト多ク從ツテ犯人ノ犯行現場ニ遺留スル指紋モ多クノ場合同右手ノ示指拇指テアルカラ警察指紋トシテ犯罪搜査ノ目的ニ便利ナラシムルヲ主眼トシテ考慮サレタルニ外ナラナイノテアル故ニ我邦テハ司法省ニ於テハ左手示指ヲ標準トシ警視廳及警察用指紋ハ右手示指ヲ標準トスルノテアル。而シテ又「ブセッチ式」カ右手拇指指紋ヲ標準トシタノモ略ホ「ヘンリー式」ト同樣ニ警察指紋ノ便益ヲ得セシムルヲ目的トシタル外尙ホ拇指指紋ハ十指中最モ良ク指ノ特徵ヲ表ハスモノテアルカラ之レヲ標準指紋トシタノテアル(註一三)

(註一三) 「ブセッチ」氏曰ク拇指ノ最終指節ノ項端ニアル指紋線ノ傾斜ハ特殊ノ方向ヲ示スモノナリ右拇指ノ項端ニアル線ハ右側(但シ押捺サレタル原紙指紋印象ニ對シ觀察者ノ)ニ趨リ左拇指ニアルモノハ左側ニ向フモノトス(ブセッチ氏指紋法第二回拉丁亞米利加醫師聯合會議提出論文)

以上各國ニ於ケル指紋法式ハ其ノ目的ニ從ヒ法式ヲ異ニスルモノテアツテ何レニモ其ノ長短アリ標準指紋ノ如キモ今容易ニ其ノ優劣ヲ決シ難イ而シテ「ブセッチ式」萬以下ヲ標準トスル少數原紙ヲ取扱フニハ適スルカ百萬以上ノ原紙ヲ取扱フ場合ニハ不適當トナサレテ居ル而シテ又「ヘンリー式」ハ其ノ分類方法複雜ニ失スル缺點アリ之ニ反シ「ハンブルグ式」ハ兩式ノ長短ニ鑑ミ改良ヲ加ヘタルモノテアツテ其ノ分類法ノ正確ナルコト索引ノ簡易ナルコトノ特長ヲ有スルノテアツテ今日テハ最新式トサレテアル然ルニ此ノ式ニモ缺點カアルノテ夫レハ極端ニ數字的細分類ヲ爲スタメ分類者ノ見解ニヨリ屢々指紋ノ價ニ相異ヲ來タスコトカアツテ尙改良ノ餘地カアルト思ハレルノテアル。

第三節　指紋諸法式ト本邦指紋法

現今世界ニ於ケル指紋法制度ハ實ニ國際的關係ヲ有シ着々之カ實行ヲ見ツツアルノテアル然シ當初本邦ニ於テ個人識別法ノ目的ニ對シ指紋法ヲ施行スルコトハ頗ル緊急且ツ重要問題テアツタ我邦ハ如何ナル制度ニ據ルカ直ニ決スルコトハ出來ナイ愼重ニ研究調査セネハナラヌノテアツタ而シテ又諸外國ノ制度ヲ直ニ本邦ニ移ス事ハ又實情ノ許サナイトコロテアツタノテ卽チ我國ニ於テハ他國ノ經驗中ニ珠玉ヲ拾ヒ自ラ宜シキヲ採用スルコトハ指紋制度採用ノ當初本邦ニ於ケル緊要事テアツタノテアル。

卽チ本邦ニ採用サレタル指紋法式ハ「ロツシエル」氏ノ形式ニ據ルモノニシテ尙ホ該法ノ一部ニ改良ヲ加ヘ施行サレタルモノテアル。（議定書參照）

而シテ司法省ニ於テハ左手指紋分類ヲ標準トスルニ反シ警視廳ニ於テハ右手指紋分類ヲ標準トシ採用シタノテアル之レ卽チ前者ハ獨逸式ニヨリ後者ハ英國式ニ據リタルモノト謂フヘキテアル。

左掲ノ議定書ハ我邦ニ於テ初メテ指紋法施行ノ際當局官廳ヨリ發表サレタ指紋法取調ノ報告テアル卽チ之ニ據リ我邦指紋法ノ基準ヲ示シタモノテアルカラ參考ノ爲メ之ヲ揭ケ且ツ註解ヲ加ヘテ了解ノ便ニ供シタノテアル。

備考　犯罪人異同識別法取調會議定

犯罪人異同識別法ニ付テハ「ベルチオン」氏ノ身體測定法ヲ採用スヘキカ若クハ指紋法ヲ採用スヘキカニ付調査ノ結果身體測定法ハ其方法複雜ニシテ練習モ又容易ナラス殊ニ精巧ノ器械ヲ要スルカ故ニ莫大ノ費用ヲ要ス然ルニ指紋法ハ之ニ反シテ其方法簡單ノ爲メ練習モ容易ナリ且ツ費用ヲ要スルコト少ク而モ其成績良好ナルハ英國其他ノ實驗スル所ニシテ歐州ニ於テハ益此方法發達セントスルノ實況ナルヲ以テ之ヲ採用スルコトニ議定セリ

指紋法ヲ用ユヘキ英獨ノ術語ニ付キ左ノ如ク譯語ヲ選定シタリ（原語ヲ略ス）

指紋、中心、外角、外端、內端、弓狀紋、天幕狀紋、蹄狀紋、甲種、乙種、渦狀紋、上流、中流、下流、混合紋、有胎蹄狀紋、雙胎蹄狀紋、二重蹄狀紋、變體紋、線

方今英國其他歐洲諸國ニ於テ行ハルル指紋法ハ「ヘンリー」式ナルモ指紋法中最新ナルモノハ「ハンブルグ」式ナリトス後者ハ前者ニ比シ指紋ノ分類指紋用紙ノ分類及ヒ索引ノ點ニ於テ極メテ簡單ナリ

「ハンブルク」式ハ指紋ヲ大別シテ弓狀紋、蹄狀紋、渦狀紋ノ三稱トナシ尙ホ蹄狀紋ヲ分テ甲乙ノ二種トナス而シテ此式ノ長所トスル所ハ各指紋ニ一定ノ價ヲ付シ此價ニ從ヒ各指紋ヲ分類セント企テタル一事ニアリ卽チ弓狀紋ニハ(一)ノ價ヲ甲種蹄狀紋ニハ(二)ノ價ヲ乙種蹄狀紋ニハ(三)乃至(六)ノ價ヲ渦狀紋ニハ(七)乃至(九)ノ價ヲ付シ以テ得タル價ノ數ニ從ヒ指紋ヲ押捺シタル紙(指紋原紙)ヲ排列ス而シテ其標準トスヘキハ左手ナリ何トナレハ左手ハ右手ニ比シテ負傷其他指紋ヲ害スヘキ危險ニ接スルコト少シト認メラルルヲ以テナリ左手ノ各指中各種類ノ指紋ヲ有スルモノハ拇指ニアラサルカ如シ仍テ其次位ニアル示指ニ存スル指紋ヲ以テ標準トシタリ故ニ指紋ヲ押捺スルニハ示指ヨリ初メ中指、環指、小指、拇指ニ及フヘキモノトス此順序ニ從ヒ各指紋ニ付スヘキ價ヲ指紋原紙ノ右端ニ記載ス而シテ此價ハ示指ノ指紋ノ價ヲ萬位トシ中指ノ夫ヲ千位トシ環指ノ夫ヲ百位トシ小指ノ夫ヲ十位トシ拇指ノ夫ヲ一位トシ之ヲ何萬何千何百何十何ト讀ム而シテ指紋原紙ノ排列ハ前述ノ方法ニ因リ記載シタル數ノ大小ニ基クカ故ニ其ノ排列並ニ索出ニ便ナリ右手ノ指紋モ亦同一ノ方法ニ從ヒ押捺シ之レニ依テ得タル數ヲ左手ノ指紋數ノ下ニ記載シ以テ左手ノ指紋同一ノ數ヲ得タル場合ニ於テモ尙ホ區別スルヲ得セシム

加之以上ノ分類ノ適當ナルコトハ同所ノ統計上ノ結果ニ依リ證明セラレタリ同所ノ統計ニ依レハ指紋全部ノ內弓狀紋ハ百

分ノ五ヲ甲種蹄狀紋ハ百分ノ五乙種蹄狀紋ハ百分ノ六十渦狀蹄ハ百分ノ三十ヲ有ス

又乙種蹄狀紋ニ(三)乃至(六)ノ價ヲ付スルコト前述ノ如シ此價ノ區別ハ乙種蹄狀紋ノ外端ヨリ內端ニ至ル指頭隆線ノ數ノ多少ニ依ル內端ト外端トノ間ニ存スル指頭隆線ノ數九以下ナルトキハ其價(三)ヲ付シ十以上十三ナルトキハ其價(四)ヲ付シ十四以上十六ナルトキハ其價(五)ヲ付シ十七以上ナルトキハ其價(六)ヲ付ス此價ヲ付シタル所以ノ根據ハ乙種蹄狀紋ノ外端ヨリ內端ニ至ル指頭隆線ノ數ニ對シ爲シタル統計ニ基キ平等ニ之ヲ分配シタルモノナリ

渦狀紋ニ(七)乃至(九)ノ價ヲ付スルコト前述ノ如シ此ノ價ノ區別ハ上流中流下流ノ如何ニ依リテ岐ルルモノニシテ上流ハ之ヲ(七)トシ中流ハ之ヲ(八)トシ下流ハ之ヲ(九)トナス

「ハンプルゲ式」カ果シテ我國ニ施行スルヲ得ルヤ又之ヲ施行スルヲ得ルトセハ其式其儘之ヲ施行スルヲ得ルヤ或ハ多少ノ變更ヲ加フル必要ナキヤヲ試驗センカ爲メ市ケ谷監獄ノ囚人全員千五十七名ノ指紋ヲ押捺セシメ之カ指紋ノ統計ヲ取調ヘタル處其結果頗ル良好ニシテ僅少ノ變更ヲ加ヘ之ヲ採用スルヲ相當ト認メタリ左ニ之ヲ說明セン

「ハンプルゲ式」ニ從ヒ市ケ谷監獄ノ囚人全員ノ指紋原紙千五十七枚ノ各指紋壹萬〇五百七十ニ對スル統計ノ結果左ノ如シ

(第一表)

(一) 弓狀紋(一)一萬分ノ一八一

(二) 蹄狀紋 一萬分ノ五、二七六
- 甲種蹄狀紋(二)一萬分ノ三八四
- 乙種蹄狀紋 一萬分ノ四、八九二
  - (三)一萬分ノ一、一六二
  - (四)一萬分ノ一、四三二
  - (五)一萬分ノ一、二一〇
  - (六)一萬分ノ一、〇八八

(三) 渦狀紋 一萬分ノ四、五一六
- (七)一萬分ノ二、〇四〇
- (八)一萬分ノ一、〇九四
- (九)一萬分ノ一、三八二

尙ホ指頭缺損若クハ指紋缺損シタルカ爲メ同式カ零ト算ヘラルヘキモノ一萬分ノ二十七アリ

右統計ノ結果ニ依レハ「ハンプルゲ」式ノ統計ト一致セサルモノアリト雖モ大體ノ數ニ於テ甚シキ相違ナキカ故ニ我國ニ於テ「ハンプルゲ」式ヲ採用スルニ於テ毫モ支障ナシト議定セリ

又左右十指ニ存スル指紋ノ分配ヲ見ルニ統計ノ結果左ノ如シ

第二表

	左手					右手				
	拇指	示指	中指	環指	小指	拇指	示指	中指	環指	小指
弓狀紋(一)	二二	五六	二三	三	〇	一一	四二	二一	二	一
蹄狀紋 甲種(二)	七	一四九	一八	三	二	二	一七一	二四	四	二
蹄狀紋 乙種(三)	七六	一二一	五四	六八	一二八	四五	一四一	一八五	六九	一六五
蹄狀紋 乙種(四)	一一七	一一八	八九	一一七	二二〇	六四	九七	二二六	八五	一九九
蹄狀紋 乙種(五)	一〇八	八〇	一七四	一一七	二二六	六四	六	一二七	八一	一七一
蹄狀紋 乙種(六)	一八一	三九	九一	一一〇	一五二	二〇三	三三	七三	九八	一〇七
渦狀紋(七)	三二四	一四〇	一七八	四四三	二三七	一〇九	三〇二	一一八	一六八	二一
渦狀紋(八)	七三	一一七	九六	一〇〇	一〇〇	一五三	九三	九九	二五〇	一〇〇
渦狀紋(九)	九一	一七五	七四	三六	五	三四九	五五	一二三	二四三	二三一
指頭缺損(〇)	一	五	二	三	七	〇	四	四	〇	一

本統計ハ市ヶ谷監獄千五十七人ノ各指紋一萬〇五百七十ニ對スル統計ニシテ總テ千分ノ比例、指紋千個ノ統計ヲ以テ算出シタルモノトス左手示指乙種蹄狀紋ノ實數ハ(3)八一(4)一〇五(5)九八(6)八九、合計三七三ナリ（第三表第四表第六表參照）

右統計ニ徵スルトキハ左ノ示指ヲ以テ比較的最モ平均ヲ得タルモノトス何トナレハ左ノ示指ニ存スル各指紋ノ數ハ千分ノ三十九ヨリ小ナルモノナク千分ノ百七十五ヨリ大ナルモノハナシ而シテ如斯平均數ハ他ノ指ニ於テ之ヲ需ムルヘカラス

左右ノ拇指ニ付テ之ヲ檢スルニ左ノ拇指ニハ乙種蹄狀紋僅カニ七ヲ示スニ反シ渦狀紋中上流七ハ三百二十四ノ多數ヲ有ス

右ノ拇指ハ弓狀紋僅ニ十甲種蹄狀紋ハ僅カニ二ノ數ヲ有スルニ對シ渦狀紋中ノ下流(九)ハ三百十七ヲ有ス

次ニ左右ノ中指ニ付テ檢スルニ左ノ中指ハ乙種蹄狀紋僅ニ十八、弓狀紋二十三ヲ有スルニ對シ蹄狀紋及ヒ渦狀紋中ニ百五十以上ヲ有スルモノ四アリ

次ニ又左右ノ環指ニ付テ之ヲ檢スルニ左ノ環指ハ弓狀紋甲種蹄狀紋僅ニ三ヲ算スルニ對シ渦狀紋中ノ上流ハ四百四十三ヲ算ス右ノ環指ノ弓狀紋ハ四、甲種蹄狀紋ハ僅ニ四ヲ算スルニ對シ渦狀紋中ニ二百四十以上ヲ算スルモノ二個アリ

又左右ノ小指ニ付テ檢スルニ左ノ小指ノ弓狀紋ハ皆無ニシテ甲種蹄狀紋ハ僅ニ二渦狀紋中ノ下流(九)ハ僅ニ五ヲ算スルニ反シ蹄狀紋及ヒ渦狀紋中二百以上ヲ算スルモノ三個アリ又右ノ小指モ殆ト同樣ニシテ弓狀紋僅ニ一甲種蹄狀紋僅ニ三ヲ算スルニ對シ渦狀紋ノ下流ハ二百三十一ヲ算ス

終リニ右ノ示指ニ付テ之ヲ檢スルニ以上列擧ノ各指ノ如ク指紋ノ分配カ非常ナル不權衡ヲ見ルモノナシト雖モ之ヲ左ノ示指ニ比スレハ其劣ルコト遙カニ遠シ例ヘハ弓狀紋四十二乙種蹄狀紋中三十三ヲ算スルモノアルニ對シ渦狀紋ノ上流ハ三百三ヲ算セリ

唯左ノ示指ヲ標準トスル指紋ハ分類ニ於テ少シク不十分ニ感スルハ乙種蹄狀紋ノ中(三)及ヒ(四)ハ百二十以上ノ數ヲ有スルニ反シ(五)ハ八十三(六)ハ僅ニ四十一ヲ算セリ仍テ之カ救濟ノ方法ヲ講セント欲シ左ノ示指ニ存スル乙種蹄狀紋全部ニ付キ其外端ヨリ內端ニ至ル數ヲ算ヘタルニ左ノ結果ヲ得タリ

第三表

乙種蹄狀紋ノ外端ヨリ內端ニ至ル指頭隆線ノ數	同上ノ個數	乙種蹄狀紋ノ外端ヨリ內端ニ至ル指頭隆線ノ數	同上ノ個數
一	三	十	三二
二	七	十一	二八
三	一六	十二	二九
四	七	十三	三四
五	一五	十四	三五
六	一四	十五	二三
七	一九	十六	二五
八	一九	十七	四一
九	二六		

外端ト內端トノ數一—七マテノ同上ノ個數八一、同八—十一マテノ同上ノ個數一〇五同十二—十四マテノ同上ノ個數九八、同十五—十七以上ノ同上ノ個數八九合計三七三ナリ

以上ノ統計ニ基キ「ハンプルゲ」式ニ訂正ヲ加ヘ指頭隆線ノ數ニ依リ一ヨリ七迄ニ(三)ノ價ヲ付シ八ヨリ十一迄ニ(四)ノ價ヲ付シ十二ヨリ十四迄ニ(五)ノ價ヲ付シ十五以上ニ(六)ノ價ヲ付スルトキハ(三)乃至(六)ハ殆ト平均ナル數ヲ得ルコト左ノ如シ

第四表

(三)ノ價ヲ付スヘキモノハ一ヨリ七マテ	此總數八十一
(四)ノ價ヲ付スヘキモノハ八ヨリ十一マテ	此總數百〇五

(五)ノ價ヲ付スヘキモノハ十二ヨリ十四マテ　此總數九十八
(六)ノ價ヲ付スヘキモノハ十五以上　此總數八十九
參照　此總數八十一—八十九マテノ合計三七三（第三表及註參照）
而シテ前述指頭隆線ノ數ノ分配ハ前述ノ指紋全數ノ統計中乙種蹄狀紋ノ指紋ノ分配ト相類スルヲ以テ「ハンプルケ式」ニ左ノ變更ヲ加フルヲ相當ト講定シタリ

第五表

乙種蹄狀紋ノ外端ヨリ內端ニ至ル隆線	一以上七ハ	其價(三)	
同上	八以上十一ハ	其價(四)	
同上	十二以上十四ハ	其價(五)	
同上	十五以上ハ	其價(六)	

以上講定シタル方法ニ基キ市ケ谷監獄千〇五十七人ニ對スル指紋ヲ分類スルトキハ左ノ如キ結果ヲ得タリ

第六表

弓狀紋(一)	一〇〇〇〇以上	一九九九九マテ	六〇
甲種蹄狀紋(二)	二〇〇〇〇以上	二九九九九マテ	一五七
(三)	三〇〇〇〇以上	三九九九九マテ	八一
乙種蹄狀紋 (四)	四〇〇〇〇以上	四九九九九マテ	一〇五
(五)	五〇〇〇〇以上	五九九九九マテ	九八
(六)	六〇〇〇〇以上	六九九九九マテ	八九
渦狀紋 (七)	七〇〇〇〇以上	七九九九九マテ	一五〇
(八)	八〇〇〇〇以上	八九九九九マテ	一二七
(九)	九〇〇〇〇以上	九九九九九マテ	一八五
指紋ノ欠損(〇)(以下之ヲ略ス)	〇〇〇〇〇以上	〇九九九九マテ	五

本統計ハ千〇五十七人卽チ原紙千〇五十七枚ノ左手示指ニ表ハレタル指紋ノ統計ナリ而シテ一〇〇〇以上一九九九九マテ其他以上ハ指紋番號、弓狀紋六〇ヨリ指紋ノ欠損五ニ至ル數ハ原紙枚數ナリ合計一〇五七卽チ千〇五十七人ナリ

右ハ卽チ司法省ニ於ケル犯罪人異同識別法取調會ノ報告書テアツテ卽チ本邦ニ於ケル指紋法ノ標準テアル

第三章　指紋法ノ組織

序說

前各章ニ於テハ單ニ指紋法ニ於ケル序論ヲ縷述セルニ止マリタレハ本章ニ於テハ進ンテ指紋法ノ最モ重要科目タル其ノ本論ヲ講述セント欲スルノテアル。

抑モ個人識別ニ關シ指紋法ノ施設ニ付テハ世界各國共通ノ原則ニ基キ指紋方式ヲ案出シテ其ノ完備ヲ期スルトコロテアル。

英國ハ指紋法ヲ主トシ佛國ハ人體法ヲ主トシ又指紋法ヲ從トシテ採用シ而シテ又獨墺諸國ニ於テハ孰レニモ偏倚スルコトナク兩者ヲ併用シテ居ル。

爾來我國ニ於テモ個人識別法ニ就テハ不完全ナカラ多少ノ設備カアツタ然レトモ未タ以テ完璧ヲ期シタルモノトハ謂ヘナカツタノテアツタ。

茲ニ於テカ諸外國ノ法式ヲ參酌考慮シテ新ラタナル指紋法式ヲ案出シテ實施シタノテアル左ニ其ノ法式ヲ說述スルニ當リ一時ニ其ノ詳說ヲ盡スコトハ却テ說明ノ錯雜ヲ來シ且ツ了解ニ困難ヲ生スルモノテアルカラ先ツ初頭ニ於テ概念ヲ略述スル。

指紋法ハ先ツ指紋ノ分類ヲ根據トナスモノテアル而シテ指紋原紙ノ排列及索引等ノ組織方法ニヨリ其ノ作用ヲナスモノテアル。

指紋ノ分類法ハ先ツ指紋ヲ種別シ之ニ一定ノ價ヲ附スルノテアル（第四章指紋學概論參照）而シテ更ニ指紋ヲ押捺サレタル原紙ハ其ノ價ニヨリ分類サレ所定ノ原紙保存函ニ排列サレルノテアル。

茲ニ整理排列サレタル保存原紙ハ所要ニ從ヒ索引及對照ニ供サレ以テ個人識別法ノ作用ヲナスモノテアル。

今日指紋法ノ他ノ個人識別法ニ比シ優レル處アルハ悉ク一定ノ數字ニ依リ指紋ヲ分類シタレハ指紋原紙ノ排列法ノ如キモ極メテ簡單且ツ精確テアル爲メ假令數萬ノ原紙カ集積サレテモ數字ノ標識ニヨリ其ノ中ニ所要ノ原紙ヲ恰モ書籍ノ頁ヲ讀ム如ク迅速且ツ正確ニ索引對照シ得テ以テ個人識別ノ用ニ供スルコトヲ得ル點ニアル。

斯ノ如ク簡易ナル方法ヲ以テ容易ニ迅速ニ然カモ正確ニ人ノ異同ヲ識別シ得ルコトハ之レ實ニ指紋利用ノ個人識別法ニ於ケル特長テアル。

且ツ又指紋法ニ於ケル指紋ノ分類、原紙ノ排列及ヒ索引ハ悉ク普通ノ數字ヲ以テ標識トスルノテアル而シテ其ノ方法極メテ簡單テアル爲メ僅少ノ時間ノ講習ヲ以テ容易ニ何人テモ之ヲ修得スルコトカ出來ルノテアル且ツ指紋法ノ適用ハ特別ノ技術及學術ヲ要スルコトカ少ナイノテ普通教育程度ノ者ニテモ容易ニ熟練シ得ル便利カアルノテアル。

指紋ヲ分類シ之ニ一定ノ價ヲ附スル方法ハ先ツ指紋ノ型種ニヨリ之ヲ弓狀紋、蹄狀紋、渦狀紋ノ三種ニ大別シ此ノ種別ニ據リ指紋統計ヲ採リ其ノ數ノ配合ニ從ヒ一定ノ價ヲ附スルノテアル指紋ハ統計上蹄狀紋最モ多ク渦狀紋之ニ次キ弓狀紋ハ最モ少ナキモノテアルカラ弓狀紋ニハ(1)ノ價ヲ附シ蹄狀紋ハ更ニ之ヲ甲種乙種ノ二種ニ細分シ統計ノ結果ヲ見ルニ甲種少ナク乙種多キヲ以テ甲

種ニ(2)ノ價ヲ附シ乙種ハ更ニ分割シテ他ノ指紋ノ數ト平均ヲ保タセンカ爲メ之ヲ四分シ各々(3)(4)(5)(6)ノ價ヲ附シタノテアル而シテ渦狀紋ハ又統計ノ結果之ヲ上流、中流、下流ニ三分シ上流ニ(7)ノ價ヲ附シ中流ニ(8)ノ價ヲ附シ下流ニ(9)ノ價ヲ附シタノテアル而シテ又缺損指紋ハ普通指紋ノ除外例トシテ(0)ノ價ヲ附シタノテアル（第二章議定書及ヒ第四章指紋分類學參照）

以上指紋統計ノ目的ハ指紋分類ニ各均等ヲ得セシメ以テ指紋原紙ノ排列ヲ整理スルモノニ外ナラヌノテアル指紋ヲ分チテ〇ヨリ九九九九九ニ至ル十萬ノ數ニ分ツノテ他ノ一方ノ指紋モ亦同樣ニ十萬ニ分カタレル而シテ兩者ハ之ヲ分數式ニ組合セ此ノ式ニヨリ排列スルノテアル故ニ指紋ハ $\frac{00000}{00000}$ ヨリ $\frac{99999}{99999}$ ニ至ルヲ以テ結局百億ノ數ニ區分セラレル斯ノ如ク百億ニ區別セラレタル個々ノ指紋ハ各其ノ特徵ニ依リ更ニ無限ナル數ニ區分セラレ而シテ此特徵ハ何人モ擴大鏡ヲ以テ之ヲ認ムルコトヲ得ルノテアル（第四章指紋分類學參照）

以上ノ理ニ從ヒ分類セラレタル指紋原紙ハ左ニ揭出スルカ如キ函ニ納メラレルモノテアル函ニ納ムヘキ原紙ハ之ヲ左手ノ指紋番號順ニ排列スルモノテアル卽チ指紋原紙保存函ニ如何ナル原紙ヲ收ムヘキカハ原紙ノ表面右肩ニ記載セル指紋番號ニヨルノテアル而シテ函ノ番號ハ左手指紋ノ番號ニヨリ區分サレテ居ルノテアル之ヲ圖解スレハ函ハ雛形圖ノ如ク一定ノ數字ヲ以テ區劃サレ最上部ノ標札ノ數字ハ萬位ヲ表ハシ其ノ下部ニ0ヨリ9ニ至ルマテノ横行ニ標識サレタル數字ハ千

本邦式指紋原紙保存函雛形

指紋原紙保存函中ノ一萬ノ部ヲ示ス

[1] ハ萬位〇ヨリ9ニ至ル標札テアル横行〇ヨリ9ニ至ル數字ハ千位ヲ示ス函中ノ000ヨリ900ニ至ル細字ハ百位以下原紙排列標識ヲ示ス

[1]

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
000	000	000	000	000	000	000	000	000	000
100	100 (イ)	100	100	100	100	100	100	100	100
200	200	200	200	200	200	200	200	200	200
300	300	300	300	300	300	300	300	300	300
400	400	400	400	400	400	400	400	400	400
500	500	500	500	500	500	500	500	500	500
600	600	600	600	600	600	600	600	600	600
700	700	700	700	700	700	700	700	700	700
800	800	800	800	800	800	800	800	800	800
900	900	900	900	900	900	900	900	900	900 (ロ)

位ヲ表ハスモノテアツテ更ニ函ノ內部ノ小區劃ヲ示ス數字ハ百位ヨリ一位ヲ表ハスモノテアル而シテ一柵中ノ區劃ハ原紙ヲ其ノ番號順ニ排列スルモノテアル今左ノ如キ指紋ノ分類番號ヲ有スル原紙ヲ函ニ收メント欲セハ次ノ如キ方法ヲ以テスルノテアル。

$\frac{11111}{11111}$ $\frac{19999}{19999}$ 卽チ前者ハ左手（分子）ヲ一萬一千一百十一ト讀ミ萬位ハ函ノ標札ト對照シ千位1ハ其ノ下部ノ横行標識千位1ト對照シ百位ハ更ニ函ノ內部ノ標識（百位）100ト對照シ卽チ（イ）ノ柵ニ收メルノテアル而シテ一柵中ハ更ニ十位一位ノ順序ニヨリ原紙ノ指紋番號順ニ排列サレルノテ

アル例ヘハ 11111—11112—11123ノ如キ數ノ順ニ排列サレルノテアル又若シ分子同一番號ナル時ハ分母ヲ以テ指紋番號順ニ排列スルノテアル後者ハ左手ヲ一萬九千九百九十九ト讀ミ萬位ハ函ノ標札ト對照シ千位ハ其ノ下部ノ縦行標識(千位)9ト對照シ百位ハ更ニ函ノ内部ノ標識(百位)900ト對照シ卽チ(ロ)ノ欄ニ收メルノテアル而シテ又一欄中ニアリテハ例ヘハ 19900ヲ先ニシ 19999ヲ後ニスル如ク指紋原紙番號順ニ排列スルノテアル若シ分子同一番號ナルモノ數枚アルトキハ分母ノ番號順ニヨリ排列スルノテアル斯ノ如ク原紙保存函ハ〇萬ヨリ9萬ニ至ル十個ノ函ヲ要スルノテアル。

指紋ノ索引及對照ハ例ヘハ指紋識別所ニ於テ保管シアル保存原紙(本邦ニ於テハ司法省及警視廳ニ於テ保管スル指紋原紙)ニ對シ刑務所、裁判所、檢事局、警察署等ヨリ臨時ノ紹介ニヨル指紋ヲ對照シテ受刑者又ハ犯罪嫌疑者カ前科者ナルヤ又ハ僞名其ノ他虛僞ノ陳述等ヲナスコトナキヤ否ヤヲ調査スルノテアル之ヲ紹介原紙對照ト謂フノテアル而シテ又我邦ノ指紋法制度ニ於テハ司法省ニ於テ毎月刑務所ヨリ送附シ來ル新受刑者ノ指紋ヲ保存原紙ニ對照シ前科包藏又ハ累犯ノ有無ヲ調査スルノテアル之ヲ新入原紙對照ト謂フノテアル而シテ又警視廳ニ於テハ其ノ管轄内ノ警察署ヨリ紹介スル犯罪嫌疑者ノ指紋ト對照シテ前同樣ノ目的ニ使用スル外尙犯罪現場ノ指紋ヲ鑑識シテ犯罪搜査ノ用ニ供シテ居ルノテアル。

之レ卽チ我指紋法機關ノ運用テアル今日指紋法カ刑事警察ノ活動ヲ敏活確實ナラシメ且ツ犯罪搜査ヲ科學的合理的ニ有效ニ發達セシメツツアルハ謂フマテモナイ今指紋鑑識ヨリ受クル利益ノ一端ヲ掲クレハ左ノ如クテアル。

一 職業的、旅行的、常習的、犯人ヲシテ僞名僞籍ノ餘地ナカラシム

二 犯行取調ニ先立チ前科ヲ知ルコトハ心理的ニ搜査取調ヲ容易ナラシム

三 自稱原籍地、前住地等ノ照會ノ爲ニ要スル時間ヲ節約シ取調ノ進行ヲ速カナラシム

四 警察ニ於ケル拘禁時間ヲ短縮ス

五 現物指紋ト對照上搜査ノ端緒ヲ得セシム

六 檢事局ノ取調、裁判所ノ刑ノ宣告ニ對シ前科ノ有無ヲ調査シ置クコトハ裁判官ノ最モ必要トスルトコロニシテ指紋ハ裁判官ニ確實ナル證據ヲ得セシメ極メテ有力ナル心證ノ材料トナル

第一節 指紋原紙

一 原紙作成法

指紋原紙ハ指紋ヲ押捺シ之ヲ分類シテ規定ノ價ヲ附シ而シテ各欄ノ記載事項ヲ記入シタルモノニシテ以上ノ原紙樣式ヲ完備シタルモノヲ謂フノテアル(原紙樣式ヲ完備シタルモノヲ完成原紙卽チ指紋原紙ト謂フ未タ原紙樣式ヲ完備セサルモノヲ不

（完成原紙即指紋用紙ト云フ）

原紙作成ハ先ツ指紋押捺欄ニ左右回轉印象及平面印象ヲ押捺シ又各欄ノ記入ヲナシ而シテ後指紋ニ一定ノ分類番號ヲ附シ以テ原紙作成ヲ了シタノテアル（押捺及記載ヲ了シタルモノヲ狹義ノ作成ト云フ押捺記載及分類ヲ了シタルモノヲ廣義ノ作成ト云フ）

二　指紋押捺法

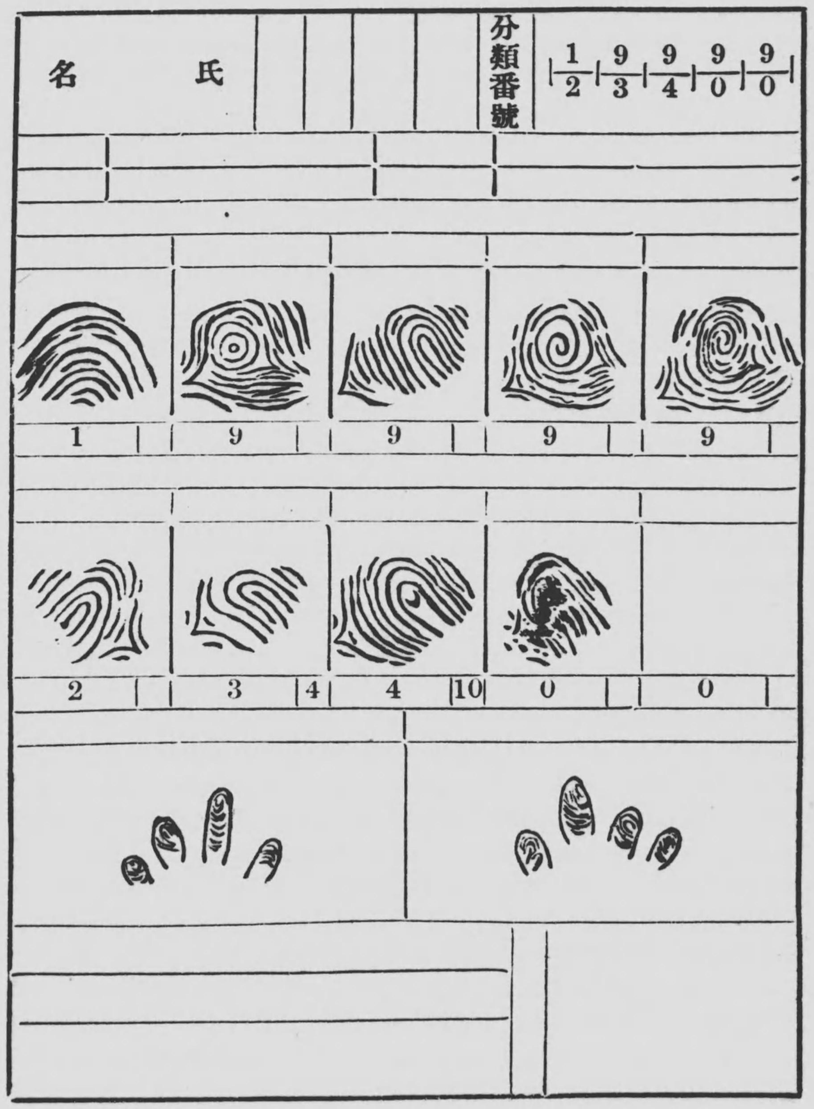
指紋原紙ハ即チ第一號樣式雛形ニ示ス如ク其ノ上欄ニハ左手示指ヨリ中指、環指、小指、拇指ノ順序ニ回轉印寫ヲ押捺スルノテアル而シテ又右手モ同樣ニ示指ヨリ指ノ順序ニ從ヒ小指ニ至リ最後ニ拇指ヲ回轉押捺スルノテアル。

斯クシテ十指ノ全部ノ回轉印象ヲ押捺シ終レハ直チニ下欄ニ左手及右手ノ示指、中指、環指、小指ノ平面押捺ヲ同時ニ押捺スルノテアル而シテ最終ニ左手示指ノ回轉印象ヲ裏面ニ押捺セシメ其ノ下ニ當人ノ自署ヲナサシメルノテアル以上ノ如キ方法ヲ以テ完全ノ指紋押捺ヲ了ルノテアル指紋押捺法ニハ回轉押捺法及平面押捺法ノ二種カアル

（一）回轉押捺法トハ指紋原紙上ニ指頭ヲ回轉シテ指紋ノ全部ヲ押捺セシムルヲ謂フノテアル。

回轉押捺方法ハ最初指頭ヲ斜ニシテ小指側ノ爪カ印刷板ト直角ヲナス位置（角度）ヲ取リ内方ヘ徐々ニ回轉シ拇指側ノ爪カ印刷板ト再ヒ直角ノ角度ヲ保ツニ至リテ止ム斯ノ如クシテ左

雛形　紙原　指紋
圖略　面表



備考　上欄ハ回轉印象下欄ハ半面印象（第一號樣式原紙參照）

手示指ヨリ中指、環指、小指、拇指ニ至リ又右手ノ示指ヨリ中指、環指、小指、拇指ニ及ヒテ全部ノ回轉指紋印象ヲ了ルモノテアル。

(二) 平面押捺法トハ指紋原紙上ニ指頭ヲ回轉セシメス自然ノ印象ヲ押捺セシムルヲ謂フノテアル平面押捺方法ハ拇指ヲ除キ左手及右手ノ示指、中指、環指、小指ノ四個ノ指頭ヲ印刷板ニ水平ニ置キ兩手ヲ同時ニ原紙上ニ押捺スルモノテアル。

備考　指紋押捺ニ關スル注意事項

指紋ヲ押捺スルニハ先ツ印刷版上ニ「インキ」ヲ塗布シ「ロール」ニテ能ク濃淡ノ平均ヲ得セシメ（インキノ塗布ハ濃キニ過クルヨリモ淡キヲ以テ可トス）若シ硝子製ノ印刷版ナルトキハ下敷ニシタル新聞紙ノ活字カ辛ウシテ認メ得ル程度ニ塗布スルヲ適度トス

指紋ヲ押捺スルニハ先ツ指紋押捺者ハ被押捺者ノ指ヲ持ツテ印刷版上ニ回轉セシメ指頭ニ「インキ」ヲ附シ而シテ又原紙上ニ回轉セシメテ印寫スルモノテアル指紋ヲ押捺スルニ當リ押捺者ト被押捺者ハ机上ノ一隅ニ於テ互ニ直角ノ位置ヲ保チテ撮取スルヲ便トスルノテアル而シテ指紋押捺者ハ指紋ヲ押捺スルニ當リ被押捺者ノ指頭ヲ石鹸及温湯ニテ清潔ニ洗滌スルコトヲ忘レテハナラヌノテアル若シ然ラサレハ指頭ノ汗及脂肪ノ爲メニ鮮明ナル印象ヲ得ルコト不可能ナラシムルモノテアル。

三　器具ノ用法

指紋ヲ檢査スルニ當リ其ノ微細ナル線ノ細點ヲ指摘シ完全ニ觀察センカ爲メニハ二倍乃至三倍ノ擴大鏡ヲ要スルノテアル又指紋ノ線數計算ニ當リ其ノ微細ナル線ヲ指導スル爲メ尖端ノ鋭利ナル針ヲ必要トスルノテアル又計算ノ規準ノ正確ヲ期スル爲メニハ計算定規ヲ必要トスルノテアル之ヲ以テ指紋印象ヲ檢査又ハ押捺スルノテアツテ其ノ器具ハ左ノ如キモノテアル。

(一) 印刷板　指紋印象ヲ押捺スル爲メニ使用スルモノテアツテ其ノ上ニ「インキ」ヲ塗布シ指紋ヲ回轉セシムルモノテアルカラ縦八寸横六寸程度ノモノヲ要スルノテアル而シテ其ノ器物ハ硝子板錫板或ハ蠟石板ヲ用ヰルノテアル。

(二) 篦　前述ノ板上ニ「インキ」ヲ適當ニ塗布スルニ使用スルノテアル。

(三) 「ロール」塗布セル「インキ」ヲ尙ホ平均ニ塗抹スルモノテ普通ノ印刷用「ロール」ヲ使用スルノテアル。

(四) 机　指紋ヲ押捺シ又ハ原紙其ノ他ノ器物ヲ置クニ使用スルモノテアツテ高サ三尺程度ノモノヲ要スルノテアル。

(五) 擴大鏡　金屬製留支物ノ上ニアリテ任意ニ回轉シ又ハ傾斜スルコトヲ得ル普通透視擴大鏡ヲ使用スルノテアル。

(六) 計算針　文房具ノ錐ノ如ク柄ヲ有スル針ニシテ柄三寸針身一寸ノモノカ適度テアル。

(七) 計算定規　縦二寸五分横六分ノ硝子板ニシテ縦斜二線ヲ引キタル部分ヲ指紋ノ上ニ乘セ下ニ映シタル線ヲ計算スルモノテアル硝子板上ニ書ケル線ヲ假想線ト謂フノテアル此ノ定規ハ

在來ノモノニ對シ尙一層ノ改良ヲ必要トスルノテアル。

第二節　指紋分類式及原紙排列法

一　指紋分類式

原紙各欄ノ指紋カ分類サレ一定ノ價カ附サレタルトキハ左手示指分類番號ヲ正標準番號ト謂ヒ右手示指分類番號ヲ副標準番號ト謂フノテアル正標準番號及副標準番號ハ原紙排列上必要ナル標識テ此ノ指紋分類番號ハ正標準番號ヲ先ニ讀ミ副標準番號ヲ後ニ讀ミ正標準番號ヲ分子トシ副標準番號ヲ分母トシ萬位ノ分數式ニ之ヲ記載スルノテアル此ノ分數式ニ記載サレタル數字標識ヲ稱シテ指紋分類番號卽チ指紋分類式又ハ指紋公式ト謂フノテアル。

指紋原紙ノ排列法ハ此ノ指紋分類番號ノ順序ニ依リ排列スルモノテアツテ卽チ小ナル番號ヲ先ニシ大ナル番號ヲ後ニスルノテアル。

指紋ハ卽チ〇萬ヨリ九萬九千九百九十九ニ至ルモノテアルカラ零ノ番號ヲ有スル原紙ヲ劈頭ニ排列シ一二三ト數ノ順序ニ從ヒ九ヲ最終ニ置クノテアル例ヘハココニ 15000,20000,25000 ノ番號ヲ有スル原紙三個アリタルトキハ 15000ヲ先ニシ 25000ヲ最終ニ排列スルカ如シ。

以上ハ正標準番號ノ互ニ相異ナリタルモノノ排列順序ヲ示シタノテアツテ若シ正標準番號同一

ナルモノ多數アリテ集積スル場合ハ副標準番號ニヨリ數ノ順序ニ排列スルモノテアル。

例ヘハ $\frac{10100}{11111}$ $\frac{10100}{21111}$ $\frac{10100}{31111}$ ノ如ク正標準番號ニ同數種ノモノアルトキハ其ノ副標準番號ノ數ノ順序ニ從ヒ 11111ヲ先ニシ 31111ヲ最後ニ排列スルノテアル（此ノ分類番號ヲ有スル原紙ハ保存函初行一〇〇ノ欄ニ納ム）

斯ノ如ク指紋番號ハ〇〇〇〇〇ヨリ九九九九九マテノ數アリ故ニ人ノ異同ハ左手ノ指紋ニ依リテ十萬ニ區別セラレル若シ左手指紋ニシテ同一ナル時ハ之ヲ右手ノ指紋ニ依リテ區別セラレル卽チ左手ト全然同一ナル指紋番號ヲ有スル人カ數人アルトキハ右手ノ指紋ノ數ノ大小ニ依リ其ノ異同ヲ識別ス故ニ右手ノ指紋ハ第二ノ標準ヲ爲スモノニシテ副指紋番號ヲ組織スルモノテアル而シテ右手ノ副指紋番號モ亦左手ノ指紋番號ト同シク〇〇〇〇〇ヨリ九九九九九ノ數アルカ故ニ人ノ異同ハ左手ノ指紋ニ依リ十萬ニ區別セラレ再ヒ右手ノ指紋ニ依リ更ニ十萬ニ區別セラルルモノテアルカラ卽チ十萬ノ二乘結局人ノ異同ハ指ニ依リテ百億ニ區別セラレルノテアル。

二　原紙保存函及索引法

凡ソ指紋原紙ハ〇萬〇千〇百〇十〇ヨリ九萬九千九百九十九ニ至ル數ニ分類サレタルヲ以テ排列函モ同樣〇萬ヨリ九萬ニ至ル大區分別トサレル而シテ函每ニ更ニ〇千ヨリ九千ニ至ル標識アリ而シテ更ニ函ノ內部ニ於テ小區分セル標識アリテ原紙ノ挿入及索引ニ便スルモノテアル而シテ又更ニ十位一位ハ一柵中ニアリテ指紋ノ番號順ニ排列サレルノテアル卽チ萬位ノ一函中ハ百

欄卽チ竪行10(0乃至9)×横行10(0乃至9)=100ニ區劃サレタルヲ以テ〇萬ヨリ九萬ニ至ル各函ノ總テハ千欄ヲ有スルノテアル而シテ指紋原紙ハ左手及右手ヲ各〇萬〇千〇百〇十〇ヨリ九萬九千九百九十九ニ至ル十萬ノ數ニ分類シタル指紋番號ヲ有スルヲ以テ之ヲ保存函ニ配當シテ排列スルトキハ卽チ竪行十萬（〇乃至九）横行十萬（〇乃至九）ニ配當サルルヲ以テ保存函中ハ十萬ノ十萬倍（十萬ノ二乘）卽チ左手(竪行)×右手(横行)卽チ百億ニ小區分セラルルノテアル（指紋法梗概ロツシエル式指紋原紙保存函錄形指紋法ノ組織指紋原紙保存函錄形參照）

斯ノ如ク原紙ハ萬位千位百位十位一位ノ順位ニ區分シテ整理排列サレタレハ所要ノ原紙ヲ索引セント欲セハ先ツ排列箱ニ至リ正標準番號ヲ讀ミ所要ノ原紙ノ納メラレタル函及欄ヲ識リ若シ一欄中ニ同一番號ノモノ數枚アルトキハ次ニ副標準番號ヲ讀メハ所要ノ原紙ハ恰モ一冊ノ書籍中ニ頁數ヲ求ムルト同一時間ニ於テ之ヲ索引スルコトカ出來ルノテアル。

第三節　指紋法實務

第一款　指紋取扱規定

一　原紙取扱方法

我指紋法制度ニ於テハ新ニ入監シタル受刑者アルトキハ其ノ指紋ヲ押捺セシメ別紙第一號樣式ノ指紋原紙ヲ作成スルノテアル而シテ指紋押捺ノ範圍ハ罪質ニヨリ多少ノ制限カアリ卽チ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタル受刑者ニ限リ之ヲ爲スノテアル。

指紋原紙ノ一通ハ原本トシテ刑務所ノ身分帳簿ニ編綴サレ他ノ一通ハ刑期三月以上ニ係ル分ハ一箇月分取纒メテ司法省ニ送附シ刑期三月未滿ノモノハ卽時發送スルノテアル（但原紙ハ刑務所ニ於テ分類ヲ成シ司法省ニ於テ檢査ヲナス）斯ノ如ク刑務所ヨリ司法省宛ニテ送附サレタル原紙ハ司法省ニ於ケル保存原紙ト對照サレ該當スル原紙ヲ發見シタル時ハ之ヲ刑務所ニ報告シ若シ該當スル原紙ナキ場合ニハソノマヽ指紋番號順ニヨリ保存函ニ排列保存サルルノテアル（原紙取扱規定參照）

二　原紙樣式及記載要旨

指紋原紙ハ表面ニ指紋回轉印象押捺欄ト平面印象押捺欄カアツテ記載欄ニハ表面記載欄ト裏面記載欄トニ區別シテアル表面記載事項ハ上欄ニ氏名、年齡、原籍、出生地其ノ他ヲ記載シ又下欄ニハ指紋ノ特徵ヲ記載スルノテアル裏面記載事項ハ判決ヲ受ケタル氏名、刑名、刑期、言渡年月日、刑始期、裁判所、刑務所及出獄年月日等ヲ記入スルノテアル其ノ他ノ記載要旨ハ左ノ如クテアル。

(一)　原紙作成及檢査ヲ爲シタル年月日ヲ記入シ且ツ係官ノ自署又ハ認印ヲ押捺セシムルハ當該取扱者ノ責任ヲ明カニスルモノテアル。

(二) 原紙表面ニ指紋被押捺者ノ氏名、綽名其ノ他ノ異名、生年月日ヲ始メ出生地、原籍、住所等ノ記入ヲナスハ其ノ者ノ身分關係ヲ詳知センカ爲メテアル。

(三) 回轉印象ノ下欄ニ平面印寫ヲ押捺セシメタルハ平面印象ニヨリ回轉印寫ノ誤寫ニヨル順序ノ誤謬ヲ正スカ爲メテアル。

(四) 指紋原紙裏面肩部ニ左手示指印象ヲ印寫セシメ且ツ氏名ヲ自署セシムルハ原紙作成ノ際萬一ニモ人違ナキコトヲ期スル爲メテアル。

(五) 裏面記載事項トシテ前科及現ニ執行スル判決等ヲ記載スルノハ卽チ原紙指紋當該者ノ種類及性質ヲ明カニスル爲テアル。

(六) 表面ノ備考欄ニハ指紋ノミノ諸特徴ヲ記シ裏面ノ備考欄ニハ身體ノ諸特徴ニ限リ記載スルノテアル。

斯ノ如ク指紋原紙樣式ニ於ケル指紋ノ押捺ハ卽チ實體個人識別法ノ利用テアツテ又原紙記載ノ方法ハ卽チ形式的個人識別法ノ利用テアル(別紙第一號樣式指紋原紙雛形參照)

玆ニ兩者ヲ互ニ調和補足セシメタル目的ハ指紋法ノ構成要件ノ特長ニシテ實ニ其ノ效果ヲ完カラシムルモノテアル。

備考 警察指紋原紙トシテハ又特ニ左ノ如キモノヲ用ヰルノテアル卽チ指紋識別官廳ニ對照ヲ求メ又ハ各警察署ニ保存スル原紙ノ樣式テアル警察原紙ニ於テハ人體測定法ノ如ク身體ノ特徴ヲモ記載スルノテアル卽チ表面ニハ指紋(樣式ハ第一號原紙雛形ニ同シ)ヲ押捺シ氏名生年月日(年齡ト相貌ト著シク相違スルトキハ外見年齡ヲ記ス)通稱、綽名、父ノ名母ノ名其ノ他ハ原紙樣式ニ同シ裏面ニハ犯人前科及司法警察事項(1)檢擧事由(刑法ノ罪名ヲ記シ必要ト認ムルトキハ犯罪種類又ハ內容若シクハ被害者氏名ヲ記ス(2)引致年月日(3)檢擧官署名(4)處分結果及其年月日(檢擧、送致、微罪不檢擧等)(5)犯人氏名自署及左手示指(被告人自署ノ後直チニ示指指紋ヲ押捺セシム)(6)作成署名ヲ記ス指紋ノ外ニ補助トシテ寫眞ヲ貼付スルモ有效ナル方法テアル若シ寫眞ヲ付セサレハ左記記載ヲ要スルモノテアル卽チ(イ)髮(濃薄等)ロ)顏(廣狹凸凹)ハ)眼(大小等)ニ)鼻(大小隆平等)ホ)口(大小並)ヘ)耳(大中小)ト)髭髯(有無)チ)腮(短長等)リ)齒(白黑等)ヌ)顏面(長角圓)ル)肥瘦ノ別(肥大肥並痩)ヲ)容顏(醜美並)特徴(瘢痕、文身、天然痣、黑子)ナキトキハナシト記ス、身長(大中小等ノ尺度)色彩(イ)面色(白朱黑等)ロ)髮色(濃淡白等)ハ)髯色(赤黑等)ニ)異徴(例ヘハ兎唇)等(ナケレハナシト記ス)

第二款 原紙管理法

原紙ノ管理ニ就テハ其ノ一部ハ前述シテアルカラ此ノ處ニハ左ノ次項ニ就テ述ヘル。

指紋ニヨル個人識別法ノ活用ハ保存原紙ノ整正ニ俟ツモノテアツテ之カ整頓シアルヤ否ヤニ關シ甚大ノ影響ヲナスモノテアルカラ原紙ノ整理ト謂フ事ハ最モ大切ナルコトテアル。

一 原紙整理

(一) 原紙保存期限

原紙ハ之ヲ無際限ニ保存貯積スルコトハ出來ナイ相當ニ整理セネハナラヌ司法省保管ノ原紙ハ最初年々三四萬ノ增加ヲ示シ今尙年々增加スルモノテアル而シテ現在ノ設備ハ百萬ヲ限度

トスル保存法テアルソコテ之ヲ整理スルニハ年齢ト保存年限トニ區別スル卽チ年齢ニ依ル原紙保存期限ハ滿七十ト規定サレテアル凡ソ人カ此ノ年齢ニ達スレハ社會的生存力漸ク消耗シテ老衰ニ趣キ危險性犯行率ノ減退ヲ來スノテアル故ニ此ノ年齢以上ニ達スル者ハ原紙ヲ保存スル必要ナキモノト認メテ排除セラルルノテアル。

保存年限ト謂フノハ指紋原紙作成ノ日ヨリ三十年ヲ謂フノテアル此ノ期間再ヒ犯罪セサレハ之レ所謂保存時效完成ト認メラレ此ノ原紙ハ排除セラレルノテアル。

(二) 廢棄原紙

死亡、重複、再度押捺ニヨル不用原紙、前科發見ニヨル不用原紙其ノ他ニヨリ廢棄スヘキ原紙カアル此等不用原紙ニ對シテハ隨時索出シテ廢棄セネハナラヌノテアル。

備考 指紋原紙保存及廢棄手續ハ左ノ如クテアル。

一 指紋原紙ハ作成ノ日ヨリ三十年間之ヲ保存ス

二 指紋原紙ハ左ノ時ニ於テ之ヲ廢棄ス

イ 死亡ノ報告ニ接シタルトキ

ロ 押捺者ノ年齢七十歲ニ達シタルトキ

ハ 保存年限ヲ經過シタルトキ

ニ 原紙ノ重複シタルトキ

(三) 誤入調査

保存函ニ納函サレル新原紙挿入ノ際時トシテ誤入スルコトナキニ非ス故ニ此等誤入原紙ニ對シテハ調査ノ必要カアルノテアル。

二 原紙ノ檢査及記入

刑務所ヨリ分類シテ送附サレタル原紙ハ司法省ニ於テ分類及記載事項記入ノ檢査ヲナシ之ヲ保存函ニ納メルノテアル又再犯者ナルトキハ曩ノ原紙ニ受刑ヲ追加記入スルノテアル。

三 保存函ノ樣式及設備

保存函ニハ柵式及ヒ抽匣式等ノ樣式カアル柵式ハ卽チ英國式テ本邦テハ此ノ式ニ類似ノモノヲ採用シテ居ルノテアル而シテ此ノ柵式ハ原紙ノ堆積ヲ分割スルニ柵ヲ自由ニ伸縮移動セシムルコトヲ得ルノテアル抽匣式ハ原紙カ汚損スルヲ防クニ特長カアルノテ卽チ藥函ノ如キ樣式ヲナスモノテアル。

柵ノ分割及標識 柵式ノ一柵ノ原紙堆積數ハ二百枚ヲ限度トスルノテアル之レ餘リ多數ノ原紙ヲ堆積セシムルコトハ出入ニ原紙ヲ破損セシムル惧レカアルカラテアル故ニ原紙カ二百枚以上ニ堆積スルトキハ一柵ノ原紙ヲ平均ニ分割スル必要カアルノテアル。

柵ノ標識ハ種々アルカ一柵コトニ標札ヲ掲ケ置クヲ最モ便利トスルノテアル。

（一〇〇ノ堆積ヲ副標準番號ニヨリ分割セル樣式）

000
100
11111
100
21111
100
31111
200
300
（保存函初行第二段欄參照）

四　氏名索引法

氏名索引ハ指紋原紙索引ト交互ニ使用シ個人ノ異同ヲ識別スル作用ヲナスモノテアル卽チ氏名索引トハ氏名ニ依ル索引テアッテ氏名ノ音（假名ノ五十音表）ニ〇ヨリ九ニ至ル數字ヲ配當シ其ノ數字ヲ以テ表示スル氏名票札ヲ作リ之ヲ其ノ數字ノ順序ニヨリ一定ノ函ニ排列スルモノテアル氏名票札ハ犯罪人氏名、指紋分類番號及ヒ原紙作成年月日、刑務所名等ヲ記載シタモノテアル。

此ノ氏名索引法ハ兒島三郎氏ノ考案ニ係ルモノテ在來ノ氏名索引ニ一新機軸ヲ出シタモノテアル其ノ特長トスルトコロハ同一姓名カ一所ニ集積スルコトヲ防キ以テ均等ノ分類ヲ得セシムルニアルノテアル。

第三款　指紋統計

指紋統計ハ事務上ノ統計及學術上ノ統計ニ區別スルコトカ出來ル。

第一　事務上ノ統計法ハ左ノ如キ統計表ヲ作成スルモノテアル。

一　指紋對照及前科發見並指紋原紙取扱數累年比較表

此ノ表ハ各年ノ比較及ヒ指紋法實施以來ノ累年總計表テ前科發見ノ項目ニハ行刑局ニテ原紙整理中前科發見ヲ表示シ指紋對照及發見ノ項目ニハ刑務所ヨリノ對照數及ヒ發見數、檢事局對照數及ヒ發見數、臺灣及朝鮮ヨリノ對照數及ヒ發見數並ニ其ノ發見總數等カ揭ケラレテアル指紋原紙ノ項目ニハ新タニ受ケタル原紙、廢棄原紙、年末現在原紙其ノ他又受刑追加人員等カ揭ケラレテアル（註一四）

註一四　指紋法ハ明治四十一年十月十六日施行セシモノニシテ大正六年迄ハ懲役囚ノミナリシヲ其後禁錮囚ヲ又大正七年共濫法施行ノ結果臺灣ト朝鮮ノ內地人ヲモ總括シテ指紋ヲ押捺セシムルコトニナツタノテアル大正十年度年末現在原紙數ハ四二七、五六八（同九年度年末現在數ハ四一四、五四五、同八年度年末現在數ハ三九〇、七三〇）テアル（行刑統計年報參照）

二　指紋對照及ヒ前科發見表

此ノ表ハ每日作成サレルノテ行刑局、刑務所、警察署其ノ他ヨリ對照數及發見數カ揭ケテアル尙總計トシテ本月中、本年間、實施以來ノ累計カ揭ケラレテアル（註一五）

註一五　大正十一年七月中ノ調査ニ依ルト本月中對照數四四〇ニ對シ發見數一九一、本年間對照數二、六四二ニ對シ發見數一、二八九、實施以來ノ累計對照數三二、〇二一ニ對シ發見數一四、八一六テアル。

三　指紋原紙月計表

此ノ表ハ萬位別ニ原紙作成及廢棄數ヲ表示スルモノテアル。

原紙ノ廢棄ハ死亡、前科發見、再度押捺、重複其ノ他ニ區別サレルノテアル。

四　指紋原紙竝受刑追加小票作成調表

此ノ表ハ原紙作成數、再度押捺原紙數、受刑追加小票作成數ヲ調査表示スル表テアル。

五　指紋原紙分類檢査成績表

此ノ表ハ分類原紙ヲ檢査スル際訂正ヲ加ヘタル數ノ割合ヲ示ス表テアル表ノ項目ハ檢査總數內譯トシテ完全原紙、不完全原紙、分類番號訂正及歩合ヲ表示シタモノテアル。

以上ハ司法省ニ於ケル指紋統計事務ノ概要テアルカ尙ホ參考トシテ警視廳鑑識課ノ指紋利用成績ヲ左ニ表示スル。

照會ヲ受ケタル總數

大正七年	一三、〇九二	四、二七七	三三％弱
大正八年	一〇、九一七	五、〇三四	四五％弱
大正九年	一一、七九〇	四、六五三	四〇％弱
總數	三五、七九九	一三、九六四	
一箇年平均	一一、九三三	四、六五四强	

第二　學術上ノ統計法ハ左ノ如キ統計表ヲ作成スルモノテアル。

一　形態學的分類法第一樣式分類法統計表

二　普通分類法（第二樣式分類法）統計表

三　識別法分類法（第三樣式分類法）統計表

此ノ統計法ハ指紋ノ種類竝ニ左右兩手ノ十指ト指紋各型種トノ關係卽チ線數及歩合ヲ調査表示スルモノテアツテ第一表ハ指紋ノ種類ニ關スル純學術的ノ統計テアル第二第三表ハ指紋法ニ於ケル原紙配分ノ割合ヲ研究スルニ必要ナル統計法テアル。

以上ノ統計ニ依リ指紋ト個性トノ關係又ハ指紋ト犯罪性トノ關係其ノ他遺傳性ノ區別種々ノ事カ研究目標トサレルノテアル（註一六）

註一六　統計上ニ現ハレタル指紋ノ特長ト犯罪性（監獄協會雜誌第二十七卷第六號所載拙稿參照）

備考　指紋法關係家ト實際事情

本邦ニ於テ最初ノ指紋法研究家トシテ夙ニ知ラレタルハ現任甲府刑務所長印南於莵吉氏テアル氏ハ米國ノ監獄制度ヲ視察ノ際英國式指紋法ヲ研究シ歸朝後元市谷監獄ニ於テ實地ニ講究シタノテアル當時黑田源太郎氏（現任小倉刑務所長）兒島三郎氏（現任市谷刑務所典獄補）カ之ニ關係シタノテアル兒島氏ハ後ニ司法省指紋部ノ主任トナリ大ニ其ノ業蹟ヲ擧ケタノテアル。

司法省ニ犯罪人異同取調會カ設立セラルルニ當リ其ノ委員諸氏ハ實ニ指紋法制度實施ノ功勞者トシテ本邦指紋制度史上ニ永久ニ記憶セラルヘキ人々テアル而シテ特ニ法學博士平沼騏一郎氏竝ニ法學博士大場茂馬氏ハ講演ニ或ハ講習ニ依ツテ實地ニ指導セラレタノテアル。

初メテ司法省ニ指紋部ヲ創設シタ際ノ功勞者ハ現任山口刑務所長白井勇松氏ヲ擧ケネハナラヌ現在ノ指紋部ニ於ケル殿

個人ヲ主トシテ氏ノ鑑計ニナツタノテアル爾來指紋部主任トシテ功勞カアツタノハ松井太作氏現任長崎刑務所片淵支所長秋元源太郎氏テアル現在ノ指紋部ノ組織ハ主任官二名各係所屬員三名內一名ヲ主筆屬トシ外ニ屬員七名ヨリ成立シテ居ル主任官ニハ書記官辻敬助氏並ニ衛生官芥川信氏屬員ニハ藤井慶藏氏局谷與三氏及ヒ不肖之ニ當リ藤井氏ハ主筆屬トシテ熱心ナル指紋統計家テアツテ種々ノ研究ヲ發表サレテ居ル局谷氏ハ指紋法實施以來ノ事務精通家テアル不肖モ亦鈍才ヲ以テ聊カ斯法ニ功獻ヲ致シ度ク指紋分類學ヲ研究シ曩ニ監獄局長タリシ法學博士谷田三郎氏並ニ法學博士大場茂馬氏ノ嘗助ヲ得テ指紋法解說ヲ著述シ指紋法術語ノ解說及ヒ其ノ統一ニ努力シタノテアル又今回ハ個人識別法學ナル一書ヲ刊行シ以テ斯學ノ現下漸々進步ノ傾向ヲ示シツツアルニ鑑ミ益々其ノ一般的普及ト斯學講習ノ敎程資料ニ供セント欲スルモノテアル。

警視廳ニアリテハ恆岡恒氏ハ警察指紋ノ精通家トシテ知ラレテ居ル臺灣ニ於テハ武田茂氏ハ其ノ創立ノ功勞者テアル又中山瑞芳氏ハ現ニ法務部ノ指紋係主任トシテ功勞者テアル兩氏ハ共ニ元司法省指紋部出身テアル又朝鮮ニ於テハ警部吉川澄一氏ハ元司法省指紋部員テアツテ警視廳ノ指紋鑑識係設立ニ功勞カアツタ今又京幾道警察部ニ在ツテ實務ニ從事セラレテ居ル。

最近本邦警察指紋法指導者トシテ努力セラレテ居ルノハ內務事務官中谷政一氏テアル氏ハ元警視廳監察官トシテ夙ニ指紋鑑識法ニ精通シ現ニ警保局ニ在ツテ近時刑事警察ニ於ケル指紋利用ノ成蹟ニ鑑ミ本邦中部及ヒ西部ノ鑑識需要ニ應スル爲メ今回更ニ指紋識別資料ヲ大阪及ヒ福岡ニ蒐集スルコトニ盡力セラレタノテアル(註一七)

註一七　本邦ニ於ケル個人識別法ニ關スル參考書

法學博士平沼騏一郎氏(論文)	犯罪人異同識別法(法曹記事第十)(人參第八號)	明治41發行
同　氏(論文)	指紋法ニ就テ(法理研究記事國業學會(雜誌第二十三卷第一號)	明治42發行
法學博士大場茂馬氏著	個人識別法(指紋法)	明治41刊行
同　氏著	指紋法解說	大正3,5,24
第田成氏(論文)	犯罪現場指紋ノ應用(警法月報第十)(二卷第九號)	大正7,9發行
宮岡恒氏著	指紋法	大正9,2,7
兒島三郎氏著	品性研究指紋上ノ個人	大正10,3,10
中山瑞芳氏編著	指紋法大講	大正10,7,23

第四章　個人識別法學ト犯罪搜查學ノ原理及應用

第一節　總說

個人識別學ト謂フハ人ノ心性及ヒ肉體上ノ差別ニヨリ各個人ノ異同ヲ識別スル方法ヲ研究スル學科テアツテ廣義ニ解スルノテアル然ルニ個人識別法ト謂ヘハ既ニ述ヘタ如ク形式的ト實體的トノ二種ニ區別サレテ居ルカ普通個人識別法ハ實體的個人識別法ヲ指シテ謂フノテアル卽チ狹義ニ解サレルノテアル。

而シテ又個人識別法學ト謂フト卽チ學理的ニ實體的個人識別法ノ起源、發達、歐米各國制度ノ比較研究、幷ニ其ノ原理ト應用ノ範圍ニ涉リ專ラ斯法運用ノ實際方法ヲ講究スル學科テアル。

本書ハ主トシテ此ノ方面ノ研究ヲ說述スルモノテアル而シテ一層步ヲ進メテ此ノ學科ノ完備セル

研究ヲ欲スルナラハ尙ホ刑事人類學、法醫學及ヒ犯罪搜査學等ヲ補助學トシテ講究サレネハナラヌノテアル。

昔時犯罪ハ極メテ殘忍ナル拷問ノ方法ヲ以テ自白カ强要サレタノテアル然ルニ近代思想ノ進歩ハ人權ノ擁護ヲ尊重スルコトニナツタノテカカル單純ナ自白ヲノミ賴リトスルコトハ決シテ正當ナモノテナク他ニ其ノ犯罪ト緊急ナ關係ニアル證據卽チ主トシテ物的證據ヲ得ナケレハナラナイト云フコトニナツタノテアル而シテ刑事學ニ於ケル近代科學ノ影響ハ所謂個人識別法學及ヒ犯罪搜査學トナツテ現ハレタノテアル今日斯學ノ刑事上ノ目的ハ犯罪ニ對スル科學的、合理的ノ搜査ト防衛ニアルノテアル。

爾來ノ犯罪搜査法ハ自然科學及ヒ精神科學ノ應用テアツテ犯罪搜査學トシテ他ノ科學ノ如ク完全ナル系統ノ下ニ建設セラルルニハ尙ホ不完全テアツタ然ルニ犯罪搜査學ハ近來著シキ進歩ヲ爲シ恰モ國際法カ普通法學ヨリ獨立シテ發達シタルカ如ク個人識別法學ヨリ指紋法カ獨立シタ科學トシテ認メラルル如ク又法醫學カ普通醫學ヨリ一ノ系統ニ纒メラルルカ如ク斯學モ今日一個ノ科學トシテ論理的系統的ニ研究サレツツアルノテアル。

最近犯罪搜査學ハ大體ヨリ綱目ヲ分ツテ心理法、觀察法、檢鏡及化學法ノ三種ニ區別スルコトカ出來ルノテアル卽チ心理法ニ於テハ刑事心理學ヲ主トシテ尙數種ノ項目ノ下ニ心理的搜査方法カ

研究サレルノテアル檢鏡及ヒ化學法ニ於テハ主トシテ法醫學的及化學的試驗カ研究サレルノテアル觀察法ハ項ヲ分ツテ應用觀察法（又ハ普通觀察法）及ヒ科學觀察法（又ハ學術觀察法）ノ二種トナシ而シテ又應用觀察法ハ更ニ項目ヲ分ツテ直接及間接搜査法トシ主トシテ犯罪現場及ヒ其ノ他ノ犯跡カ觀察的ニ研究サレルノテアル而シテ又科學觀察法ニ於テハ學術的方法ニ基キ諸種ノ犯跡カ研究サレルノテアル卽チ指紋及ヒ身體測定ノ如キハ此ノ種ノ研究ニ屬スルノテアル以上ハ問題外ニ涉リテ論述セル觀ナキニ非サレトモソハ個人識別法學ノ見地ヨリ犯罪搜査學的指紋ノ研究ヲ講述セント欲スルカ爲メニ外ナラヌノテアル。

犯罪搜査學的指紋ノ研究ハ卽チ指紋ヲ利用シテ犯罪者ノ檢舉及ヒ犯罪搜査ノ端緒ヲ得ルコトヲ迅速且ツ容易ニ又適確ナラシムルコトヲ以テ研究目的トスルモノテアル次ニ參考トシテ搜査學的指紋研究ノ要目ヲ揭ケル。

一　指紋ト年齡ノ關係、二　指紋ト職業ノ關係、三　指紋ト個性ノ關係、四　指紋ト性ノ關係

五　指紋ノ型種ト犯罪者及犯罪ノ性質上ノ關係

犯罪搜査學的指紋ノ研究ニ於テハ凡ソ右事項カ平素ノ學術的研究ニ俟チ而シテ臨時ノ利用ニ準備サレネハナラヌノテアル而シテ又搜査學的指紋ノ利用ハ主トシテ犯罪現場指紋ノ研究ニアルノテアル。

尙ホ左ニ參考トシテ有名ナル指紋學者ノ搜査學的指紋研究ノ實例ヲ掲ケル。

吾人ハ單ニ指紋印象ノミヲ觀察シテ犯人ノ年齡及職業ヲ推定スルコトカ出來ルノテアル此ノ實驗ハ「フォルヂオー」氏ノ研究ニヨリ證明サレテ居ルノテアル卽チ指頭ノ中央ニ於テ五ミリメートルノ線ヲ隆線ニ垂直ニ立テ此ノ間ニ介在スル隆線ノ數ヲ計算スルトキハ乳兒ノ指紋ノ印象ニ於テ十五乃至十八ノ隆線ヲ測リ得タルモノテアル然ルニ八歲ノ小兒ニ於テハ十三線、十二歲ノ子供ニ於テハ十二線トナリ二十歲ノ成年期ニ達セル者ニ於テハ其ノ數九乃至十線ニ減少シ二十歲以上ノ者ニアリテハ更ニ減シテ七或ハ六線ヲ算スルニ過キスト謂フ。

此ノ實驗ニ依ツテ見レハ一定ノ試驗尺度ヲ標準トシテ指頭隆線ヲ測算スレハ隆線ノ數ハ年齡ニ反比例シテ減少スルモノテアルト謂フ定理カ得ラレルノテアル之ヲ以テ隆線ノ線數ヨリ年齡ヲ推察スレハ線數カ少ケレハ少ナキ程年長者テアツテ線數カ多ケレハ多キ程年少者テアルト云ヘルノテアル。

又他ニ指紋印象ヲ觀察シテ凡ソ其ノ年齡ヲ推知スル方法カアル卽チ夫レハ老人ノ指紋ヲ研究スルコトニヨリ推察サレルノテアル凡ソ老人ノ手掌及指頭ノ皮膚ハ多年ノ使用ニヨリ硬固ニ且ツ磨滅、削耗セルニヨリ其ノ印象ハ多クノ場合鮮明ナラサルヲ特徵トスルノテアル故ニ隆線數少ナクシテ荒廢セル指紋印象ヲ見ルトキハ略ホ老人ノ指紋テアルト推定スルコトカ出來ルノテアル。

指紋印象ハ又其ノ人ノ職業ニヨリ特徵ヲ有スルモノテアルカラ此ノ指紋印象ノ特徵ヲ觀テ略ホ其ノ人ノ職業カ鑑別サレルノテアル卽チ農夫、工夫、石工、大工職其ノ他手指ノ皮膚ヲ常ニ磨損シ易キ職業ニ從事スルモノハ其ノ印象ハ常ニ不鮮明テアル斯ノ如ク指紋ノ諸特徵ヲ研究スルコトハ搜査學ニ取ツテ甚タ必要ナ事項テアル尙ホ次節ニ掲ケタ指紋利用ノ實例ト參照シテ研究スルナレハ一層興味アルコトト思フノテアル。

最近犯罪搜索上ノ新研究

最近ノ科學的犯罪鑑識法ノ種類ハ其ノ數少ナカラサレトモ其ノ內最モ有效ナルモノヲ擧クレハ寫眞術ノ應用、檢鏡及化學法、指紋法幷ニ人體測定法其ノ他容貌記載學等テアル而シテ殊ニ最新且ツ效用著シキモノハ指紋ノ應用テアル之ヲ以テ本書ニ於テハ主トシテ指紋ニ就キ其ノ利用法ヲ述ヘルコトニシタノテアルカ指紋以外ノモノテ尙最近ノ研究ニ係ルモノヲ左ニ參考ノ爲メ掲ケル。

一　毛髮鑑定　毛髮ノ外形、色彩人間及各種動物ノ毛髮ノ種類ノ研究ニ依ツテ單ニ毛髮ノミヲ觀察シテ人ノ男女ノ區別若クハ年齡ノ區別其人ノ位置、職業モ鑑別スルコトカ出來ル又人間ト他ノ動物トノ區別モ出來ル又人體中ノ執レノ局部ノ毛髮ナルヤモ區別サレルノテアル之等ハ顯微鏡ヲ以テ毛ノ斷面ヲ檢査シ又ハ毛素細胞ノ發達狀態ヲ檢査シテ其ノ相違ニヨ

リ以上種々ナル鑑別カサレルノテアル此ノ方法ハ二三年前カラ米國加州バークレー警察署ニ於テ研究サレテ居ルノテアル現ニ本邦ニ於テモ此ノ種ノ研究カ實驗サレテ捜索上效果カアルト謂フコトテアル。

二　「ポロスコピー」指孔法　此方法ハ佛國「ローカル」博士カ一九一一年今カラ凡十年前ニ此方法ニ着手シタノテアルカ爾來研究ヲ續ケテ最近漸ク之ヲ公表シタノテアル博士ニヨルト指紋隆線面ノ乳頭口ハ指紋ト同シク全然變化シナイモノテアル而シテマタ萬人悉ク異リ各人ソレソレ特有ノ形ノモノヲ持ツテ居ルソコテ極メテ小部分ノ指紋カ殘ツテ居ツテモ此ノ小孔サヘ調フレハ容易ニ犯人ヲ斷定スルコトカ出來ルノテアル此ノ種ノ指孔ハ一粍米突(三厘三毛)ノ間ニ九ツ乃至十八程ノ割合ヲ示スノテアル之ヲ以テ指紋ト同樣ノ方法テ之ヲ寫眞ニ撮リ擴大シテ嫌疑者ノ其レト比較シテ識別スル方法ナノテアル。

三　「レントゲン法」　此方法ハ伯林ノ「ネルケント」ト謂フ犯罪學者ニヨリ實驗サレ近頃常習犯人ノ指頭ヲX線テ撮ツテ指紋ト共ニ骨ノ特徴マテ明カニ撮影シ以テ犯人檢擧ニ役立タシメントスルモノテアル指紋ハ時ニ酷似シテ居ルカ骨骸ハ各人全ク異ツテ居ルカラ犯人捜査ニ極メテ有效テアルソウテアル此ノ方法ニ依リ蒐集サレタル各種ノ寫眞ハ骨ノ量及ヒ指紋ノ型種ニ依リ分類シテ保存サレルノテアル。

尙詳細ハ國家醫學雜誌第四一九號大正十年十二月二十日發行所載種村弐氏論文「レントゲン、ダクチロスコピー(個人識別ノ一新法)ニ就テ」ヲ參考スレハ了解カ出來ルノテアル。

四　容貌記載學　此ノ學科ハ「ベルチオン」式寫眞法ニ依リ瑞西ノ「ライス」博士カ研究シタモノテアツテ其ノ應用宜シキヲ得ハ犯罪者カ如何ニ變裝スルモ又其ノ他ノ方法ニ依リ別人ナルカ如ク裝フモ容易ニ之ヲ看破シ得ルニアルノテアル此ノ方法ノ發見ハ最新ニ非サルモ近世ノ發達ニ係リ相當ノ效果ヲ認メラレツツアルモノテアルカラ左ニ參考ノ爲メ略述セン。

同法ハ實物又ハ寫眞ヲ應用シテ專ラ鼻及耳ノ外形ヲ測定スルノテアル。

(一)　鼻ハ之ヲ細別シテ鼻根、鼻筋、鼻底、鼻長、鼻高、及鼻幅ノ六部ト爲スノテアル。

(二)　耳ハ之ヲ細別シテ耳輪、耳朶、對耳角、對耳輪及全體形狀其ノ他ノ特徴ト爲スノテアル。

凡ソ人ノ鼻及耳ノ形狀ハ千態萬狀ニシテ顏面及其ノ他ノ部分ヨリ多クノ特徴ヲ有スルト云フノテアル之レ記載學ノ根據トナル要點テアル爾來佛國巴里ニ於テハ「ベルチオン」測體法ト共ニ採用セラレ刑事ニ關係アル各官吏幷ニ警察行刑官吏ハ皆此ノ講習ヲ授ケラレルノテアルト謂フ。

第二節　指紋利用ノ實例

吾人ハ今ヤ指紋印象ヲ最モ有用ナル方法ニ於テ適用シ重要ナル實務ヲ致シテヲルノテアル指紋ノ分類及配列ニ對スル此ノ方法ノ功益ハ吾人ノ實用上ニ於ケル日々ノ結果ニ據リ之ヲ保障シテ餘リアルモノテアル。

左ニ掲クル數例ハ本邦及外國ニ於ケル指紋法ノ實況テアツテ指紋研究者ニトリテハ興味最モ多キ問題テアル第一例ハ印度ニ於テ初メテ指紋ヲ利用シテ效果カアツタ實例テアル第二例第三例ハ英國諸都市ニ於ケル指紋利用ノ實況テアル以上ハ共ニ「ヘンリー」氏ノ指紋法ニ關スル著書ニ例示サレタモノテアル第四例第五例ハ卽チ本邦ニ於ケル指紋利用ノ實例テアツテ讀者ノ最モ興味ヲ感スルモノテアル之ヲ以テ指紋利用法ノ一班ヲ知リ且ツ其ノ利用方法ヲ修習センコトヲ希望スルノテアル第六例第七例ハ南米諸都市ニ於ケル實例テ之レ又指紋利用法ノ好資料ヲ示シタモノテ以上ハ「ブセッチ」氏著指紋法ニ掲載サレタ實例テアル第八例第九例ハ獨逸及佛國ノ實例テアツテ之レ又指紋利用ノ參考トナルモノテアル。

實例一　此處ニ掲ケルノハ印度ベンガル裁判所ニ於テ決定シタ有名ナル犯罪事件ノ一例テアルガソハブータン國境ノ或ル部落ニ於ケル茶園ノ主人カ殺害サレ而シテ手文庫ト金庫中ニ在ツタ數百金カ强奪サレタ事件テアル或朝主人カ喉ヲ切斷サレテ床上ニ横ハツテ居タノヲ發見シタノテ雇人カ其ノ嫌疑者トシテ拘引サレタ其ノ雇人ト云フノハ彼ノ衣服ニハ血痕ノ斑點カ附着シテイタカラテアル又一人ノ姦通殺人犯アルモノヲ嫌疑者トシテ拘引シタ又此ノ附近ニ其頃屯營セル一隊ノ兵士ノ者カ犯罪傾向アルモノトシテ嫌疑サレタ而シテ以上ノ關係者ハ皆檢擧スヘキ確實ナ證據ヲ持タナカツタノテアル依ツテ茶園ノ主人ニ就テ平素ノ素行ヲ調査スルコトニナツタ然ルニ彼ニハ平素敵ヲ造ル樣ナコトナク至ツテ溫順ナ性質テアツタ然シ彼ハ唯一度彼ノ雇人ノ一人ヲ竊盜犯トシテ入監セシメタ事カアルノテ其雇人ニ就テ調査ヲナスコトニナツタ其ノ結果同人ハ數週前ニ出獄シタ事實ヲ確知シタノテアル然ルニ同人ノ行衞ハ不明テアル依ツテ茶園近隣ノ者カラ聞クトコロニ依ルト彼ハ其後主人ノ茶園ノ附近ニハ一度モ姿ヲ見セタコトカナイト謂フコトヲ確メタノテ話ハ前ニ戻ルカ血ノ斑點カ附着セル衣服ヲ着テイタ雇人カ言フニハ其ノ血痕ハ主人ノ料理ヲナス際殺シタ鳩ノ血カ附着シタ汚點テアルト云フノテアル依ツテ之ヲ分析シタ結果ソレカ眞實テアルコトカ解ツタココニ於テ犯人ノ搜査ニ困難ヲ來シタノテアルカソコニ唯一僥倖ナコトニハ搜査ノ端緒トシテ手文庫ノ紙ノ中ニ「ベンガル」文字ヲ印刷サレタ曆ヲ發見シタ其ノ外部ハ靑色ナ紙テ包マレ其上ニ二個ノ褐色ヲ呈シタ斑點アルニ氣附イタ直チニ廓大鏡ヲ以テ之ヲ檢査スルト其ノ汚點ハ或者ノ右手ノ指ノ印

象テアルコトヲ鑑識シタ。

ベンガル中央警察署ニハ有罪者ノ多クノ指紋カ指紋原紙ニヨリ保管サレテアル然ルニ暦ノ上ノ指紋印象ト對照スルコトニヨリ「カンガリ、チヤレン」ト云フ者ノ右手拇指ノ印象テアルコトカ解ツタ同人ハ元ト茶園ニ雇ハレテ居ツタ者テアル事カ知レタソコテ彼ヲ探索スルコトニナリ遂ニ「チヤレン」ハ此處ヨリ數百哩ヲ隔テタバリガンニ於テ逮捕サレタノテアル彼ハ直チニカルカツタニ送ラレ再ヒ右手拇指ノ印象ヲ採取サレタ。

斯ノ如クシテ警察テハ確固ナル證據ヲ擧ケタ而シテ又政府ノ化學試驗所ノ證明ニヨリ暦ノ上ノ褐色ノ汚點ハ人間ノ血液テアルコトカ證明サレタノテアル。

察スルニ此ノ血痕指紋ハ犯人カ金庫ノ錠ヲ求メル爲ニ手文庫中ノ紙ノ中ヲ隈ナク捜カシテイル際其中ニアツタ暦ニ血ノ附着シタ拇指カ觸レテ印シタモノテアルコトカ推知サレ彼ハ眞ノ殺人者カ或ハ此ノ關係者テアルコトカ判明シタノテアル而シテ彼ハ法廷ノ審問ヲ受ケ遂ニ殺人强盜ノ判決ヲ受ケタノテアル。

以上ハ卽チ警察ノ犯罪捜査上及ヒ裁判ノ證據トシテ指紋利用ノ實例テアルカ斯ノ如キ事件ノ例ニ於テ觀察シテモ指紋印象ノ符號カ明確ナル推斷ヲ得ルコトニ於テ指紋利用ノ如何ニ有效テアルカト云フコトカ論斷サレルノテアル。

實例二　一九〇四年八月十七日ハンマースミス市、セントペータア街ノ三十番地ニ於ケル或ル家ニ夜間盜賊カ入ツタ而シテ立去ル前ニ大水呑テ酒ヲ一杯飲ンテ出テイツタ然ルニ水呑ノ上ニハ盜賊カ左指二本ヲ觸レタ印象カ殘ツテイルノヲ後テ發見シタノテアル早速ニユースコツトランドノ指紋調査係ニ於テ捜査スルト著名ナル犯罪者「ジョーヂ、ゲージ」ナル者ノ指紋ノ二個ニ符號スルコトカ確メラレタ其後「ゲージ」ハ逮捕サレテ法廷ノ審問ヲ受ケタ彼ハ犯罪ヲ自認シタ而シテ懲役四年ノ刑カ宣告サレタ此事件ハ詳細ニ一九〇四年十月二十一日ノ「デーリー・テレグラフ」紙上テ報セラレタノテアル。

實例三　一九〇四年十一月二十九日ポプラー市、クリスプ街五番地ニ夜盜カアツタ其進入ハ地下室ノ窓ノ一枚ノ硝子板ヲハカス方法ニ依ツテ遂行サレタ然ルニ窓枠カラ取ツタ硝子ノ上ニ右手ノ第四指右手ノ中指左手ノ拇指左手ノ第四指又左手ノ中指カ凡テ自然ノママニ印跡セラレテアツタ印象ノ形狀ハ左手拇指カ渦狀紋テ他ノ多數ハ乙種蹄狀紋テアツタ其他ソコニ又硝子ノ上ニ印寫サレテ然カモ鮮明ナ渦狀紋カ在ツタ而シテソノ大サニ依テ拇指ナルコトカ想像サレタ而シテ保管原紙ノ内 $\frac{5}{17}$ テアルコトヲ捜シ當テタソレハ兩手ノ拇指カ渦狀紋テ殘リノモノカ蹄狀紋テアルトキニ規定サレテアル指紋分類式テアル卽チ $\left(\frac{W}{W}\right)\left(\frac{L}{L}\right)\left(\frac{L}{L}\right)\left(\frac{L}{L}\right)=\frac{W\,L\,L\,L}{L\,L\,W\,L}$ $\frac{16}{0}\frac{0}{0}\frac{0}{4}\frac{0}{0}\frac{0}{0}=\frac{16}{4}+\frac{1}{1}=\frac{17}{5}=\frac{5}{17}$ ノモノカ蹄狀紋テアルトキニ規定サレテアル指紋分類式テアル而シテソレハ「ウオルターローズ」ナル

「第二章ヘンリー式指紋法指紋原紙保存函雛形(二)ノ欄」

モノノ指紋ナルコト確カナアル左手ノ印象ト正確ニ一致スルコトヲ見出シタノテアル此ノ發見ニヨリ此ノ事件ニ於テ警官ハ直チニ「ローズ」宛ニテ告發狀ヲ發シ彼ヲ搜索シタ賍品ノ或ルモノカ彼ノ居宅テ發見サレタ而シテ夜間竊盜罪トシテ告發サレ彼ハ賍品ト共ニ逮捕サレタ遂ニ「ローズ」ハ有罪ニ服シタ此事件ハ一九〇四年十二月二十一日ノ「モウニング・アドバータイザ」ニ依ツテ報セラレタノテアル。

「ヘンリー」氏ハ斯ノ如キ現場指紋印象ヲ寫眞ニ擴大シテ裁判上ノ證據トシテ證明力アルコトヲ主張シ現ニ擴大指紋ハ法律上ノ證據トシテ許可サルルニ至ツタノテアル。

實例四　本邦ニ於テモ亦以上ノ例ニ類似シタ實例カ幾多モアルノテアル其ノ內一二ヲ掲載スルコトニシタ一例ハ横濱市ニ在ツタ竊盜事件ノ例テ或ル商店ノ主人ノ手提金庫中ニ藏置シテアツタ金員カ何時ノ間ニカ竊取サレタノテアル此ノ事件カ附近ノ警察ニ屆出テラレタ警察官カ現場ニ出張シテ搜査スルト金庫ノ上及金庫ヲ藏置シテアツタ二階ノ硝子障子戸ノ上ニ指紋カ印セラレテアルコトヲ發見シタノテアツタ。

犯人ノ指紋ハ二階ノ硝子戸カ新タニ修繕サレタノテ未タ「パテ」カ乾燥シテ居ナカツタ爲ニ犯人ノ手カ之ニ觸レテ更ニ硝子戸ニ印シタモノテアツタ而シテ金庫上ノ犯人ノ指紋ハ自然印象卽チ脂肪ニヨリ印セラレタモノテアルカラ之ニ撒粉シテ複寫シ之ヲ硝子戸ノ指紋ト對照ノ結果同一人ノモノテアルコトカ知レタ之ニヨリ察スルニ犯人ハ金庫ヨリ金ヲ奪ヒ硝子戸ヲ開キテ屋外ヘ逃走ヲ企テタコトカ明ニ推察サレタノテアル然シ尙ホ細密ノ臨檢ノ結果外部ヨリ賊カ侵入シタ形跡カ少シモ認メラレナカツタノテ警察官ハ疑念ヲ懷キテ先ツ同商店ノ家人及店員全部ノ指紋ヲ採取シ金庫上及硝子戸上ニ印セル指紋印象ト對照セルニ果タシテ同商店ノ或ル店員ノ指紋ト符合スルコトヲ發見シタノテアルソコテ直チニ其ノ者ヲ拘引シ取調ヲ行ツタトコロ同人ハ容易ニ自白シテ罪ニ服シタト謂フコトテアル。

實例五　尙他ノ實例トシテハ埼玉縣下ニアツタ殺人事件ノ例テアル現場ニハ何等搜索上參考トスヘキモノカ無カツタ然シ犯場ヨリ程隔テタル墓地ノ中ニ手拭ト饅頭ノ食ヒ餘シカ棄テテアツタノテアル之ヲ調ヘテ見ルト手拭ハ北海道地方ノ特有ノモノテ饅頭ノ皮ニハ指紋カ殘留シテ在ツタ之ヲ端緒トシテ北海道管內ニ於テ最近刑務所ヨリ釋放サレタ前科犯者ニ就キ嫌疑搜査シタノテアツタカ遂ニ其ノ事件ハ不明ニ終ツタノテアル其後數ケ月ヲ經テ名古屋ニ於テ竊盜犯テ逮捕サレタ或ル犯人カアツタ其ノ者ノ指紋原紙ハ司法省ニ對照方カ紹介サレ保存原紙ト對照ノ結果前科數犯アルコトカ判明シタノテアル玆ニ於テ同人ヲ嚴重ニ取調ヘルト今迄ノ罪科ヲ逐一自白スルニ至ツタ其ノ內埼玉縣下ニ於テ殺人ヲ行ツタコトカ自白サレタノテアルココニ於テ當時寫眞ニ撮取シテ保存シテアツタ饅頭ノ指紋ト同人ノ指紋トヲ對照シタルニ疑

ナク同一指紋テアルコトカ確メラレタノテアル而シテ同時ニ今迄不明テアツタ殺人事件カ判明シ而シテ犯人ノ確カナ證據ヲ得ラレタト云フ事テアル。

以上ノ例ニ依ツテモ犯人不明ノ事件ニ於テハ假令指紋カ斷片的ノモノテアツテモ他日參考ノ資料トシテ大切ニ適宜ノ方法（原物又ハ寫眞）ヲ以テ保存シ置クコトハ最モ必要ノ事テアル。

「ブセッチ」氏指紋法ニ於テモ右同樣ノ例ヲ示シテ居ル卽チ南米ラプラタ市ニ殺害事件カアツテ家宅臨檢ノ際壁紙上ニ血痕ヲ認メタノテアルカソレカ明瞭ナ蹄狀紋ノ印象テアツタ之レ疑ナク犯人カ殺傷ノ際血ノ附着シタ指ヲ以テ印シタモノト認メタノテアルソコテ他日ノ參考ニ血痕ノ存スル壁紙ヲ切取リ原形ヲ適宜ニ寫眞ニ擴大シ總テ同家ニ同入スル者ノ指紋ヲ採取シ前記血痕指紋ト對照シタカ一モ之ニ該當スルモノヲ發見スルコトカ出來ナカツタノテアル然シ斯ノ如キ場合ニ「ブセッチ」氏ハ原紙指紋及其寫眞指紋ハ他日犯人ヲ檢擧シ得タル時ハ識別ノ用ニ供スヘキモノテアルカラ參考資料トシテ之ヲ起訴書類中ニ保存スヘキヲ規定シテ居ルノテアル又「ブセッチ」氏ハ不明事件ノ發見ノ爲ニ變死者ノ指紋ヲ採取シテ保存原紙ニ對照スルコトノ有要ナルヲ主唱シテ居ルノテアルソレハ或ル場合ニ於テ不明ナル逃走者及不明ナル事件ノ犯人ヲ知ル事カ出來ルカラテアル我國ニ於テモ變死者及刑務所逃走者カ保存原紙ニ依リ發見サレタ例カ屢アルノテアル。

實例六　一八九二年ネコチエーア（南米）警察署ハ一名ノ婦人頸部ニ傷害ヲ蒙リ其ノ幼兒二名（男兒）慘殺セラレタリトノ急報ニ接シ臨檢シタ然ルニ傷害ヲ蒙リタル婦人ハ自己ノ住家アル隣地ニ居住スル者カ此ノ兇行ニ及ヒタルコトヲ陳述セルカ故ニ嫌疑者トシテ同人ヲ豫備檢擧シタ臨檢ノ任務ヲ帶ヒテ同家ニ出張セル同地ノ警察官ハ遂ニ犯罪ノ證據ヲ擧クルコト能ハサリシ爲メ尙ホ警察本部ヨリ檢察官ヲ派遣シテ新タニ搜索ニ從事セシメタ然ルニ亦好結果ヲ得ルコト能ハスシテ空シク失望セントスルニ際シ偶然犯罪ヲ遂行セル食堂ノ扉上ニ指紋ヲ示ス血痕夥多附着スルモノアルコトヲ發見シタソコテ敏速ニ同扉ヨリ是等指紋ヲ殘留セル部分ノ二個處ヲ切取シ猶ホ同家隣住者及死兒ノ母タル同家婦人メ指紋ヲ採取シ之ヲ個人識別所ニ送附シ調査セシメタノテアル然ルニ現場指紋ハ死兒ノ母ノ手指ニ該當スルコトヲ迅速ニ立證スルコトヲ得タノテアルココニ於テ遂ニ眞正ノ犯人ハ被害兒ノ母ナルコトヲ證明スルコトヲ得タノテアル。

證據實ニ斯ノ如ク明確ナルモノアルニ依リ警察官ハ犯人トシテ直チニ同婦人ヲ檢擧シタ而シテ同婦人ハ疑ヲ挾ムヘキ餘地ヲ存スルコト能ハサル狀態ニ陷リ遂ニ總テ兒行ヲ遂ケタル狀況及ヒ之ニ使用セル機具ニ就キ明細ニ陳述シ遂ニ其ノ犯人ナルコトヲ自白シタト云フコトテアル此ノ例ニ就キ「ブセッチ」氏ハ曰ク蓋シ斯ノ如ク犯罪事件ハ人ノ變體性ニ基キ發生シタモ

ノテアツテ人情ヨリ見ルモ實母タル者カ自ラ手ヲ下シテ實子ヲ殺害シタト云フコトハ容易ニ信シラレナイ事實テ此際司法官カ單ニ普通ノ道德上ノ觀念ノミヲ念頭ニ措テ推斷シタナラハ實母ニ對シ嫌疑ヲ抱カナカツタラウ而シテ犯人搜索ノ際若シ明確ナル指紋ノ補助カナカツタナラハ其ノ犯罪ハ容易ニ檢擧スルコトカ出來ナカツタテアラウト云フテ居ルノテアル誠ニ然ル可キテアル。

實例七 尙次例トシテ擧ケラレタノハ轢死者ノ例テアル之モ亦南米ニ起ツタ事件テ或者カ列車ニ觸レ轢死シ其ノ顏面粉碎シテ何人タルカヲ認ムルコトカ出來ナカツタ加フルニ其ノ他本人ヲ識別スヘキ書類又ハ物品ヲ携帶スルコトカナカツタノテアル此時事故ノ發生地ヲ管轄スルトローレス個人識別所員カ現場ニ赴キ屍體ニ就キ指紋ヲ採取シタ（兩手ハ幸ニシテ原態ヲ保存セリ）而シテ本人ハ前科ニ據リ指紋ヲ採取セルコトアルヲ以テ之ニ該當スル指紋原紙ヲ記錄中ニ發見スルコトヲ得タノテアル之ニ依リテ其ノ何人ナルカヲ識別シ之ヲ報告セルニ同人ハ此慘事ニ遭遇スル前、踪跡ヲ失シタル者ニシテ遺族ハ其ノ着衣ニヨリ同人タルコトヲ認メ識別ノ結果完全ナルコトヲ得タリト云フコトテアル。

實例八 此レハ獨逸國ドレスデン市ニ起リタル殺人事件ノ例テアル現場檢證ノ結果一本ノ木材ノ上ニ犯人ト思ホシキ者ノ附着セル一個ノ血痕指紋ヲ發見シタノテアル鑑識係長ノ「ドクトル・ベツカー氏」ハ此ノ現場指紋ト多クノ嫌疑者ノ指紋トヲ對照比較シテ其ノ内ヨリ兩者ノ指紋カ絕對的ニ合致ヲ爲ス一人ノ男ヲ遂ニ發見スルコトカ出來タ之ニ依リ取調ノ結果其ノ男ハ包ムニ由ナク總テノ事實ヲ自白スルノ已ムナキニ至ツタノテアル以上ノ指紋ハ六箇所ノ特徵ニ就テ符號スル點カアツタノテアル。

實例九 二三年前ノ事テアルカ佛國サロンノ或ル町ニ住メル巴里人ノ齒科醫師ノ下僕カ或夜其ノ寢室ニ於テ何者カニ殺害セラレタ事件テアル現場ヘ出張シタ警察官ハ殺害者カ破壞シタ金庫ノ硝子板上ニ犯人ノ指紋ヲ發見シタ此ノ硝子板ハ直ニ裁判所ニ送ラレテ寫眞ニ撮影サレタ卽チ「ベルチオン」氏ハ電氣ニヨリ明瞭ニ硝子板上ノ指紋ヲ撮影シタノテアル而シテ更ニ之ヲ寫眞ニヨリ擴大シタルトコロ硝子板上ノ指紋ハ犯人ノ右手ノ拇指、示指、中指、環指カ押捺サレタルコトカ判明シタノテアル察スルニ犯人カ犯罪ノ時ニ於テ硝子板ヲ破壞シタル後之ヲ取リ外ツサムト試ミタル際ニ拇指ヲ硝子ノ外面ニ示指、中指、環指ヲ内面ニ押シ當テタル爲ニ生シタルモノナラムトノ推定ヲ得タノテアル。

此ノ擴大セラレタル寫眞ニ基キテ人身測定ニ因ル人相書ノ臺帳ヲ隈ナク繙閱シ硝子板ノ指紋ト同一ノモノナキヤ否ヤヲ詮議シタ此ノ人相書ニハ前科者ハ其ノ寫眞ト指紋トヲ共ニ登載セラレテアルノテアル搜索ノ結果一ノ犯罪人ト符合スル人相書ヲ發見シタソレニハ其ノ者ノ寫

異ト指紋トカ添テアリ且ツ尙ホ身長、腕ノ長サ、胸幅、頭ノ丈及幅、顴骨ノ直徑、右耳ノ長サ、足及ヒ中指、環指ノ長サ、左下膊ノ丈、眼、毛、髯ノ色彩、皮膚ノ色合、竝ニ裏面ニハ其ノ者ノ姓名、生年月日ト出生地トヲ記載セラレテアル。

斯クシテ巴里ノ鑑識官ハ犯罪實行後二十四時間ニシテ當該事件ノ犯人ノ寫眞、姓名竝ニ精細ナル人相書ヲ搜査官ヘ交附スルコトヲ得タ玆ニ於テ係官ハ此ノ人相書ヲ全佛國ノ警察署ヘ打電シ犯人ノ取押方ヲ囑託シタル所數時間後ニシテ犯人ハマルセーユニ於テ逮捕セラレタト云フコトテアル。

第三節　指紋鑑識法

第一款　指紋印象

第一線

線ノ生理上ノ作用　手掌又ハ足ノ裏面ヲ見ルト無數ノ線ノ隆起（凸線）ト窪ミ（凹線）カ交互ニ高低ヲ作ツテ居ルノテアル恰モ畑ノ畦ノ樣ニ又見樣ニ因ツテハ寄セテハ返ス海濱ノ潮カ沙上ニ書ク波ノ跡ノ樣ニソノ皮膚ノ表面ニ凹凸カ出來テ居ルノテアル又此ノ凸線ヲ峯ト見レハ線ノ窪ミカ谷テアツテ此ノ峯ト谷カ相互ニ入リ換リ入リ換リ連續シテ横ハルノテアル。

斯ノ如ク指頭內面（第一關節以上指端ニ至ル）ノ皮膚組織ヲ精細ニ檢スルトキハ線ノ隆起或ハ線ノ窪ミ或ハ皮膚ノ皺等ニヨリ成立ツテ居ルノテアル而シテ又此等皮膚ノ壁ミヲ仔細ニ檢スルト種々ノ紋形ヲ形作ツテ居ルコトヲ發見スル之レ卽チ指紋テアル。

今試ミニ此ノ指紋ヲ有スル指頭ノ內面ノ皮膚ニ「インキ」ヲ塗布シ之ヲ紙上ニ押捺スルト白キ線トナツテ表ハレルノハ卽チ線ノ窪ミテ隆線ト隆線トノ間ノ餘白テアル但シ皺ノ餘白モ白キ線トナツテ表ハレルカ線ノ窪ミトハ異ナルモノテアル卽チ隆線及隆線溝ノ組織ハ皮膚ノ壁ミテアルカ皺ハ皮膚ノ緩ミテアル指紋法ニ謂フ指紋トハ卽チ此ノ隆線ノ組織形狀ヲ謂フノテアル。

隆線ハ其ノ上ニ脹レテ球形ヲナス無數ノ口孔ヲ持ツモノテアル而シテ其ノ狀恰モ乳頭形ヲナスヲ以テ醫學上之ヲ乳頭線又ハ指頭隆線ト謂ヒ而シテ線ノ窪ミヲ隆線溝ト謂フノテアル（但シ我指紋法ニ於テハ指紋隆線ニ單ニ線ナル譯語ヲ附シタノテアル第二章議定書參照）此ノ無數ノ口孔ハ眞皮ノ下ニ横ハル汗線ヨリ體外ニ汗又ハ脂肪ヲ排泄スル爲メノ管ノ口孔テアル而シテ其ノ口孔ヨリ排泄サ

圖面平ノ線

ルル水氣ハ普通眼ニハ止ラナイ程微細ナモノテアルカ指頭一度ヒ硝子又ハ漆器等ノ光澤アル器物ニ接觸スルト忽チ鮮カナ指紋ヲ現ハスモノテアル。

凡ソ隆線ハ生理上如何ナル作用ヲナスモノテアルカ生理學者ノ說ニヨルト隆線ハ人體ノ汗ヲ容易ニ放出セシメンカ爲メ其ノ口孔ヲ隆起セシムルニ外ナラスト謂ヒ或ハ又隆線ノ特ニ隆起セルハ觸覺ヲ鋭敏ナラシムル爲メテアルトモ謂ヒ今日其ノ說ハ必スシモ一致シテ居ナイノテアルカ何レニシテモ隆線ノ組織ハ吾人ノ身體ニ何等カノ效用ヲナシテ居ルモノニ相違ナイノテアル。

隆線ノ組織カ手掌又ハ足裏ノミニ現ハレテ他ノ身體ノ部分ニ現ハレナイトコロカラ見テモ又吾人ノ日常生活上ノ經驗カラ見テモ次ノ如キコトカ推察サレルノテアル例ヘハ顏面等ニ汗又ハ涙カ出タ場合ニ手掌ヲ以テ拭ヘハ汗又ハ涙ノ幾分ハ皆手掌ノ線ノ窪ミニ吸收サレ眼中等ヘ浸入スルノヲ防クコトカ出來ル又物ヲ把持スル時ニ於テモ線ノ隆起ト窪ミハ吸付キ作用ヲ生シ物ノ滑リヲ止メ

圖面斷ノ線

ルモノテアル又足ニ於テモ同樣ニ足裏ノ皮膚ノ蹠ミハ物ニ對シ吸收力ヲ生シ人カ跣足テ步行スル場合ナトニ若シ其ノ下部ニ多少ノ水分カ在ツテモ之ヲ吸收シテ滑リヲ止メルモノテアル又重キ物ヲ荷ヒタル時ナトハ特ニ足端ニ力ヲ要スルノテ此場合ナトニ於テモ線ノ吸付ニヨリ滑リヲ止メ步行ヲ急速ニセサルモノテアルトハ生理學者ノ說テアル。

斯ノ如ク手掌又ハ足裏ノ皮膚ノ蹠ミハ生理上種々ノ作用ヲナシテ人體ニ效用ヲナスモノテアルコトハ略ホ推測スルコトカ出來ルノテアル。

第二　線ノ性質上ニ於ケル不變不同ノ原則

人體ノ外皮、毛髮ノ色素、齒ノ數ト位置、容貌、風姿、眼球ノ色彩、文身又ハ筆跡等ハ各個人ノ諸特徵ヲ顯著ニ表ハスモノテアル而シテ此外尙人ノ身體中ニハ無數ノ特徵アルコトカ爾來一般ノ人々ニ認メラレテ居ツタノテアルカ近來マテ唯一ツ手及足ノ隆線カ無視サレテ居ツタノテアル。

而シテ又人體各局部ノ諸特徵ハ其時期ニ從ヒ成長年月ト共ニ夥多ノ影響ヲ蒙リテ變化スルコトハ免レナイ事實テアルト云フコトモ多クノ人々ノ識ル所テアル然シ手及ヒ足ノ隆線ノ特徵ノミハ人ノ出生ヨリ死ニ至ルマテ永久不變テアルト云フ此ノ事實ハ爾來多クノ人ニ信シラレナカツタノテアル然シ後ニ醫學家及ヒ指紋學家ノ證明ニヨリ遂ニ一般ノ人々ニモ認メラレルヨウニナツタノテアル。

實ニ指紋ニ依ル個人識別法ハ此ノ線ノ終生不變萬人不同テアルト云フ二個ノ原則ニ基キ建設セラレタルモノテアツテ此ノ指紋ノ原則ハ夙ニ「ガルトン」氏ノ證明ニ依ルコトハ前章ニ於テ既ニ大體述ヘタトコロテアルカ尙ホ玆ニ之ヲ詳說セント欲スルノテアル。

(一) 人ノ指紋ハ終生不變ナリ　指頭隆線ハ人ノ生レテヨリ死ニ至ルマテ變化スルコトナキハ「ガルトン」氏ノ研究カ既ニ之ヲ證明スルトコロテアツテ卽チ氏ノ實驗ニ依レハ指紋ハ生活狀態ノ變遷如何ニ拘ハラス常ニ不動不變ナルモノテアツテ多年ノ歲月ノ間隔ヲ設ケテ作成セル指紋印象ノ比較研究ニ據リ之ヲ證明スルコトカ出來ルノテアル「ガルトン」氏ハ人ノ一生ヲ四期ニ分チ第一期ヲ小兒、第二期ヲ靑年、第三期ヲ壯年、第四期ヲ老年トシ此ノ各期ニ於ケル指紋ノ變化ヲ試驗シタル結果七百人中六百九十九人ハ指頭隆線ニ細末ノ變化ヲ生セスシテ各期ヲ通シテ一定不變ナルコトヲ發見シ得タリト云フコトテアル。

「ガルトン」氏ハ猶ホ指紋カ人ノ胎內ニ在ル時期ヨリ屍體ノ腐敗スル時ニ至ルマテ變化スルコトナク存續スルコトヲ證明シタノテアル卽チ「ガルトン」氏ノ研究ニ依レハ人ハ胎生第六個月ヨリ指紋存在シ分娩ノ時期ヨリ屍體トナリ腐敗シテ外皮剝脫崩壞スルマテ常ニ變更スルコトナキコトヲ實驗シタノテアル。

「ガルトン」氏ハ又隆線ハ人カ死ニ至ツテ皮膚カ腐敗スルニアラサレハ決シテ消滅スルモノテナイト云フコトノ實例トシテ埃及ノ木乃伊ノ指ニハ明カニ指紋ヲ見ルコトカ出來ル又剝製ノ猿ノ足ニ於テモ尙ホ明瞭ニ隆線ノ紋樣ヲ認メ得ルコトヲ擧ケテ居ルノテアル而シテ木乃伊ノ隆線ニ就テハ尙ホ「フオルジオー」氏モ「ラカサーニ」敎授ノ法醫學參考室ニ藏置スル木乃伊ノ指頭ヲ試驗シ完全ニ鮮明ナル乳頭線ノ存在ヲ認メタト云フコトテアル尙ホ「ブセツチ」氏モラプラータ市、人類學博物館ニ藏置スル亞米利加印度人ノ木乃伊竝ニブエーノス・アイレス市博物館ニ藏置スル木乃伊(ソレハカリンガスタ谷地ニ於テ發見サレタモノ)ニモ同樣ノ事實ヲ認メ得タト云フコトテアル。之ニヨリ察スルモ人ノ指紋ハ人體腐敗スルニ至ラサレハ消滅セサルモノテアルト云フコトハ明カテアル。

猶「ハアシエル」氏ハ指紋ノ不變ナルコトヲ自己ノ指紋ニ就キ二十八箇年間試驗シタノテアル其ノ結果ニ依ルト氏カ一八六〇年及一八八八年ノ兩度ニ於テ採取セル示指ノ指紋カ二十八箇年間ノ間隔ヲ設ケテ押捺セシニ拘ハラス其特徵ハ凡テ完全ニ符合シテ居ル事實ヲ證明シテ居ルノテアル氏ノ此實驗ハ指紋ヲ擴大ナル寫眞ニ撮リ試驗シタノテアルト云フコトテアル。

(二) 人ノ指紋ハ萬人相同シカラス　人ノ指紋カ互ニ相同シカラサルハ各人ノ面貌カ互ニ相同シカラサルト同樣テアツテ此ノ事實ハ世界各國ニ於テ實驗シ證明サレテ居ルノテアル。故ニ世界中同一人ニアラサル限リハ決シテ同一ノ指紋存在スルコトナシト云フコトカ確言シ得

ルノテアル。

此ノ種ノ研究トシテ「ガルトン」氏ハ先ツ「ハアシエル」氏カ印度ヨリ贈リタル諸種ノ材料ニ就キ固有ノ特徴ヲ有スル指紋ヲ寫眞ニ擴大シ以テ無限ノ特徴ヲ有スル其ノ指紋ノ種類ヲ比較研究シタノテアル。

氏ハ此ノ外尙ホ六百四十億個（之チ人員ニ換算スレハ六十四億人トナル）ノ指紋ヲ蒐集シテ實驗セルニ其ノ無數ノ指紋ノ中ニ於テ同一ナルモノハ絕對ニ無カツタト云フコトテアル。

尙ホ本邦ニ於テモ現在保管ノ原紙總數ハ四十三萬餘アルノテ之ヲ人員トシテ見テモ同數ノ四十三萬人テアル之ヲ指紋ノ箇數ニ換算スレハ四百三十萬個トナルカ其ノ中同一ノモノハ決シテアルコトナキヲ證明シ得ルノテアル。

第三　線ノ特性及名稱

擴大鏡ヲ以テ指紋印象ヲ檢スルトキハ其ノ微細ニシテ且ツ變化極マリナキ線ノ組織ヲ觀察スルコトカ出來ル。

今試ミニ「ガルトン」氏ノ實驗ニ基キテ線ヲ仔細ニ檢査スレハ諸種ノ線ハ左ノ如キ組織ヲナスコトカ觀察サレルテアラウ。

隆線ト隆線トノ間ニ新ラタナル線カ突然起ルモノ或ハ隆線分レテ二線ト成ルモノ或ハ短キ線ヲ成スモノ或ハ線カ單ニ點ニ過キサルモノ或ハ一線カ他ノ線ニ接觸セルモノ或ハ一線カ分レテ再ヒ接合スルコトニ因リ其ノ間ニ島形ヲ形作ルモノアリ以上ノ如ク線ニハ種々ナル諸特性カ發見サレルノテアル之ヲ線ノ特性（又ハ性質）ト謂フノテアル。

斯ノ如ク指紋ヲ構成スル隆線ハ種々ノ諸特性ヲ有スルモノテアツテ指紋學上此ノ種ノ線ニ突然ニ起ル線（又ハ新線）、分岐線、短線、點（又ハ點狀線）、接觸線、島（又ハ島形）ナル名稱ヲ附シタノテアル。

指紋ハ前述ノ如ク永久不變ナルモノテアルカ唯一例外トシテ負傷、疾病等ニヨリ其ノ形狀ニ變更ヲ來スコトカアル同時ニ又其ノ痕跡ハ指紋ニ於ケル一個ノ特徴トシテ比較對照ニ便スルノテアル卽チ隆線ノ特徴トシテ瘢痕（極度ニ損壞サレサルモノ）ハ又確實ナル個人ノ識別ヲ得セシムヘキ要素テアル。

指紋ノ研究上是等輕微ナル瘢痕ノ存在ハ參考上最モ良好ナル着目點ヲ成スモノテアツテ正確ナル立證ヲナスニ有用ナルモノテアル凡テ負傷ノ際眞皮ヲ切開スルトキハ除去スルコトヲ得サル瘢痕ヲ殘留スルモノテアツテ瘢痕一度指紋上ニ存留スルトキハ乳頭線ノ分離ニ據リ直チニ之ヲ示現シ其ノ纖維組織ノ一部面ニ於テ常ニ明瞭ニ認ムルヲ得ヘキ瘢痕トシテ存在スルモノテアル。

若シ潰瘍（腫物）カ深ク眞皮ニ喰入ルトキハ隆線ハ之カ爲メニ破壞セラレ其ノ傷痕ハ永久ニ存在スルモノテアツテ傷痕深大ナレハ深大ナル程其ノ傷痕ハ明瞭ニ且ツ永久ニ消滅スルコトカナイノテアル切傷ハ又永久ニ細ク且ツ長キ形狀ノ痕跡トナツテ隆線上ニ横ハルノテアル而シテ負傷ノ程

度深大ナラサルトキハ輕微ナル痕跡ヲ存留シ最輕微ナルモノハ一定ノ期間ヲ經過スレハ全ク回復シテ遂ニ隆線上ニ其ノ痕跡ヲ留メサルニ至ルモノテアル但シ表皮ノ負傷ハ一時痕跡ヲ留ムルコトアリト雖モ直ニ全治スルモノテアル然ルニ眞皮ニ達スル負傷ハ永久ニ痕跡ヲ留メテ容易ニ全治セサルモノテアル。

此ノ傷痕アル指紋印象カ紙上ニ押捺サレル時ハ多少皺ニ類似シタ白イ餘白トナツテ存スルノテアル然シ皺ハ永久的存續ノ性質ヲ有スルモノテナイ或ル期間ヲ經テ對ニ押捺シタ印象ヲ試驗スルト互ニ相異ル點ヲ發見スルモノテアル之レ皺カ變化スルモノテアツテ絶對ノ特徴トシテ信頼カ出來ナイ所以テアル此ノ印象ト微傷ノ痕跡トハ一見シテ甚タ誤リ易ク指紋ニ不熟練ノ人カ區別ヲナスニ當リ常ニ困難トスルトコロテアルケレトモ此等ノ印象ニ就キ屢々反覆シテ比較研究スルトキハ容易ニ識別シ得ル樣ニナルノテアル。

斯ノ如ク指紋ヲ檢査スルニ當リ何人モ能ク輕微ナル傷痕ヲ認メ得ルモノニシテ大ナル瘢痕ト同樣ニ皺及傷痕ノ所在ト其ノ個數ノ多少ハ以テ個人ノ識別上重要ノ價値ヲ有スルモノテアル。

「ガルトン」氏ハ年齡十四歳三ケ月ノ男兒ニ於ケル指紋ヲ寫眞ニ擴大シテ保存シ其後該兒カ年齡十六才三ケ月ニ到達セルトキ前ト同樣ニ其ノ指紋ヲ撮取シ之ヲ寫眞ニ擴大シテ實驗シタノテアル然ルニ二個年ヲ經過セル後ニ於テ兒童ノ發育上身長ニ於テハ多大ノ差異ヲ呈スル所アルニ拘ハラス指紋擴張ノ程度ニ於テハ何等變更スル所カナカツタコトヲ證明シテ居ルノテアル。

氏ハ此ノ比較試驗ノ便宜上指紋線ノ上邊及右側邊ニ數字ヲ附シ而シテ以上二個ノ指紋ヲ比較對照シテ實驗シタノテアル其ノ結果瘢痕ニ於テハ何等ノ差異ヲ示ス所カナカツタコトヲ認メタ卽チ瘢痕ハ其ノ起點零ヨリ終點ニ至ルマテ指紋線二十八個ニ亘ル長キモノテアル而シテ又其ノ他ノ個所ニ於テ二個ノ指紋ノ特徴及變位ノ容大ハ全然同一テアツタ此ノ斷線ハ實ニ試驗ノ價値ヲ有スルモノテアツテ特徴ノ全然固定不變ナルコトヲ示スニ足ルモノテアル卽チ隆線ヲ切斷セルタメ生シタル瘢痕モ亦同樣ニ固定不變ノ形狀ヲ存續スルコトヲ示スモノテアル。

此ヲ以テカ身體及ヒ其局部ノ一般面積ハ時期ニ從ヒ夥多ノ影響ニ因リ變更シ外皮及ヒ毛髮ノ色素容姿、風采、相貌、眼目ノ表情及ヒ着色等モ亦年齡ト共ニ變化スルモノテアルカ指紋ノ中心形狀線ノ特徴及ヒ瘢痕ノ特徴ニ於テハ終始シテ一定不變ナルモノテアル之ヲ以テ此ノ理由ニ據リ指紋法ハ今日現在スル實體的個人識別法中最モ優ル所アル要素ヲ供ヘテ居ルモノト云フノテアル。

第四　線ノ種類

線ニハ種々ノ種類カアル普通隆線ニハ彎曲セルモノカアル點狀線ニハ圓形ノモノト稍角ヲナスモノカアル短線ニハ弧ヲ畫クモノ或ハ直線ヲナスモノカアル而シテ線種ノ重モナルモノハ弓狀線、蹄狀線、渦狀線、弓形線、中拉蹄線、環狀線、聯曲線其他尙ホ多クノ種類カアルノテアルケレト

モ茲ニハ此等ノ線ニハ種々ノ種類カアルト云フニ止メ詳細ハ本書附錄又ハ拙著指紋法解說ニ於テ攻究ヲ願ヒタイノテアル。

圖解　線ノ平面圖ニ於テ線面ニ無數ノ白斑ヲ認ムルハ之レ汗ヲ排泄スル汗線ノ口孔テアル即チ斷面圖ニ示セル汗線ノ口孔ニ當ルノテアル黑キ線ハ隆線ノ印象テアル餘白トシテ表ハレタル白キ線ノ印象ハ陰線溝テアル。

備考　半面印象ト回轉印象ノ特長

半面印象ハ回轉印象ト異ナリ指頭平面ノ指紋ヲ自然ノママニ印寫セルモノテアルカラ回轉印象ノ如ク指紋ヲ損傷スル虞カナイ之ヲ以テ指紋法ニ利用スレハ簡便テ且ツ正確ナ印象テアルカラ「プセッチ」氏ノ如キハ氏ノ指紋方式ニ於テ此ノ自然印象ノミヲ採用シテ居ルノテアル自然印象ヲ利用スル結果ハ自然ノ形態ヲ存スル便利カアルケレトモ回轉印象ノ如ク指紋全部ノ特徴ヲ表ハスコトカ出來ナイノテアル。

然ルニ回轉印象ニヨル指紋印象ハ其ノ指紋ノ中心形狀及ヒ外角部ヲ共ニ鮮明ニ觀察スルコトカ出來ル而シテ回轉印象ト平面印象トノ得失ハ前述セル如ク回轉印象ハ指紋全部ノ印象カ表ハレルノテ自然印象テハ知ルコト能ハサル指紋ノ特徴ヲ最モ能ク識別スル利益カアルノテアル然ルニ平面印象ハ自然ノママヲ印寫スルノテ指紋ヲ回轉スルコトニヨリ生スル線ノ動態等ノ變化ノ虞レカ割合ニ少ナイ又平面印象ハ手ノ四指ノママヲ印寫スルノテ押捺ノ順序ハ正確テアル故ニ回轉印寫ハ誤リ易キ押捺順序ノ過失ヲ發見訂正スル利益カアルノテアル「ヘンリー」式又ハ「ロッシエル」式指紋法テハ此ノ兩者ノ印象ヲ採用シタノテアル本邦ノ指紋法式モ「ロッシエル」式ニ從ヒ此ノ兩者ヲ併用シテ居ルノテアル。

第二款　對照法

指紋ヲ對照スルニハ常ニ原則トシテ各指紋中ニ存在スル特徴ヲ精査セサルヘカラス指紋ノ特徴トハ指紋中ニ現出スル容易ニ實驗スルコトヲ得ヘキ一定ノ特種ナル形狀ヲ稱スルノテアル。

指紋ノ形狀及ヒ特徴ノ最モ重要ナルモノ三種ヲ擧クレハ則チ指紋ノ中心形狀ノ特徴、線ノ組織上ノ特徴、指紋缺損ノ痕跡及ヒ皺ノ特徴テアル。

對照ニハ殊ニ其形狀ノ最モ獨特ナルモノ又ハ最モ奇異ナルモノニ注意スルコトヲ要スヘキテアル茲ニ指紋ヲ對照スルニ當リ若シ其ノ指紋カ蹄狀紋ナルトキハ中心(内端)及外角(外端)ニ當ル要部、渦狀紋ナルトキハ其ノ中心ト左右兩側ノ標準角ニ當ル要部ヲ比較シ尙ホ疑アルトキハ線ノ組織ノ特徴ヲ比較シ又瘢痕アルトキハ瘢痕ヲ互ニ比較スルノテアル。

斯ノ如クニシテ左右兩手ノ全部ノ指紋ニ及ホシ双方ノ指紋ノ諸特徴カ悉ク符合スレハ是レ同一人ノ指紋ナルコト確實テアル尙ホ指紋ハ斷片的ノモノテアツテモ左ノ要件ヲ具備スルニ於テハ之ヲ同一ノモノト鑑定シ得ルノテアル。

即チ相互ノ指紋ニ於テ五個乃至十個ノ同一特徴點ヲ擧ケ得ルコト、而シテ又一定ノ標準點ノ間ニ介在スル線數ヲ計算シ互ニ其ノ計算總數ノ同一ナルトキ、以上ノ諸要件ヲ以テ指紋對照ニ於ケル符合ノ確證トスルコトカ出來ルノテアル。

凡ソ實地ニ於テ指紋對照ヲ必要トスルノハ左ノ如キ場合テアル。

(一)　保存原紙指紋ト犯罪嫌疑者ノ指紋

保存原紙指紋トハ精確ナル分類ヲナシ且ツ一定ノ原紙排列函ニ納メ永續的ニ保存サレタル原紙

指紋ヲ謂フノテアル嫌疑者ノ指紋トハ犯人檢擧ノ資料トシテ臨時的ニ押捺サレタル犯罪嫌疑者ノ指紋印象テアル。

或ル犯罪ノ嫌疑者又ハ被告人ニシテ前科包藏若クハ虚僞ノ陳述ヲナス疑ヒカアルト認メタモノハ指紋ヲ用紙ニ押捺シ之ヲ分類シテ其ノ得タル分類番號ト同一ノモノアリヤ否ヤ保存原紙中ノ指紋番號ト對照スルノテアル若シ符合スル同一番號ヲ發見スル時ハ前述ト同樣ノ方法ヲ以テ尙相互ノ指紋印象ノ特徵ヲ檢シ何レノ部分モ皆符合スルニヨリ其ノ同一人テアルコトヲ證明シ玆ニ初メテ指紋對照ノ效果ハ發揮サレルノテアル。

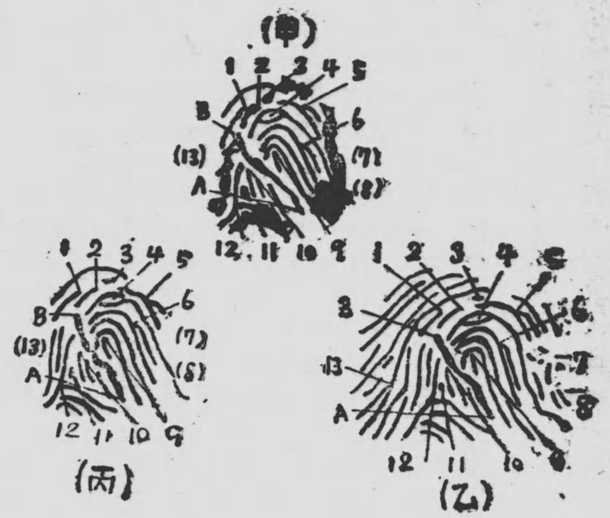
此種ノ例トシテ臺灣ニ於ケル指紋利用ノ實例ヲ擧クレハ大正五年ノ末頃テアル臺北東門、南門附近ノ官舍ニ其ノ家人不在ニ乘シテ現金並ニ貴金屬類ノ盜難カ頻々トシテアツタ臺北廳警務課ニ於テハ犯人ノ逮捕ニ勉メテ居タカ急ニハ判明シナカツタノテアル一方數箇所ニ於テ武田屬ハ其ノ犯罪現場遺留ノ指紋ヲ採取シテ指紋對照ノ照會アルヲ待テ居タノテアル然ルニ大正六年四月九日ノ曹問南大門外專賣局官舍ヲ戸毎ニ覗キ廻ハル怪シキ男ヲ發見シ引立取調ヘタルニ其者ハ王呆鏟トノミ稱シ其他ヲ一切自白セサル爲メ其ノ者ノ指紋ヲ徵シ對照方ヲ紹介サレタノテアル此ニ於テ曩ニ武田屬カ採取シ保存シアリタル現場ノ指紋ト對照セルニ其内符合セルモノアリ之ヲ以テ尙ホ保存函保管ノ原紙ト對照調査セラレタルニ前科二犯臺北廳大加堡炭頂庄四九王鏟仔(二十四歲)ナルコトヲ發見シ其ノ王呆鏟ト稱セルハ僞名テアツタコトカ知レタノテアル現場指紋ト符合セルモノハ卽チ南門街官舍某宅文官屑章函ニ附着ノ脂肪指紋ハ王鏟仔ノ左手拇指テアツタ又南門街官舍某宅硝子戸硝子破片ニ附着ノ脂肪指紋ハ王鏟仔ノ右手示指二、中指一、環指二、小指一ノ六個ノ指紋テアツタト云フ又府後街官舍某宅策筒抽出ニ附着ノ脂肪指紋ハ王鏟仔ノ右手拇指、左手拇指ノ二個ノ指紋テアツタト云フ又南門街官舍某宅硝子板に附着ノ脂肪指紋ハ王鏟仔ノ左手示指、中指、環指、小指ノ四個テアツタト云フ又南門街官舍某宅ノ電球ニ附着ノ脂肪指紋ハ王鏟仔ノ右手示指ノ指紋テ又本箱ニ附着ノ脂肪手指ハ王鏟仔ノ右手小指、左手示指、中指、環指ノ四個ノ指紋テアツタト云フコトテアル。

(二) 現場指紋

凡ソ現場指紋ハ犯罪者カ偶然或物體ニ觸レ犯罪行爲ノ現場ニ殘存セルモノテアルカラ其ノ不完全不判明ナルノハ言フマテモナク印象常ニ斷片的ノモノテアルカラ之ヲ數萬ノ保存原紙中ニ索求スルコトハ非常ノ手數ヲ要スルコトテアルカ之ヲ當該嫌疑者ノ指紋ト對照檢査スルコトハ容易テアツテ現場指紋ノ印象ハ假令斷片的ノモノテモ有效ニ利用サレル價値カアルノテアル故ニ之ヲ大切ニ保存スル必要カアル而シテ現場指紋ト嫌疑者ノ指紋トヲ對照スルニハ前述ト同樣ニ先ツ嫌疑者ノ指紋ヲ用紙ニ押捺シテ之ヲ分類シ又現場指紋ヲ分類シ得ル場合ハ之ヲ分類シ互ニ對照スルノテアルカ現場指紋若シ分類シ能ハサルトキハ相互ノ指紋ニ就キ線ノ組織ノ特徵ヲ檢査シ比較對照スルノテアル總テノ箇所カ符合スレハ此レ同一人ノ指紋テアルコトカ認識サレルノテアル尙ホ指紋對照ニ就テハ其指紋印象カ肉眼ニテハ到底識別シ能ハサル場合又ハ對照ニ際シ移動シ能ハサル場所ニ印寫サレタル場合又ハ潛在シテ普通ノ方法ニテハ其ノ印象ヲ認メルコトカ出來ナイ場合カアルカカル場合ハ複寫ノ方法ヲ以テ印象ヲ鮮明ニシ又容易ニ對照ヲ得セシメルコトカ出來ルノテアル。

(三) 對照法實例

法圖對照指紋



「ヘンリー」氏曰ク一個ノ指紋ヲ得テ廣汎極ハマリナキ此ノ社會上ニ此レト同樣ノモノヲ探求シ直チニ其ノ線ノミノ符合（線ノ特徴ノ比較及線ノ計算）ニヨリ人ノ異同ヲ識別シ得ルコトカ出來ル之レ恰モスペクトルノ比較ニヨリ天體ノ物體ヲ知ルト同樣テアルト謂フテ居ル適切ノ理論テアルト思フノテアル。

氏ハ又指紋對照ニ於テハ指紋ノ特徴ヲ比較スル外尚ホ線ノ計算ヲ以テ必要條件トシテ居ルノテアル而シテ之ヲスペクトルニ譬ヘテ居ルノテアル。（註一八）

實例圖

（甲）ハ偶然物體上ニ印寫サレタル現場指紋ヲ示ス（乙）ハ正確ニ押捺サレタル回轉印象ヲ示ス（丙）ハ正確ニ押捺サレタル平面印象ヲ示ス左ニ掲ケタルモノハ其ノ符合點テアル。

（一）指紋ノ符合　蹄狀紋（甲乙丙）

線ノ特性（性質）ノ符合　1、2、3、4、5、6、9、10、11、12、A—B（甲乙丙）乙圖ニ於テ1、2ハ短線3、11ハ點狀線、4ハ島5、6、12、13ハ分岐線ノ分岐點、BヨリAニ至ル線ハ傷痕、7ハ點狀線ノ群、8ハ短線ノ群、12ハ外端、9ハ內端、（甲）（丙）ニ於ケル（7）（8）（13）ハ回轉印象ノミニ表ハレ自然印象ニハ缺除ス。

（二）線數ノ符合　外端ヨリ內端ニ至ル間ニ直線ヲ畫キ之ニ觸レル線但シ傷痕ヲ除ク線數約三線（甲乙丙）

（註一八）スペクトル ト謂フノハ太陽光線ヲ分光器ニテ檢スルトキハ太陽光線ハ分解サレテ七色ノ色帶（虹ト同樣）ヲ呈スルノテアル而シテ其ノ色帶ノ中ニ縱ニ一定ノ間隔ヲ置キ無數ノ黑キ暗線カ表ハレルノテアル此ヲ稱シテ日光スペクトルト謂フノテアル即チ七色ヲ呈スルモノヲ連續スペクトルト謂ヒ暗線ヲ吸收スペクトルト謂フノテアル又地球上ノ物質（鐵又ハ「ラジウム」）ヲ熱シテ分光器ニ映シ之ヲ檢スルト前述同樣ノスペクトル『高溫度ニ熱セラレタル氣體或ハ金屬ノ蒸氣ノ發光ヲ檢スルニ多クノ部分ハ暗黑ニシテ所々ニ輝線ヲ認ムコレヲ輝線スペクトルト謂フノテアル之ヲ以テ太陽ノスペクトルノ暗線ノ位置ト據テ知レタル氣體ノ輝線スペクトルトヲ比較對照シテ太陽ノ周圍ニ如何ナル元素ノ存セルカヲ判定スルコトヲ得從ツテ太陽ノ物質ヲモ推知シ得ルノテアル「フラウンホウヘル」氏ハ此ノ日光ノ黑線ヲ發見シ著シキモノ八本ニAヨリHマテノ名ヲ與ヘタ又「キルチコフ」氏ハスペクトル分析術ノ定律ヲ觀測スルコトヲ發明シタノテアル』カ表ハレルノテアツテ其ノ暗線ノ表ハレル位置ニヨリ之ヲ比較シテ其ノ物質ノ同一テアルコトヲ確メ得ルノテアル此ノ理ニ依リ天體ノスペクトルト地球上ノスペクトルトヲ互ニ比較スル時ハ太陽又ハ星ヲ構成スル物質ヲ容易ニ知ルコトカ出來ルノテアル。

以上ハ「ヘンリー」氏カ指紋對照ヲ說明センカ爲メ引用シタルスペクトル暗線ノ比較ノ例テアツテ恰モ此ノ物理學上ノ實驗ノ如ク指紋ニ於テモ單ニ微細ナル指紋印象ノ黑線ノ比較ニヨリテ假令此處ニ幾千萬人ノ人々カアルトモ單ニ一箇ノ指紋ヲ有スルナラハ其ノ線ノ比較ニ依リ多數ノ群集中ヨリ容易ニ其人ノ異同ヲ識別シ得ルト云フノテアル。

備考　指紋鑑定

一　鑑定方法

(一)　指紋ノ指定　現場指紋及ヒ證書上ノ指紋ハ右手ノ指紋ナルヤ又左手ノ指紋ナルヤ判明セサル場合多ク又右手ノ指紋左手ノ指紋ト判明セル場合ニ於テモ其ノ何指ノ指紋ナルヤヲ明カニセス故ニ指紋ヲ鑑定スルニ當リテハ先ツ其ノ何手何指ノ指紋ナルヤヲ指定セネハナラヌノテアル。

(二)　形狀ノ指定　前述ノ如クニシテ何手何指ノ指紋ナルヤヲ認識シ得タル時ハ次ニ其ノ形狀(蹄狀紋ナルヤ渦狀紋ナルヤ)ヲ指定シ兩者ノ指紋ヲ比較對照シ以テ同一ナリヤ否ヤノ判定ヲ下スノテアル。

(三)　類似又ハ相違ノ點ノ指定　印象不鮮明ニシテ形狀ヲ明カニ指定シ得サル時ハ双方ノ指紋ニ就キ類似ノ點アラハ類似ノ點相違ノ點アラハ相違ノ點ヲ明瞭ニ比較指定スルノテアル。

(四)　特徵ノ指定　指紋ノ特徵(隆線ノ變形又ハ傷痕等)ハ對照上最モ比較ノ標的トナルヲ以テ特ニ特徵ト認ムヘキ箇所ヲ有スル時ハ其ノ特徵ヲ指定スルノテアル。

(五)　印象不明ノ指紋及ヒ其推定　印象不明ノ指紋ニシテ其ノ形狀及ヒ類似ノ點ヲモ識別シ能ハサル時ハ其ノ指紋ヲ不明ノモノト斷定スルノテアル若シ幾分カ鮮明ノ點アラハ其ノ鮮明ノ點(隆線ノ趨勢等)ニ就キ推定ヲ下スノテアル。

二　鑑定資料作成ノ準備及注意事項

鑑定資料ハ精密ノ注意ヲ拂ヒ準備スヘキハ云フマテモナイカ如何ニ熟練ナル鑑定人ト雖モ若シ其ノ資料トナル指紋ノ作成ニシテ完全ナルモノヲ得サランカ遂ニ其ノ效果ヲ期スルコト能ハス故ニ鑑定資料作成者ハ以下ノ事項ニ注意シ資料ヲ作成スヘキモノテアル。

指紋ノ重要部(弓狀紋ナレハ其ノ中央部、蹄狀紋ナレハ外端及ヒ內端ニ當ル箇所、渦狀紋ナレハ中心及ヒ左右兩側ノ標準角並ニ追跡線等)ニ缺除ナキ樣注意シテ押捺スヘキテアル。

三　鑑定實例

(一)　本例ハ某殺人被告事件ニ關シ大正〇年〇月〇日東京地方裁判所ヨリ左記事項ニ對シ鑑定ヲ命セラレタル實例テアル。

鑑定事項

一　某裁判所大正〇年〇月〇日領第何號ノ何號證筆筒開戸ノ裏面下部ニ印セル指紋ハ被告何某ノ指紋ト符合スルモノアリヤ。

二　若シ符合スルモノナリトセハ該開戸ノ指紋ハ如何ナル分類ニ屬スルモノナリヤ。

鑑　定

一　第何號證筆筒開戸裏面ノ血痕指紋ハ印象不鮮明ニ付キ被告何某ノ指紋ト對照檢査スルコトハ不可能ナリ依テ同一ノモノナリヤ否ヤ斷定ヲ下シ難シ。

二　然リト雖モ擴大寫眞ニ依リ仔細ニ檢査スレハ該筆筒開戸ニ印セル二個ノ血痕指紋ハ指紋學上渦狀紋ノ分類ニ屬スルモノト推定ス。證明內容ヲ略ス

(二)　本例ハ何某文書偽造詐欺被告事件ニ關シ大正〇年〇月〇日東京控訴院檢事局ヨリ左記事項ニ對シ鑑定ヲ命セラレタル實例テアル。

鑑定事項

大正〇年〇月〇日東京控訴院檢事局ニ於テ押捺セル被告何某ノ右手掛印指紋ト大正〇年〇月〇日何某(被告)カ諸願用紙ニ押捺セル掛印指紋トハ同一ノモノナルヤ否ヤ鑑定スル事。

鑑　定

何某(被告)カ諸願用紙上ニ押捺セル掛印指紋ト被告何某カ東京控訴院檢事局ニ於テ押捺セル掛印指紋ハ全ク別異ノモノト鑑定ス。證明內容ヲ略ス

(三) 本例ハ控訴人何某被控訴人何某間ノ土地所有權取得登記抹消手續請求控訴事件ニ關シ大正〇年〇月〇日東京控訴院民事第一部ヨリ左記事項ニ對シ鑑定ヲ命セラレタル實例テアル。

鑑定事項

乙第何號證中被控訴人何某名下ノ拇印ト大正〇年〇月〇日及同年〇月〇日付口頭辯論調書添付ノ拇印トノ異同ヲ鑑定スル事。

鑑　定

乙第何號證中被控訴人名下ノ拇印ハ汚損シ其ノ印象鮮明ヲ缺クヲ以テ口頭辯論調書添付ノ被控訴人ノ爲シタル拇印トノ對照檢察ハ不可能ナリ依リテ右二個ノ拇印指紋ハ同一ナルヤ否ヤ不明ノモノト鑑定ス。證明內容ヲ略ス

(四) 本例ハ原告何某被告何某間ニ係ル貸金請求共助事件ニ關スル大正〇年〇月〇日東京區裁判所民事部ヨリ左記事項ニ對シ鑑定ヲ命セラレタル實例テアル。

鑑定事項

別紙原告本人ノ拇印ト乙第何號證原告何某名下ノ拇印ト同一ナルヤ否ヤヲ鑑定スル事。

鑑　定

別紙原告本人ノ拇印ト乙第何號證ノ何某名下ノ拇印ヲ擴大寫眞ニ撮影シ精細ニ檢査セル結果其ノ印象尙ホ不鮮明ナル爲メ兩指紋ハ同一ナルヤ否ヤ不明ノモノト鑑定ス。

以上指紋鑑定ノ實驗ニ供スル指紋印象ハ二倍乃至五倍ノ擴大寫眞ニ引キ延シ双方ノ指紋ヲ對照檢査スルモノテアルカ多クノ場合其ノ目的物タル拇印指紋ハ爾來其ノ使用者ニ所謂今日ノ指紋ナルモノノ觀念ナク舊時ノ習慣タル爪印及ヒ拇印ノ方法ニテ押捺セルタメ證據物トシテ肝要ナル指紋ノ線ノ組織ヲ汚損セルニ因リ確實ナル證據力ヲ失ヘルモノカ多イノテアル。若シ此拇印指紋カ完全ニ押捺シアレハ今日有力ナル裁判上ノ證據物トナリ得ルカラ吾人ノ以テ貴重トスル證書等ニ實印トヲ押捺スルコトアレハ後日爭ヒノ生シタル場合ハ最モ有力ナル證據トナリ且ツ無用ノ爭議ヲ防止シ得ルモノテアル。

第三款　複寫法

一　指紋寫眞

前說ノ如ク現場指紋ハ犯罪者カ犯罪決行中若クハ其ノ前後ニ於テ或ル物體ニ觸レテ其ノ場ニ殘シタ指紋ヲ謂フノテアツテ現場指紋ハ今日犯罪ノ搜査竝ニ檢擧等ニ廣ク利用セラレ多大ノ效果ヲ收メツツアルハ既ニ識者ノ知ル所テアル然ルニ現場指紋ハ偶然或ル物體ニ觸レテ印寫シタル指紋テアルカラ其ノ不鮮明不完全ナルハ謂フヲ待タス從ツテ其ノ鑑識ハ甚タ困難ナモノテアル而シテ現場指紋ハ犯人カ偶然現場ニ遺留シタモノテアルカラ其ノ種類ハ種々アリテ卽チ左ノ如クテアル。

或ハ血痕ニヨリ或ハ脂肪（硝子又ハ金屬製ノ石鹼箱ノ上ニ指頭ヲ觸レ側面ヨリ透カシテ見ルト透明ナ指紋印象カ寫ルノ之レ卽チ人體ヨリ排泄スル汗又ハ脂肪ニヨリ印象サレタ指紋テアル又人ハ精神及身體ヲ激スルトキ多量ノ汗ト脂肪ヲ分泌スルヲ常トスル而シテ犯罪者ハ高度ノ憤激ト異常ノ運動ヲ以テ犯罪ヲ決行スルヲ常トスルノテ特ニ汗及脂肪ノ分泌ヲ多クスルノテアル）ニヨリ或ハ塗料ニヨリ或ハ粉末（石灰、麥粉、雪上等）上ニ印寫セラレタルモノ等カアル。

以上ノ如キ指紋印象カ鮮明ニ認メラレ得ル場合ハ直ニ之ヲ利用スルコトカ出來ルノテアル然シ現場指紋ハ多クノ場合潛在性テアツテ種々ノ障害ノ爲メ不鮮明テ且ツ斷片的ノモノテアルカラ之等不鮮明ナ印象ハ他ノ方法ニ依リ再現セラレネハナラヌノテアル卽チ粉末又ハ液體ノ藥品ヲ使用スルコトニヨリ或ハ單ニ複寫ノ方法ニヨリ之ヲ明瞭ニ識別スルコトカ出來ルノテアル。

指紋ヲ複寫スル場合ハ印象微細ニシテ到底肉眼又ハ普通ノ擴大鏡ヲ以テ明瞭ニ觀察シ得サル場合又ハ指紋カ移動スル能ハサル物體上ニ印象セラレタル場合テ此等ノ指紋ヲ複寫スルニハ寫眞ニヨルノテアツテ寫眞ハ微細ナル印象ヲ擴大シ以テ鮮明ニ觀察シ得ル利益カアルノテアル近時之カ利用一般ニ行ハレ殊ニ個人識別學及刑事鑑識ニ利用サレテ效果カアルノテアル例ヘハ僞印ヲ檢スル等ノ場合ニモ使用サレルノテアツテ其ノ方法ハ眞印ノ印影ト僞印ノ印影トヲ同一ニ擴大シテ檢スルト微細ナル相違ノ點モ明瞭ニ指摘シ容易ニ其ノ眞贋ヲ鑑別シ得ルモノテアル指紋法ニ於テモ亦寫眞ノ複寫ヲ利用シ微細ナル指紋ノ特徴及ヒ相違點ヲ檢査スルノ用ニ供シテ利益カアルノテアル。

指紋ヲ寫眞ニ複寫スル方法ハ指紋カ若シ鮮明ニ物體上ニ印シテアル場合ハ直ニ之ヲ複寫シテヨイカ若シ指紋カ物體上ニ潛在シテ居ル場合ハ粉末ヲ使用スルノテアツテ屋外ノ物體上ニ印セル指紋ハ最初「スポイト」ニテ塵埃ヲ吹キ拂ヒ然ル後少量ノ酒精ヲ「スポイト」ニテ霧吹キ濕氣ノ蒸發スルヲ待ツテ撒粉スルノテアル之ヲ「ゼラチン」紙ニ移寫スルカ又ハ直ニ寫眞ニ撮取シ之ヲ擴大シテモヨイノテアル此ノ方法ニヨルト指紋ヲ一層明瞭ニ鑑識スルコトカ出來ルノテアル而シテ寫眞ノ擴大法ハ二倍以上五倍マテヲ以テ適當トスルノテアル複寫法ノ一例ヲ擧クレハ門扉等ニ印セル指紋ハ檢察ニ不便テアルカラ之ヲ複寫スル必要カアル其ノ方法ハ種々アルカ最モ有效ニシテ簡便ナル方法ハ寫眞又ハ膠着力アルモノヲ以テ移寫スルノテアルカ先ツ移寫スル方法カラ述ヘルト此ノ方法ハ五十%「グリセリン」及五十%「ゴム」液ヨリ成ル混合物ヲ塗抹シ乾燥セシメタル「ゼラチン」紙（無色透明ノ精製膠）ヲ用ヰルノテアル其ノ用法ハ指紋ヲ掩フニ必要ナル大サノ約二倍ノ長サニ採リ之ヲ半折シテ上半ノ一隅ヲ切除シ全「ゼラチン」紙ノ內面ヲ濕潤セル海綿ヲ以テ濕シ粘着力ヲ生セシメ下半ノ濕潤面ヲ撒粉セル指紋上ニ横ヘ輕ク押シ「ゼラチン」紙ニ附着シタ指紋ト共ニ物體上ノ指紋ヲ容易ニ剝キ取ルコトカ出來ル而シテ「ゼラチン」紙ノ他ノ一半ヲ其ノ上ニ合セルト兩面カラ見ルコトカテキル又嫌疑者ノ指紋ヲ同一方法ニヨツテ「ゼラチン」紙ニ寫シ前ニ「ゼラチン」紙ニ移寫シタ現場指紋トヲ合セテ透視スルト同一指紋テアレハ寸分タカハス二個ノ指紋ハ符合スルモノテアル。

現場指紋ハ又犯罪搜査上參考資料トシテ之ヲ運送又ハ保存ノ必要上現物其ノ儘ヲ一定ノ期間保存スル必要カアルノテアルカカル場合之ヲ損害セサラシムル樣鄭重ニ取扱ハネハナラヌノテアル最モ簡便ナル保存方法ハ指紋印象アル物體ヲ上ニ向ケ箱底ニ糸又ハ其ノ他ノモノヲ以テ堅ク括リ動搖等ノ爲メ物體上ノ指紋印象ヲ損セヌ樣ニ固着セシメ然ル後蓋ヲ以テ密閉スルノテアルカ蓋ト指紋印象アル上部ノ中間ハ空間ヲ存シテ置ク斯如クシテ置ケハ運送ノ場合テモ指紋ヲ損害スル虞ハナイノテアル。

二　印象再現法

(一)　粉末藥使用法

茲ニ犯罪事件カアルト假定スレハ警官ハ直チニ現場ヲ調査スルノテアル現場ニ取殘サレタ犯人ノ遺留物卽チ指紋ハ唯一ノ證據トナルノテアル而シテ犯人カ血液又ハ或ル染料ニ觸レテ押捺サレタ指紋卽チ身體ヨリ分泌スル脂肪、汗等ニヨリ押捺サレタル指紋ハ物體上ニ潛在シテ居ルノテアツテ鮮明ニ鑑識スルニハ潛在セル指紋ノ上ニ撒粉ヲ成スノテアル陶器、硝子、銀又ハ其ノ他ノ金屬製ノ物品又ハ其ノ他ノ光澤アル器具ニ觸レテ押捺サレタル指紋ハ皆此ノ撒粉ニヨツテ鮮明ニ鑑識サレルノテアル。

凡ソ粉末ヲ使用スル場合ハ指頭ノ脂肪、汗等ニ因リ押捺サレタル指紋印象カ無色透明ニシテ肉眼ニテハ鑑別シ能ハサル時又ハ有色ナルモ同色相重リテ鮮明ナラサル場合等ニ重ニ使用セラレテ效アルモノテアル例ヘハ硝子板上ニ殘セル印象カ無色透明ナル時ハ斜ノ光線ヲ利用シテ之ヲ側面ヨリ透視スルカ又ハ黑キ物體ノ上ニ載セテ斜ニ視察スルトキハ肉眼ニテモ明カニ其ノ印象ヲ認ムルコトヲ得ルノテアル然ルニ尙ホ之ヲ一層鮮明ニ觀察セント欲スルニハ之ニ藍色若クハ暗色ノ粉末ヲ輕ク撒布シ然ル後其ノ裏面ヲ撲チテ殘餘ノ粉末ヲ落セハ其ノ指紋印象ヲ一層明瞭ニ觀察シ得テ之ヲ寫眞ニ依リ保存スルコトモテキルノテアル而シテ粉末使用ニ際シ注意スヘキハ物體ノ地色ト相異レル粉末ヲ撒布スルコトテアル例ヘハ此處ニ一個ノ茶碗アリテ其ノ地白色ナリ然ルニ其ノ上ニ無色ノ脂肪印象カ押捺サレタル場合ハ藍色又ハ黑色ノ粉末ヲ使用スヘク若シ地カ藍色ナレハ紅色ノ粉末ヲ用ヒ黑色ナルトキハ白色ノ粉末ヲ用キルノテアル若シ又地カ黑色又ハ暗色ナル上ニ血液其ノ他ノ暗色ナル同色ノ染料ヲ以テ印寫シタル場合ハ白色ノ粉末ヲ撒布スヘシ。

斯ノ如クニ粉末ヲ使用スレハ無色透明ナル印象モ直ニ鮮明ナルコトヲ得又同色相重ナル印象モ明瞭ニ檢察スルコトヲ得ルノテアル(但シ白色ノ粉末ヲ使用シテ寫眞ニ撮影シタルトキハ白キ線カ隆線ニシテ黑キ線カ隆線溝卽チ線ノ窪ミナルコトニ注意スヘシ)今此ノ實驗ヲ手輕ニ試驗スルニハ先ツ指頭ヲ硝子又ハ黑キ光澤アル漆器ノ上又ハ石鹼箱ノ上ニ押シ桃色又ハ白色ノ齒磨粉ヲ揚子ニ含マセテ其ノ上ヨリ輕ク平均ニ撒布シ然ル後直チニ其ノ粉末ヲ輕ク口先ニテ吹キ拂フトキハ潛在シ居リタル指紋印象ハ鮮明ニ現ハレテ來ルノテアル又紙片(白キ洋紙)ニ指頭ヲ押シテ黑又ハ青「インキ」ヲ毛筆ニ含マセテ其ノ上ニ注キ懸ケ二三秒時ヲ經テ水ヲ注キテ前ノ「インキ」ヲ洗ヒ去ルトキハ指紋ハ直チニ出現スルモノテアル之ハホンノ素人的試驗テアルカ實際ニ使用スル粉末原料ハ本邦藥ニ於テハ光明圓(紅色)鉛粉(白色)綠青(青色)等テアルカ外國藥テハ「カオリネルテ」(白色)「アルミニユーム」(白色)「グラヒート」(黑色)等テアル其ノ外黑地ノ上ニ指紋ヲ現ハスニハ酸化亞鉛カアル又石松子末ニ混合セル沃度「エオジン」粉ヲ用フルコトモアル其ノ他紙上ノ指紋ヲ現ハスニ使用スル粉末ニハ種々アルカ白金灰ハ最モ有效

ナルモノテアツテ他ノ粉末テハ無效ノ場合テモ能ク效力ヲ表ハスモノテアル又黑鉛粉ヲ紙片ニ塗擦スルト直ニ指紋ノ印象ヲ認メル事カ出來ル又黑鉛ノ代リニ辰砂、若シクハインヂゴト中性ノ粉末トヲ一分ト十分ノ比例ニ混和シテ使用シテモヨイノテアル。

(二) 液體藥使用法　潛在指紋ヲ再現スルニハ粉末ノ外液體藥カ使用サレルノテアル硝酸銀溶液五「プロセント」乃至八「プロセント」ヲ塗布シ日光ニ曝セハ潛在指紋ハ現出スルノテアル若シ指紋カ時日ヲ經過シタルモノテアツタラ硝酸銀三「グラム」酒石酸約五「グラム」蒸溜水三〇「グラム」ノ混和液ノ中ニ浸シ現出後十「プロセント」ノ次亞硫酸曹達溶液ニテ洗滌シ更ニ水ニテ洗ヘハ變色スルコトナク保存スルコトヲ得ルノテアル。

弗化水素ハ硝子板上ニ印寫サレタル潛在指紋ヲ其ノ腐蝕性ニヨリ再現スルコトヲ得ルノテアル卽チ指紋ノ印象ヲ存スル硝子板ニ弗化水素ノ蒸氣ヲ當ツルトキハ硝子ハ腐蝕シテ指紋印象ノ附セル部分ノミカ殘留スルノテアル。

亞硫酸那篤倫溶液（二三滴ノ酒精ヲ加ヘタル）中ニ浸漬スルトキハ指紋ヲ印セル部分ハ直チニ現出スルモノテアル。

(三) 沃度蒸氣使用法　沃度「エオジン」粉ヲ「カフセル」ニ入レ之ヲ熱スルトキハ沃度ノ蒸氣ヲ發シ紙硝子等ノ上ニ指紋ヲ現ハスコトカ出來ルノテアル卽チ指紋ヲ印セル物體ヲ沃度蒸氣ニ當テルトキハ汗液ノ固形成分ハ沃度ト結合シテ明カニ現ハレルモノテアルカ數分ヲ經過スルト再ヒ消滅シテシマウノテ之ヲ永久保存スルニハ薄キ糊液等ニ浸シ直ニ乾燥スレハ空氣トノ絶緣ニヨリ其ノ消滅ヲ防クコトカ出來ルノテアル。

備考　撒粉器

撒粉器ハ指紋ノ印寫セラレタル物體ニ粉藥ヲ撒布スル器具テアツテ普通醫藥用撒布器ヲ使用スルノテアル撒粉器ノ構造ハ容器（粉末ヲ容積スル器ノ一部分）噴霧口（粉末ヲ噴出スル器ノ一部分）護謨球（粉末ヲ發送スル器ノ一部分）ヨリナルノテアル此撒粉器ハ犯所ニ携帶シ而シテ各種ノ色粉ヲ入レタルモノ數箇ヲ準備セサルヘカラサルニヨリ其ノ器體ハ可成的小形ナルモノニシテ且ツ噴霧口ノ口徑モ細小ナルモノヲ要スルノテアル蓋シ撒粉ニ際シ口徑廣キニ過クルトキハ色粉ノ一部固塊シテ粉霧ハ一樣ニ指紋上ニ撒布サレス所々ニ斑點ヲ生シ指紋ノ表現ニ不結果ヲ來スモノテアル又撒粉器使用ニ當リ注意スヘキコトハ粉末ヲ濃厚ニ撒布セサルコトテアル若シ粉末ヲ濃厚ニ撒布スルトキハ往々ニシテ指紋ノ陰線ヲ埋沒シ遂ニ貴重ナル指紋印象ヲ表現スルコト能ハサルニ至ルノテアル。

撒粉器ノ用法ハ先ツ左手ヲ以テ撒粉器ノ容器ヲ持チ右手ノ指頭ヲ以テ護謨球ヲ把持シ噴霧口ヲシテ指紋ヲ現象セント欲スル筒所ニ向ケ靜カニ護謨球ヲ壓迫スレハ色粉ハ粉霧ト爲リテ放散シ指紋ノ脂肪分ニ密着シ潛在セル指紋印象ヲ再現シ得ルノテアルココニ於テ最後ニ粉末ヲ容レサル空虛ノ撒粉器ヲ以テ徐々ニ其ノ上ヲ吹キ拂ヘハ明ニ指紋印象ヲ再現シ鑑識スルコトカ出來ルノテアル之ヲ又隨意ニ「セラチン」ニ移寫若シクハ寫眞ニ復寫シ得ルノテアル。

第五章　結論

一

此ノ小冊子ハ聊カ司法實務家竝ニ一般初學者ノ爲メニ斯學攻究ノ理論及ヒ應用ノ大要ヲ說述シタモノテアルカ大方諸士カ之テ以テ近世個人識別法制度ノ內容ヲ知リ且ツ今後斯學攻究ノ端緒トナリ而シテ尙ホ之ヲ以テ一般ニ斯學知識ノ普及ヲ達成スルコトヲ得ハ余ノ滿足トスルトコロテアル。

玆ニ結論トシテ斯學ノ使命及ヒ任務ハ果タシテ如何ナル點ニアルカ又斯學ノ社會ニ對スル效益ハ幾何テアルカ又斯學ハ今後如何ニ改善進步サレネハナラヌカ此ノ諸點ニ就テ尙ホ一言約說シタイト思フノテアル。

二

近來物質的文明ノ進步ト共ニ人口都市集中ノ傾向ハ犯罪增加率ヲ昂進セシムルモノナルコトハ世界各國都市ノ情況ニ就テ見ルモ疑ヒナキ事實テアル卽チ我國ニ於ケル情況ヲ見テモ人口都市集中ノ結果ハ犯罪ノ機會ヲ多カラシムルモノテアツテ近來智能犯タル一般手形ニ關スル犯罪カ激增シテ居ルト云フコトテアル。

現今世界都市ニ於ケル犯罪殊ニ詐欺犯、强竊盜犯、殺人犯等ノ滋蔓流行ヲ來スハ種々ノ原因モアラウケレトモ又一ニ此ノ個人識別法ノ不備ナルニ歸因スルモノカアラウト思ハレルノテアル。

我國ニ於テハ犯罪搜査ニ關シテハ今日尙ホ科學的組織カ完全シテ居ラヌノテ人權問題カ屢々生スルノテアル之レ刑事政策上大ニ研究考慮ヲ要スル點テアツテ其ノ原因モ種々アラウカ其ノ重ナルモノハ又個人識別法ノ不備ニ歸セネハナラヌノテアル。

三

凡ソ犯罪ハ社會ノ通有的現象ナルカ故ニ國家ハ刑事政策上極力之カ鎭壓排除ニ努ムルハ勿論進ムテ之カ豫防ノ目的ヲ達セサルヘカラルモノテアル之カ爲メ國家ハ最善ノ施設經營ヲナスモノテアル而シテ國家ノ施設シ又ハ經營スル諸般ノ刑事政策中平素個人ノ異同ヲ調査シ犯罪發生ニ際シ其ノ犯人ノ何人タルコトヲ迅速且ツ的確ニ知リ得ル方法制度ハ卽チ個人識別法テアル。

今日犯罪ヲ絕滅スルコトハ或ハ不可能テアラウ然シ犯罪者ノ何者テアルカヲ判明スルコトハ敢テ不可能事テハナイ筈テアル。

然ルニ此處ニ戰慄スヘキ重大犯罪カ決行サレタルニモ拘ハラス犯人カ不明テアルコトカアル斯カル不明ノ犯罪カ屢々アルコトハ社會人心ヲ不安ナラシメ且ツ警察權ノ威信ニ關スルコトテアル斯クノ如キハ之レ個人識別法ノ未タ完備セラレサルコトカ重ナル原因トナルコトカ多イノテアル。

今日文明社會ニアルマシキコトハ行方不明者ノ多キコトテアル身元不明ノ行路病者及ヒ變死者ノ多キコトテアル試ミニ之ヲ東京市ノ一區ニ見テモ其ノ數ハ可ナリノ多數テアラウ之ヲ尙ホ東京市及ヒ郡部東京府管內又ハ大阪市、大阪府ト云フ樣ニ尙ホ日本全國ニ及ホシタナラハ實ニ驚クヘキ

多數ニ達スルテアラウト思ハレルノテアル爾來之ニ對スル取扱方法ハ如何若シ之ヲ調査スルモノアラハ其ノ幼稚ナルニ驚クテアラウ然ラハ今日文明ノ方法トシテハ實體的個人識別法ノ應用ヲ必要トスルノテアル。

四

今日社會ノ進歩ハ吾人ノ生活秩序ヲ複雜ナラシメ以テ個人識別ノ如キモ容易ニアラス例ヘハ人家稠密セル熱鬧街中ニ或一人ノ住所ヲ尋タルノミニテモ可ナリノ難事テアル況ハンヤ犯人ノ捜査探知ニ於テヲヤ殊ニ交通機關ノ發達ハ犯人ノ逃走ニ便利ニシテ警察官ノ捜索ヲ困難ナラシムルヲ以テ犯人ハ隨所ニ犯行ヲ逞フシ巧ニ犯跡ヲ韜晦スルノテアル而シテ偶々逮捕セラレタル後ニ於テモ亦前科ヲ包藏シ又前科ノ發見ヲ恐レ氏名ヲ詐稱シ又年齢、原籍等虛構ノ陳述ヲ爲シテ犯行ヲ逃レントスルノテアル我カ東京、大阪ノ如ク人ノ出這リ頻繁ナル都市ニ於テハ殊ニ前科包藏者多ク其ノ發見方法ニ就テハ爾來甚タ苦心シタトコロテアツタ。

然ルニ近來指紋法ノ實施ハ實ニ此等犯人ノ慣行手段ヲ發見スルニ效果カアツタノテアル又指紋ハ送達ニ自由ナルヲ以テ此等犯罪ニ對シ何時何處ニ於テモ迅速ニ犯人ヲ識別シ捜査シ檢舉スルコトカ出來ルノテアル。

斯ノ如ク指紋ニ依ル個人識別法ノ研究及ヒ施設ハ今日世界ノ刑法界ヲ苦メテ居ル都市特種犯罪ニ對スル累犯增加ノ問題ニ一ノ光明ヲ投シタモノテアル。

個人識別法ノ利用ハ犯人ノ逮捕及ヒ檢舉ニ利用セラレルハカリテナク有罪ノ者ヲ無罪トナスコトカ出來ルノテアル斯ク云フト甚タ奇怪ニ聞エルテアラウカ其ノ例ハ二三年前北海道ノ或地方テ竊盜罪累犯者トシテ裁判所ノ判決ヲ受ケ刑務所ニ送ラレタ者カアツタ然ルニ彼ノ言動ニ就キ不信ノ箇所カアツタノテ刑務所テハ早速指紋ヲ採取シ彼ノ身分帳簿ノ指紋原紙ト對照セルニ全ク相違セル別人ノ指紋ナルコトヲ發見シタノテアル此處ニ於テ仔細ニ取調ノ結果彼ノ自白ニヨルト彼ノ親戚ニハ名譽職ヲ勤メテ居ルモノカアルノテ彼ノ罪狀カ鄕里ニ知レテハ彼ノ親戚等ヘ不名譽ノ累ヲ及ホサンコトヲ慮リソコテ前科者タル彼ノ知人ノ氏名ヲ冒稱シ裁判ヲ受ケタコトカ知レタノテアル此處ニ於テ彼ノ指紋原紙ハ司法省指紋部ニ送ラレ保管原紙ニ就キ尙ホ嚴密ニ調査サレタノテアルカ彼カ最初ノ申立テタ氏名及ヒ前科ハ全ク彼ノ知人某ニ該當スルコト相違ナク而シテ彼ニハ又前科カ無イコトカ確實ニナツタノテアル之レヲ以テ彼ハ遂ニ初犯者トシテ受刑サレタト云フコトテアル。

尙ホ指紋利用ノ例ハ第一章ニ揭ケタ如ク或ハ印章ノ代用トシテ僞造ノ罪ヲ防止スルコトカ出來ル或ハ人ノ身分關係其ノ他公法上ノ關係ニ對スル證明ヲ正確ニシ又交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ヲ堅實ナラシメ取引ノ安全ヲ充分ニ保護シ得ヘキモノテアル斯クノ如ク指紋ノ利用ハ公法私法ノ

法律關係ニ應用シテ效果アルコトハ今日一般ニ認メラレタルトコロテアル。

五

斯ノ如ク個人識別法ノ必要ハ今此處ニ言ヲ俟タスシテ世界各國制度カ之ヲ明カニシテ居ル世界各國ニ於テハ先ツ第一ニ戸籍制度ヲ制定シ以テ人口ヲ精査シ個人ノ氏名、年齢其ノ他身分關係ヲ明カニシ各人ノ異同ヲ形式的ニ識別シ立國ノ規準ヲ明カニシテ居ルノテアル。

爾來我國ニ於テハ刑事上ノ犯罪人及ヒ警察ニ於テ警戒ヲ要スヘキ者或ハ犯罪檢擧上參考ニ供スヘキ者等ニ對シテハ綿密ナル名簿索引票又ハ前科小票等ヲ備ヘ或ハ寫眞臺帳ヲ設クル等諸種ノ方法カ設備サレタ而シテ又我國ニ於ケル全國警察官署ニハ戸口調査簿ノ備付カアル斯クノ如ク現時形式的個人識別法ハ殆ント完備ノ域ニ達セルモノテアル然リト雖モ近代ノ個人識別法ハ之ヲ實體的方面ニ求メサルヘカラサルハ既ニ理論ノ明白ナルトコロテアル而シテ我國ニ於テハ近時指紋法制度ヲ採用シテ之カ完備ヲ期シテ居ルノテアル。

六

古代ノ人民ハ個人識別ノ方法トシテ業ニ已ニ指紋ヲ使用セルコトアリト雖モ個人識別法トシテ之ニ科學上ノ研究ヲ施セルハ實ニ「ガルトン」氏及ヒ其ノ他ノ學者ヲ以テ嚆矢トナスモノテアル此ノ指頭線ノ研究、指紋ノ形狀、線ノ位置又ハ方向ヲ基礎トスル一定ノ法則卽チ指紋ノ永久不變及ヒ指紋中ニ含有スル其ノ他ノ特徵ヲ根據トセル指紋分類法ハ今日最良ノ個人識別法ヲ組織スルモノテアル而シテ又指紋法ハ今日實際上ニ施行シ得ヘキ個人識別法トシテノ必要條件タル簡易ト迅速ト而シテ又經費ノ多額ヲ要セサルコトノ諸要件ヲ具備スルモノテアル。

七

吾人カ社會ヲナシ共同生存ノ實ヲ擧クル上ニ於テ若シ個人識別法ノ設備ニシテ不完全ナランカ社會ノ無秩序狀態ノ原因ヲ一層多カラシメ益々犯罪鎭壓防止ノ問題ヲ困難ナラシムルコトハ言フマテモナイ吾人カ共同生存ニ於テ裁判カ刑事ノミニ止マラス民事ニ於テモ必要テアルナラハ個人識別法ハ此等諸種ノ法律關係ニ於テモ亦必要ニシテ一ハ裁判官ノ心證ヲ確メ一ハ訴訟當事者カ有力ナル證據ヲ擧ケテ以テ裁判ノ結果ニ公正且ツ和解ヲ得セシムルモノテアル。

八

今日個人識別法制度ノ組織ハ警察、裁判、行刑ト相關聯シテ犯罪ノ發見犯人ノ逮捕等ニ資スル刑法ノ目的ヲ有スルノミナラス尙ホ犯罪豫防ノ方法トシテ刑事政策ノ目的ヲ有スルモノテアル以上ノ目的ヲ以テ尙ホ特ニ個人識別法トシテノ任務ハ最モ近代的ノ思想ト方法トニ基キ社會ノ秩序ヲ保障スルモノテアラネハナラヌ。

以上ノ論結トシテ余ノ信スル所ヲ以テスレハ宜シク本邦各大都市ニ於テハ個人識別法ノ設備ヲ擴

張シ以テ一般法律關係ニ應用シ斯法ヲシテ益々完全ナル理想的實施ヲ見ルニ至ラシムヘキコトヲアル。

最新個人識別法學終

附錄

附　錄（其一）

指紋原紙取扱規程（大正六年七月十六日改正）

第一條　新ニ入監シタル受刑者アルトキハ其指紋ヲ押捺セシメ別紙第一號樣式ノ指紋原紙ヲ作成スヘシ

第二條　指紋ノ押捺ハ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタル受刑者ニ付之ヲ爲ス

第三條　指紋ハ特別ノ事由アル場合ノ外入監後直ニ押捺セシムヘシ

疾病其他ノ事故ニ因リ押捺セシムルコト能ハサリシ者カ其事故止ミタルトキ亦同シ

第四條　指紋ノ押捺ヲ要スヘキ者疾病其他ノ事故ニ因リ押捺未濟ノ儘出監シタル場合ニ於テハ指紋原紙各欄ニ記入ヲ爲シ表面備考欄ニ押捺不能ノ事由ヲ朱記スヘシ

第五條　指紋原紙ハ一人ニ付三通ヲ作成シ其一通ハ原本トシテ身分帳簿ニ編綴シ他ノ二通ハ正本副本トシテ司法省監獄局ニ送付スヘシ

第六條　各監獄及ヒ分監ニ指紋擔當者ヲ置キ指紋ノ押捺、分類其他指紋原紙ノ作成ニ從事セシムヘシ

第七條　指紋原紙ノ正本及ヒ副本ハ刑期三月以上ニ係ル分ハ一箇月分取纏メ別紙第二號樣式ノ指

紋原紙作成表ヲ添付シ發送スヘシ

刑期三月未滿ニ係ル分ハ其都度發送スヘシ此場合ニ於テハ指紋原紙作成表ノ添付ヲ要セス

第八條　指紋ヲ押捺セシメタル者左ノ各號ノ一ニ該ルトキハ指定ノ樣式ニ依リ其事項ヲ報告スヘシ

一　懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレ再ヒ入監シタルトキ又ハ他ノ罪ニ因リ懲役又ハ禁錮ノ刑ノ判決ヲ受ケ其刑確定シ受刑事項ニ追加アリタルトキ（別紙第三號樣式）

二　包藏ノ前科アルコトヲ發見シタルトキ（別紙第四號樣式）

三　減刑セラレ又ハ加重刑ノ決定ヲ受ケ其刑確定シ受刑事項ニ異動ヲ生シタルトキ（別紙第五號式）

四　特赦、假出獄、刑ノ執行停止等ニ因リ刑期終了前出監シタルトキ（別紙第六號樣式）

五　假出獄ノ取消、刑ノ執行停止ノ取消等ニ因リ復監シタルトキ（別紙第七號樣式）

六　死亡シタルトキ（別紙第八號樣式）

七　氏名ヲ訂正シタルトキ（別紙第九號樣式）

第九條　前條第一項第一號前段ニ該ル受刑者ノ指紋中前刑身分帳簿ニ編綴シアル原本ノ印象ト對照シ新ナル缺損ノ爲メ指紋ノ分類番號ニ異動ヲ生シタリト認メタルトキハ更ニ指紋原紙三通ヲ

作成シ第五條ノ例ニ依リ取扱ヒ尙指紋原紙表面氏名欄ノ上部ニ㊞ノ記號印ヲ押捺シ且其事由ヲ表面備考欄ニ朱記スヘシ

指紋ヲ押捺セシメタル者在監中傷害等ニ因リ指頭又ハ隆線缺損シ指紋ノ分類番號ニ異動ヲ生シタリト認メタルトキ亦同シ

第十條　指紋ノ押捺及受刑追加報告ヲ要スヘキ新受刑者カ拘禁區分ニ依リ移監スヘキモノナルトキハ其移監ヲ受ケタル監獄ニ於テ指紋原紙ノ作成發送又ハ受刑追加報告ヲ爲スヘシ但當月分指紋原紙又ハ受刑追加小票發送迄ニ移監セサル場合ハ新入監獄ニ於テ本條ノ手續ヲ爲スヘシ

前項但書ニ依リ指紋原紙ノ作成又ハ受刑追加報告ヲ了リタル場合ニ於テハ其旨移監ヲ受クヘキ監獄ニ通知スヘシ

第十一條　指紋原紙及ヒ指紋ニ關スル報告ハ分監ノ分ハ直接ニ出張所ノ分ハ本監ニ於テ取纒メ特ニ定メアル場合ノ外翌月二十日迄ニ發送スヘシ

第十二條　在監者中氏名詐稱若クハ前科包藏等ノ疑アル爲メ指紋ノ對照ヲ求メントスルトキハ原紙表面上部ノ欄外ニ「要對照」ト朱記シ司法省監獄局ニ送付スヘシ此場合ニ於ケル原紙ニハ作成監獄名及ヒ本人氏名外ノ記事ハ之ヲ省略スルコトヲ得

前項對照濟ノ原紙ヲ受ケタルトキハ之ヲ本人ノ身分帳簿ニ編綴シ置クヘシ

附　錄

第十三條　指紋原紙ハ左ノ順序ニ依リ押捺セシムヘシ

一　指紋ヲ押捺セシムルニハ先ツ表面上欄左手ノ部ニ始マリ中欄右手、下欄左手右手ノ部ヲ經テ裏面左手示指欄ニ至ルモノトス

二　表面上欄左手ノ部、中欄右手ノ部ニ各指定ノ指紋ヲ押捺セシムルニハ指端關節ノ屈折部ヲ指紋原紙ノ(折)ノ記號アル黑線ノ直上ニ當テ指爪面ノ一側ヲ同原紙ニ垂直ニ置キ其他側カ同原紙ノ垂直ニ至ルマテ回轉セシムヘシ但印象不判明ナルトキハ更ニ上部ノ餘白ニ押捺セシメ餘白ナキ場合ハ貼紙シテ之ヲ爲サシムヘシ

三　表面下欄左手右手ノ部ニハ拇指ヲ除キ他ノ四指ノ指端ヲ同時ニ指紋原紙ニ平面ニ押捺セシムヘシ

四　裏面左手示指ノ欄ニハ左手示指ヲ回轉押捺セシムヘシ

第十四條　指紋ヲ押捺セシメタルトキハ直ニ本人ヲシテ指紋原紙ニ於ケル囚人氏名自署欄ニ其氏名ヲ記入セシムヘシ若シ自署スルコト能ハサルトキハ作成者ニ於テ其事由ヲ記載スヘシ

第十五條　指紋原紙ハ左ノ例ニ依リ記載スヘシ

一　指紋ノ分類番號ハ表面上欄中欄各指紋ノ下部左方ニ記入シ尙乙種蹄狀紋ニ在テハ線數ヲ其右方ニ記入スヘシ但副本ハ正本ニ依リ其分類番號ヲ寫記シ蹄線數ノ記入ヲ省略スルコトヲ得

二　氏名欄ニハ本人ノ氏名ヲ記入スヘシ若シ其氏名囚人氏名自署欄ノ氏名ト異ナルトキハ氏名欄ノ下部ニ横行ニ其理由ヲ細字ヲ以テ記入スヘシ

難解又ハ讀方數箇ニ岐ルル氏名ニハ假名ヲ付スヘシ

三　身分欄ニハ華士族平民ノ區別ヲ記入スヘシ

四　職業欄ニハ逮捕前ノ職業名ヲ記入シ若シ數種アルトキハ其主ナルモノヨリ順次記入スヘシ

五　綽名其他ノ稱呼欄ニハ本名以外ノ通稱又ハ全部ヲ記入スヘシ

六　男女ノ別欄ニハ男又ハ女ト記入スヘシ

七　分類番號欄ニハ記入ヲ要セス

八　原籍欄ニハ廳府縣郡市區町村大字番地ヲ記入スヘシ

九　住所欄ニハ現住地ノ廳府縣郡市區町村大字番地ヲ記入スヘシ

十　出生地欄ニハ廳府縣郡市區町村大字番地ヲ記入スヘシ

航海中又ハ旅行中出生シタル者ナルトキハ其旨及ヒ其屆出地ヲ記入スヘシ

十一　生年月日欄ニハ出生ノ年月日ヲ記入スヘシ

十二　作成欄ニハ年月日ハ亞剌比亞數字ニテ記入シ官廳名ヲ記シ作成者ニ於テ認印スヘシ

十三　表面備考欄ニハ左ノ事項其他指紋ニ關シ參考トナルヘキ事項ヲ横行ニ細字ヲ以テ記載ス

ヘシ

イ　指紋ノ缺損不具若クハ負傷疾病其他ノ事由ニ因リ指紋ヲ押捺セシムルコトヲ得ス又ハ是等ノ事由ニ因リ不整ノ印象ヲ生スル場合ニハ其事由

ロ　剝皮創瘢其他ノ事由ニ因リ印象不鮮明ナル場合ニハ成ルヘク其鮮明ヲ期シ現ニ押捺ノ印象以上ニ明瞭ナラシムルコト能ハサルトキハ其事由

ハ　外角缺如セル場合ニハ其事由

十四　裏面受刑事項欄ニハ懲役、禁錮及ヒ之ト同質ノ舊刑法ノ刑ニ該ルモノヲ記入スヘシ

記載ノ順序ハ刑執行ノ順ニ依リ遠キモノヨリ近キモノニ及ホシ其五箇以上ノ受刑事項アルモノナルトキハ最近五箇ヲ記入スヘシ

十五　受刑事項中二箇以上引續キ執行スヘキ刑ヲ有スル者ナルトキハ各刑ニ付各一欄ヲ用ヒ執行ノ順序ニ依リ之ヲ記載シ尚刑名刑期ノ肩ニ朱書ヲ以テ(1)(2)等ノ符號ヲ付シ且(1)刑ノ出獄ノ事由及ヒ其年月日ノ左傍ニ下欄ノ刑ヲ引續キ執行スヘキコトヲ朱記スヘシ

十六　判決ヲ受ケタル氏名欄ニハ判決書ニ記載シアル氏名ヲ記入スヘシ

十七　罪名欄ニハ併合罪ナルトキハ併合セラレタル各罪名ヲ記入スヘシ

十八　刑名刑期欄ニハ判決ノ刑名刑期ヲ記入シ若シ加重又ハ減刑ニヨリ變更セラレ又ハ未決勾留日數ノ算入セラレタル者ナルトキハ其左傍ニ變更刑期若クハ未決勾留算入日數ヲ朱記スヘシ

十九　言渡裁判所欄ニハ確定シタル判決ヲ言渡シタル裁判所名ヲ記入スヘシ

二十　執行監獄欄ニハ刑ヲ執行シタル監獄名ヲ記入スヘシ但一ノ刑ヲ數監獄ニ於テ執行シタル場合ニハ其最後ニ執行シタル監獄名ヲ記入スヘシ

二十一　出獄ノ事由及ヒ其年月日欄ニハ大赦、特赦、假出獄、刑ノ終了、刑ノ執行停止、逃走等出獄ノ事由及モ出獄ノ年月日ヲ記入スヘシ但現ニ執行中ノ刑ニ付テハ豫メ刑ノ終了ニ因リ出獄スヘキ年月日ヲ記入スヘシ

二十二　特徵欄ニハ痘痕、文身、天踪、創瘢、不具其他指紋其モノニ關セサル異徵ヲ記入スヘシ

二十三　備考欄ニハ第十四號記載以外ノ懲役禁錮及ヒ之ト同質ノ舊刑法ノ刑ニ該ル前科アル場合ニ於テ其言渡年月日及ヒ罪名ノミ記入スヘシ但記載事項多クシテ指定欄內ニ記シ能ハサルトキハ指定欄ト同幅ノ掛紙ニ其餘ノ事項ヲ記入スヘシ

第十六條　指紋原紙ノ記事ハ楷書ヲ以テ記入スヘシ

指紋原紙ハ（折）ノ記號アル部分ノ外折ルヘカラス

第十七條　指紋原紙ヲ取纏メ發送セントスルトキハ正本ト副本トヲ各一括トシ成ルヘク之ヲ平面ニ展ヘ其包裝ヲ鄭重ニスヘシ

附則

第十八條　本規程ハ大正六年八月一日ヨリ施行ス

本規程ト抵觸スル從前ノ訓令、指示、通牒等ハ本規程施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

第十九條　本規程第二條ニ該當スルモ從前ノ規定ニ依リ指紋ヲ押捺セサリシ受刑者ニシテ尚在監中ナルトキハ當該者ノ指紋原紙ヲ作成シ其正本及ヒ副本ヲ大正六年八月二十日迄ニ發送スヘシ

第一號樣式

氏名	身分	職業	綽名其他呼ノ稱	男女ノ別	分類番號
津田甚吉	平民	大工		男	

原籍	大阪府東成郡榎並村大字野江八十番地	出生地	原籍地ニ同シ
住所	東京市麻布區北新門前町十三番地	生年月日	明治十三年三月二十日

(折)	左手				
	1. 示指	2. 中指	3. 環指	4. 小指	5. 拇指
	各指紋ノ回轉及ヒ平面印寫ヲ略ス				
(折) 7	6	18	3	5	7	4	8

右手				
6. 示指	7. 中指	8. 環指	9. 小指	10. 拇指
(折) 9	2	1	8	5	14

左手	右手

	大正6年6月11日	巣鴨監獄ニ於テ作成㊞	備考 (2) ノ缺損部ハ幼時遊戯ノ際ニ切創ヲ受ケタルモノナリ。(5) ノ外角缺如セルモ之レ以上印寫スルコト能ハス。
(折)	大正6年6月12日	同ニ於テ分類㊞	
	大正 年 月 日	ニ於テ檢査	

備考　巣鴨監獄ハ巣鴨務刑所ニ改ム

△印ハ朱記ノ分

判決ヲ受ケタル氏名	罪名	刑期名（金額）	言渡年月日	刑ノ始期	言渡裁判所	執行監獄	出獄ノ事由及年月日	左手示指	囚人氏名自署	特徴	備考
津田甚吉	詐欺取財	重禁錮一年	明治三九、六、一四	明治三九、六、一四	大阪地方裁判所	大阪堺分監	刑終了 明治四〇、六、一四		無筆ニ付自署不能	一、左前膊ニ櫻花ト盃ノ文身アリ 二、面部一體ニ痘痕アリ	明治二八、一〇、二五 窃盗 同 三五、二、一〇 賍物牙保
津田甚太郎	窃盜	懲役三年 △未決拘留十日算入	明治四一、九、一〇	明治四一、九、一六	東京區裁判所	前橋監獄	同 明治四四、八、一七				
津田甚太郎	窃盜	懲役四年 △減刑三年	大正元、八、九	大正元、八、一五	浦和區裁判所	浦和監獄	同 大正四、八、一五				
津田甚吉	窃盜傷害	△(1)懲役五年 △(2)懲役六月	大正六、六、一	大正六、六、七	東京區裁判所	巣鴨監獄	同 大正一一、六、七 △引續キ下欄ノ刑期執行				
津田甚吉			大正六、六、三	大正一一、六、七	東京區裁判所	巣鴨監獄	同 大正一一、一二、七				

第二號樣式（用紙美濃判）

大正　年　月　日

司法省監獄局御中

指紋原紙作成表　大正　年　月分

何監獄（何監獄何分監）

(1) 本月中新ニ押捺セシメタル者	本月ノ新受刑者中	前月末現在押捺未濟者中	押捺未濟移監者中	押捺未濟出監者原紙	合計	原紙發送數	今回發送	短刑期者發送濟
	二七	二	五	四	三八	三二		六

(2) 押捺未濟者	前月末現在	本月ニ至リ押捺出	前月末現在押捺未濟者中	押捺未濟ノ儘監獄ニ死亡	合計	本月新受刑者中	月末現在
	八	二	三	一	六	三	五

(3) 本月中新受刑者	新受刑者總員	本月新受刑者中					
		新押捺者	再度押捺者	受刑追加人員	押捺未濟者	押捺未濟移監者	押捺前出監者	合計
一一五	二七	一	七八	三	五	一	一一五

一、短期刑者ノ原紙ヲ特ニ發送スル場合ニハ本表ノ添付ヲ要セス該原紙ニ何人分發送スル旨付箋スルカ若クハ葉書ヲ以テ其旨通報シ置キ當月分ノ原紙ヲ取纏發送スル際其數ヲ本表ニ合算スヘシ

二、再度押捺者中ニハ改寫ノ數ヲ包マス

三、指紋原紙發送若クハ受刑追加報告後他ノ罪ニ因リ判決ヲ受ケ其刑確定シタルモノアルトキハ受刑追加人員ノ欄ニ其數ヲ

附錄

朱記スヘシ

四、新受刑總員中ニハ死刑及ヒ拘留ヲ含マス

第三號樣式

○小票番號 第　號　原紙記入　何監獄（何分監）　作成者印

最近前科	刑名刑期	年　月	氏	名
	執行監獄	監獄（　分監）		
	出獄年月日	年　月　日		

指紋原紙追加小票

分類番號	出獄年月日	執行監獄	言渡裁判所	刑ノ始期	言渡年月日	刑名刑期（金額）	罪名	判決ヲ受ケタル氏名
No.＿＿	大正　年　月　日	監獄（　分監）	控訴院裁判所	大正　年　月　日	大正　年　月　日	年　月		

左手示指

一　小票番號ハ暦年ニ依リ更改スヘシ

二　原紙記入ノ目ハ司法省監獄局保管ノ原紙ニ記入ノ際要スルモノナリ

三　本人ノ氏名カ最近前科ノ氏名ト異ナル場合ハ前科何々事何某ト記入スヘシ

四　分類番號欄ニハ全部ノ指紋分類番號ヲ記入スヘシ

五　左手示指欄ニハ左手ノ示指ヲ回轉押捺スヘシ

六　假出獄ノ取消刑ノ執行停止ノ取消等ニ因リ復監シタル場合ニ其復監シタル原刑ノ前後ニ於テ新ナル刑ヲ執行セラルルトキニハ原刑ト新ニ執行スル刑トヲ併記シ兩者ノ關係ヲ小票ノ裏面ニ明記スヘシ

七　二刑以上引續キ執行スル場合ニハ同一小票相當欄ニ(1)(2)等ノ符號ヲ付スヘシ其他小票ノ記事ハ指紋原紙ノ記載例ヲ準用ス

八　參考人トナルヘキ事項アラハ小票ノ裏面ニ記載シ表面欄ニ「裏面參照」ト朱記スヘシ

九　小票ヲ發送スルニハ小票ト同幅ノ表紙ヲ添ヘ表紙ニハ何月分小票何枚ナルコト及ヒ監獄名ヲ記シ小票ノ肩ニ設ケアル小穴ヲ透シテ括ルヘシ

第四號樣式（用紙美濃罫紙）

大正　年　月　日

司法省監獄局御中

何監獄（何監獄何分監）

前科發見報告　大正　年　月分

△印ハ朱記ノ分

指紋番號	判決ヲ受ケタル氏名	罪名	刑名刑期	言渡裁判所	言渡年月日	刑ノ始期	執行監獄	出獄ノ事由及其年月日
38007 / 72142 最終ノ刑	船山常次	強盜	懲役八年	前橋地方	大正六、三、二八	大正六、四、三	前橋	刑終了 大正一四、四、三
發見シタル前科	關口好司	竊盜	懲役六月	東京區	大正二、四、一	大正二、四、七	東京	同 大正二、一〇、七
	關口常吉	竊盜	懲役一年△減刑九月	東京區	大正三、一、一一	大正三、一、一七	巣鴨	同 大正三、一〇、一七
	船山常吉	竊盜	懲役一年六月	浦和區	大正四、二、五	大正四、二、一一	浦和	同 大正五、八、一一

備考

一　最終ノ刑ト發見シタル前科トノ間ニ報告濟ノ前科アルトキハ其罪名刑名刑期及ヒ出獄年月日ヲ備考ニ掲クヘシ

第五號樣式（用紙美濃罫紙）

大正　年　月　日

司法省監獄局御中

何監獄（何監獄何分監）

指紋押捺者受刑事項異動報告

大正　年　月分

△印ハ朱記ノ分

原紙 番號	氏名	作成罪數	罪名	原刑言渡 年月日	原刑	變更事由及其刑期	變更刑出獄年月日	備考
38601	阿部子之吉	宮城	詐欺	大正四、三、一〇	懲役四年	減刑 懲役三年	大正七、三、一六	大正　年　月　日減刑（又ハ大正何年勅令第　號減刑）
47885								
57666	中島銀藏	巢鴨	竊盜	大正六、二、一五	同　六　月	加重 懲役二年	同　八、二、三	累犯發見大正六、六、二〇某裁判所ニ於テ加重刑決定
57652								
23442	高田利吉	京都	同	大正五、八、三	同　一　年	更ニ加重 懲役八月	同　七、四、九	同上△加重刑始期大正六、八、九
25678								
—								

一　記載ノ順序ハ變更事由ノ種類毎ニ逐次記入スヘシ

二　累犯加重ノ場合ニ於テ原刑ヲ變更セラルルコトナク更ニ加重セラレ原刑ニ引續キ執行スルトキハ加重刑ノ始期ヲ備考欄ニ朱記スヘシ

大正　年　月　日

司法省監獄局御中

何　監　獄（何監獄何分監）

指紋押捺者刑期終了前出監報告

大正　年　月分

原紙

番號	氏名	作成監獄	罪名	刑名刑期	刑ノ終了ニヨリ出獄スヘキ年月日	出獄事由	出獄年月日
42386	高田くに	前橋	殺人	懲役六年	大正七、一、二五	特赦	大正六、四、五
87774							
35460	大島國一	浦和	放火	同五年	同六、一二、三	假出獄	同六、四、二
39921							
74362	石塚庄作	水戸	文書僞造	同三年	同六、一一、五	同	同六、四、一五
21223							
86534	宮下磯太郎	東京	詐欺	同三年	同七、三、三	刑ノ執行停止	同六、四、一〇
87705							
—							

一　記載ノ順序ハ出獄事由ノ種類毎ニ逐次記入スヘシ

大正　年　月　日

司法省監獄局御中

何　監　獄（何監獄何分監）

指紋押捺者復監報告

大正　年　月分

原紙

番號	氏名	作成監獄	罪名	刑名刑期	出獄ノ事由及ヒ其年月日	復監事由	復監年月日	殘刑期	殘刑始期	執行監獄	出獄年月日
							復監ノ刑				
45712	川岸萬吉	巢鴨	放火	懲役五年	假出獄 大正五、一一、二	假出獄取消	大正六、四、九	六月二〇日	大正六、四、九	豐多摩	大正六、一〇、二九
77652											
27082	桑名德次	豐多摩	殺人	同七年	刑執行停止 大正六、二、五	執行停止取消	同六、四、一四	九月二一日	同六、四、一四	同	同七、一、一六
98712											
88791	八本寬太郎	巢鴨	竊盜	同四年	逃走 大正六、四、七	逮捕	同六、四、一三	一年一〇日	同六、四、一三	同	同七、四、三
35501											
—											

第八號樣式（用紙美濃罫紙）

大正　年　月　日

何　監　獄（何監獄何分監）

司法省監獄局御中

大正　年　月分

指紋押捺死亡報告

原紙

番號	氏名	作成監獄	罪名	刑名刑期	死亡年月日	死亡又ハ死亡ノ確證ヲ得タル事實
93124	加藤政吉	靜岡	竊盜	懲役二年	大正六、四、二	刑執行中病死
28345						
66452	五十嵐龍吉	小菅	同	同十二年	同 六、四、五（推定）	大正六、四、五、逃走行衛不明ノトコロ同年四、七、死體發見
94771						
88332	田村金太郎	宇都宮	横領	同 一年	同 六、四、四	大正六、三、七、刑執行停止中ノトコロ病死
99432						
43351	矢部龜藏	前橋	詐欺	同 三年	同 六、四、九	大正六、一、二九、刑終了出獄ノ所監督保護會ヨリ病死ノ旨報告
11340						
—						

一　本人カ在監中ナルト否トニ拘ハラス死亡又ハ死亡ノ確證ヲ得タルトキハ其事實ヲ報告スヘシ

第九號樣式（用紙美濃罫紙）

大正　年　月　日

何　監　獄（何監獄何分監）

司法省監獄局御中

大正　年　月分

指紋原紙氏名訂正報告

原紙

番號	氏名	作成監獄	罪名	刑名刑期	言渡年月日	本名	訂正事由
42245	宇野俊三郎	巣鴨	竊盜	懲役二年	大正六、四、三	德島縣板野郡大山村大字椎本二十番地 石井俊太郎	包藏シタル前科ト共ニ僞名發見
45227							
98310	工藤留吉	千葉	同	同六月	同 六、五、二八	明治二十七年一月三日生 加藤留吉	戸籍謄本取寄
97201							
11365	石塚藤吉	豐多摩	同	同一年	同 六、六、七	石塚藤三郎	本籍役場ノ回答
12555							
—							
—							

一　僞名發見等ノ場合ニ原籍又ハ生年月日ニ異動ヲ來シタルトキハ本名ノ欄ニ原籍又ハ生年月日ヲモ記載スヘシ

指紋分類學要覽（指紋分類學研究ヨリ摘抄大正十一年八月拙稿）

指紋ニ關スル一般的知識ハ先ツ之ヲ純學術的ト應用的方面ノ範圍ニ區別シ說明スルコトカ必要テアリマス。

應用指紋學ハ卽チ指紋ヲ人生ニ利用スルコトヲ攻究スル學科テアリマシテ重ニ刑事民事ノ法律關係ニ役立タシメルコトヲ以テ目的トスルノテアリマス卽チ本稿ニ於テハ個人識別法ニ應用サレタル指紋分類學ヲ攻究スルモノテアリマス。

純正指紋學ハ之ヲ汎指紋學ト指紋分類學トニ分ツテ說明スルノカ最モ便利テアリマス汎指紋學トハ卽チ指紋ト人類學、法醫學、個性學等ノ關係ヲ究ムル學科テアリマシテ指紋分類學ト謂ヒマスト卽チ指紋形態學ト指紋組織學ノ二種ニ分チマシテ形態學ノ方面ハ主トシテ指紋ノ外觀ノ形狀ヤ構造ヲ究ムル學科ト致シマス而シテ組織學ハ主トシテ線ノ構成及ヒ組織形狀ヲ究ムル學科トナリマス而シテ此ノ指紋分類學ハ一番古クカラ行ハレタモノテアリマシテ初メテ「プルキンエ」博士ニヨリ研究サレテ以來種々ノ變遷カアリマシテ今日ノ分類法トナツタノテアリマスカ此ノ分類ノ準備トシテ必要ナノハ其ノ形態、構造等テアリマス此等ノ親疎ノ關係ニ從ツテ指紋ヲ一定ノ系統ニ列ヘルノテアリマス。

今日ノ指紋分類法ノ基礎學トシテ此ノ指紋分類學ノ攻究ハ最モ緊要ト致ストコロテアリマス故ニ私カ聊カ日頃研究致シタモノニヨリ摘抄シテ御參考ニ供シタイト思フノテアリマス。

一　指紋分類法ノ樣式

第一樣式分類法（又ハ形態學的分類法）ハ純形態學的分類法テアリマシテ卽チ現行指紋分類法ノ基礎學的分類テアリマス之ヲ表示スレハ左ノ如クテアリマス。

- （一）弓狀紋
  - 純弓狀紋
    - 普通弓狀紋
    - 突起弓狀紋
    - 整形
    - 不整形
    - 不整形
  - 變種
    - 蹄狀紋其他各種指紋類似形
- （二）蹄狀紋
  - 純蹄狀紋
    - 整形
    - 不整形
  - 變種
    - 弓狀紋、有胎蹄狀紋二重蹄狀紋双胎蹄狀紋
    - 其他各種指紋類似形
- （三）渦狀紋
  - 純渦狀紋
    - 渦狀紋
      - 整形
      - 不整形
    - 環狀紋
      - 整形
      - 不整形

- 變種
  - 有胎蹄狀紋
  - 二重蹄狀紋
  - 双胎蹄狀紋
  - 混合紋
  - 純變體紋

第二樣式分類法（又ハ普通分類法）ハ指紋ノ學術語トシテ一般ニ用ヰラレルノテ指紋型種卽チ指紋ノ形態學的分類法テアリマシテ此分類ニハ三分式及ヒ四分式ノ二種類カアリマス四分式ト謂フノハ卽チ英國「ヘンリー」式ノ採用スル分類法テアリマシテ卽チ指紋ヲ弓狀紋、蹄狀紋、渦狀紋、混合紋（變體紋）ノ四種ニ大別スル方式テアリマス三分式ト謂フノハ卽チ獨國「ロッシエル」式ノ分類法テアリマシテ指紋ヲ大別シテ弓狀紋、蹄狀紋、渦狀紋ノ三分類トスル方式テアリマス我國ハ卽チ「ロッシエル」式ヲ採用シテ居ルノテアリマス之ヲ表示スレハ左ノ如クテアリマス。

- (一)弓狀紋
  - 普通弓狀紋
  - 突起弓狀紋
- (二)蹄狀紋
  - 甲種蹄狀紋
  - 乙種蹄狀紋
- (三)渦狀紋
  - 狹義ノ渦狀紋
    - 最狹義ノ渦狀紋
    - 環狀紋
  - 有胎蹄狀紋
  - 二重蹄狀紋
  - 双胎蹄狀紋
  - 變體紋
    - 混合紋
    - 純變體紋

第三樣式分類法（又ハ識別法分類法）ハ識別法ノ實際ニ使用スルノ分類法テアリマシテ主トシテ指紋原紙ノ配分ヲ均等ナラシムル目的ヲ以テ考案サレタモノテアリマス之ヲ表示スレハ左ノ如クテアリマス。

- 弓狀紋(1)
- 蹄狀紋
  - 甲種蹄狀紋(2)
  - 乙種蹄狀紋
    - 三ノ値ノ蹄狀紋(3)
    - 四ノ値ノ蹄狀紋(4)
    - 五ノ値ノ蹄狀紋(5)
    - 六ノ値ノ蹄狀紋(6)
- 渦狀紋
  - 上流渦狀紋(7)
  - 中流渦狀紋(8)
  - 下流渦狀紋(9)

（指頭缺失又ハ押捺不能）（○）

缺損指紋 印象不鮮明（◎）

外角缺如（9）

二　指紋及指紋ノ構造

指紋ノ構造ニ一定ノ定型ガアルコトハ既ニ「プルキンエ」博士幷ニ其ノ他ノ諸學者ニヨリ認メラレテ居ルノテアリマス而シテ指紋ノ構造ハ先ツ指頭頂端ノ線及ヒ指關節ニ近接セル線ノ組織形狀ヲ標準トシテ分類サレルノテアリマス即チ指頭頂端ノ線ハ主トシテ弓狀ヲナシ指關節ニ近接セル線ハ平行直線（稍傾斜セル）テアリマス此ノ平行直線ノ層ヲ順次上方ヘ算ヘテ行クト指頭ニ至ルニ從ヒ弓狀ヲ畫キ頂端ニ達シテ消滅スルモノテアリマス而シテ此等ノ線ノ組織形狀ノ中央部ニ何等ノ變化カ起ラナイモノヲ弓狀紋ノ原型ト謂フノテアリマス此ノ弓狀紋ヲ形成スルニ於テ標準トナル線即チ指頭頂端ト指關節ニ近接セル線ヲ弓狀紋ノ標準線ト謂フノテアリマス即チ（上圖ノ如キモノテアリマス此ノ弓狀紋ノ標準線ノ中央部ニ三角線狀ノ軸カ直立シテ此ノ軸ヲ包容スル弓狀線カ著シク突起シ天幕狀又ハ山岳狀ヲ呈スルモノヲ突起弓狀紋ト謂フノテアリマス。

凡ソ指紋ハ上圖ノ如キ線ニ包容セラレテ居ルノテアリマスカ指紋ノ分類ハ其ノ中心形狀ヲ異ニスルニ從ツテ種類ヲ分ツノテアリマス即チ上圖ノ如キ線ノ內部ニ變化ヲ生シ蹄線ヲ生シタモノカアリマス之レ即チ蹄狀紋テアリマス而シテ又蹄狀紋ニハ外角ヲ形作ル一種ノ線カアツテ蹄線ヲ包容シテ居ルノテアリマス之ヲ蹄狀紋ノ標準線ト謂フノテアリマス即チ（上圖ノ如キモノテアリマス蹄狀紋ハ必ス此ノ標準線ト其ノ內部ニ一個若クハ以上ノ蹄線ヲ有スルコトヲ構成要件トスルノテアリマス渦狀紋ニモ亦中心ヲ包圍スル一種ノ線ノ組織カアリマス即チ（上圖ノ如キモノテ弓狀紋ノ標準線ノ下部ノ邊カ下方ニ脹レテ居ルモノテアリマス而シテ渦狀紋ノ種類ハ其ノ標準線ノ內部ノ線ノ變化即チ中心形狀ニヨリ種屬ヲ異ニスルモノテアリマス而シテ普通渦狀紋ノ中心形狀ニハ渦狀（螺旋形）環狀、楕圓形、扁桃形、等カアリマス有胎蹄狀紋ハ（上圖ノ如ク其ノ線ノ標準型ハ全ク蹄狀紋テアルカ唯タ普通ノ蹄狀紋ト異ナルノハ中核蹄線內ニ特種ノ變化ヲ生シテ居ル點テアリマス即チ弓狀線カアルノテアリマス故ニ該指紋ハ分類上之ヲ渦狀紋ニ屬セシメテ居ルノテアリマス即チ蹄狀紋ノ一種ノ變體紋テアルノテアリマス而シテ又二重及双胎蹄狀紋ハ渦狀紋ノ標準線內ニ普通渦狀紋ト異ナル中心形狀ノ變化カ起ツタモノテアリマス即チ（上圖（双胎線狀紋）ノ如ク渦狀紋標準線內ニ一線カ延長シテ聯曲セル二個ノ蹄線ヲ畫イタモノテアリマス該指紋ハ分類上之ヲ渦狀紋ニ屬セシメルノテアリマシテ即チ普通渦狀紋ニ對シ一種ノ變體紋ト看做スヘキモノテアリマス。

茲ニ嚴格ナル意味ノ變體紋ハ前述セル如キ一定ノ標準線內ニ特種ノ變化ヲ來シタモノテ前述セル

弓狀紋、蹄狀紋、渦狀紋ノ混合セルモノ又ハ以上三種ノ孰レニモ屬セサル特別ノ型態ヲ爲スルモノカアルカ此等ハ凡テ渦狀紋ニ屬セシメルノテアリマス指紋分類ノ一般原則トシテハ指紋ノ中心形狀ノ型種位置及ヒ方向ニ據リ分類スルノテアリマスカ尙ホ渦狀紋ニ就テハ中心形狀カ特種ナ形狀ヲ畫イテ居ツテモ中心ト標準角（左右兩側ニ於ケル）トノ間ニ渦狀線ヲ有スルモノハ凡テ渦狀紋ト認メルノテアリマス。

如斯指紋ノ定型ニ準據シ指紋ヲ分類スルトキハ自然的ニ指紋ヲ三種ニ大別スルコトヲ得ルノテアリマス卽チ弓狀紋ノ標準線ヲ有スルモノヲ弓狀紋トシ蹄狀紋ノ標準線ヲ有スルモノヲ蹄狀紋トシ渦狀紋ノ標準線ヲ有スルモノヲ渦狀紋トスルコトカ出來ルノテアリマス而シテ又此等標準線ノ內部ノ中心形狀ノ變化ニ從ヒ分類スルトキハ更ニ指紋ヲ各種ノ類屬ニ細分シ得ルモノテアリマス卽チ現行分類法ニ於テハ突起弓狀紋ハ弓狀線ノ標準線ノ中央部ニ突起セル軸ヲ有スルヲ以テ構成要件トスルノテアリマス普通蹄狀紋ハ蹄狀紋ノ標準線內ニ必ス一個若クハ以上ノ蹄線ヲ有スルコトヲ以テ構成要件トスルノテアリマス普通渦狀紋ハ渦狀紋ノ標準線內ニ渦狀ヲ畫ク線カ中心ヲ包圍シテ一點ニ集中スルコトヲ以テ構成要件トスルノテアリマス然ルニ多クノ指紋中ニハ此等指紋ノ中間ニ位スルモノカアツテ其ノ區別カ非常ニ困難テアリマス。

例ヘハ有胎蹄狀紋ト普通渦狀紋トノ區別二重及ヒ双胎蹄狀紋ノ區別及ヒ普通渦狀紋トノ區別ノ如キハ互ニ混同シテ其ノ所屬ヲ容易ニ決定シ難イモノカアリマス卽チ現行法テハ有胎蹄狀紋ト普通渦狀紋ハ中心形狀ノ方向ヲ規準トシテ區別サレルノテアリマス卽チ有胎蹄狀紋ノ中心形狀ハ蹄線ロト相對シテ常ニ傾斜シテ居ルカ普通渦狀紋ノ中心形狀ハ渦狀紋ノ標準線內ニ正シキ方向卽チ正直ノ姿勢ヲ保ツコトヲ要件トスルノテアリマス又二重及双胎蹄狀紋ト普通渦狀紋ハ其ノ中心線ノ位置及ヒ方向ヲ規準トシテ區別サレルノテアリマス而シテ二重蹄狀紋ハ其ノ聯曲中心線及ヒ軸カ同一方向ニ走ルモノテアリマシテ双胎蹄狀紋ハ其ノ聯曲中心線及ヒ軸カ互ニ相異ル方向ニ走ルモノテアリマシテ其ノ聯曲中心線ハ外端ヲ基點トシテ出發シ其ノ指紋ノ中心ニ聯曲シテ橫ハルモノテアリマス普通渦狀紋ハ渦狀ヲ畫ク線カ中心ノ一點ニ集中スルコトヲ要件トスルノテアリマス二重及ヒ双胎蹄狀紋ハ前述シタ如ク渦狀紋ノ標準線內ニ正シキ位置ヲ占メテ聯曲セル二個ノ蹄狀紋ヲ畫クコトヲ要件トスルノテアリマスカ若シ其ノ聯曲線カ中心ノ一點ニ集中スル趨勢アルトキハ普通渦狀紋ニ屬セシメルノテアリマス尙ホ指紋ノ形態分類ニ困難ヲ來ス場合ハ弓狀紋ト渦狀紋トノ中心指紋、蹄狀紋ト渦狀紋ノ中間指紋、弓狀紋ト蹄狀紋トノ中間指紋テアリマシテ此等指紋ノ分類法ニ就テハ各國ニ於テ多少見解ヲ異ニスルトコロカアルノテアリマス此等ヲ一々列擧スルコトハ誠ニ繁雜ヲ來タシ且ツ實物ヲ要スルノテアリマスカラ此處ニハ省略シテ置キマス而シテ此等ノ指紋ハ皆前述セル分類法ノ原則ヲ適用シテ分類スルコカト出來ルノテアリマス。

以上ノ分類法ハ現今本邦及ヒ世界各國ニ行ハルル指紋分類ノ原則テアリマルカ此等分類法ニ就テハ實際ノ適用上ニ於テ尙ホ考慮ノ餘地モアリ改善ノ必要モ存スルノテアリマス。

附　錄（其ノ三）

指紋法用語ノ調査及研究（大正十年拙稿ヨリ摘抄）

一　指紋及ヒ指紋ノ名稱

指紋ノ名稱ニ就キ左ニ原語及邦語ノ意義ヲ參考トシテ設述致シマセウ。

弓狀紋ノ原語ノ意義ハ「アーチ」卽チ半圓形ノ門ノ義テアルカ我國ニ於テハ之ニ弓狀紋ナル譯語ヲ選定シタノテアリマス。

天幕狀紋ノ原語ノ意義ハ卽チ天幕ノ形狀ニ類似スルトコロカラ出タノテアリマシテ我カ司法省取調會ノ譯語モ之ト同意義テアリマスカ現行法テハ之ヲ突起弓狀紋ト呼ンテ居リマス蓋シ此ノ名稱ハ其ノ形狀カ普通弓狀紋ニ比シ其ノ頭部カ著シク突起シテ居ルトコロカラ撰定セラレタノテアリマス。

蹄狀紋ノ原語ノ意義ハ鞦（ワナ）ノ義テ紐ヲ環ニ結フ形狀ヲ謂フノテ卽チ其ノ狀恰モ馬蹄形ニ似タルヲ以テ我國ニ於テハ之ニ蹄狀紋ナル譯語ヲ選定シタノテアリマス。

甲種及乙種蹄狀紋ノ原語ノ語源ハ解剖學ノ術語テアリマシテ卽チ骨ノ名種カラ附セラレタノテアリマス卽チ橈骨ト尺骨テアリマス橈骨ハ拇指側ニアル骨ノ名稱テ尺骨ハ小指側ニアル骨ノ名稱テアリマシテ英獨ノ原語ハ此ノ名稱ヲ其ノママ轉用シテ蹄線カ拇指側ニ流レタル指紋ヲ橈骨ト謂ヒ小指側ニ流レタル指紋ヲ尺骨ト謂フノテアリマス然ルニ我國ニ於テハ橈骨ニ甲種尺骨ニ乙種ナル譯語ヲ選定シタノテアリマス。

渦狀紋ノ原語ノ意義ハ植物學ニ於ケル木葉ノ輪生體又ハ環生體又ハ動物學ニ於ケル螺環ノ義テ凡テ渦狀ヲ書ク形狀ヲ謂フノテアリマス我國ニ於テハ之ニ渦狀紋ノ譯語ヲ選定シタノテアリマス。

混合紋ノ原語ノ意義ハ組立物、合成物ノ義テ又二箇ノ樣式ヲ混合シタ古代建築ノ混合式等ヲ謂フノテアリマス我國ニ於テハ之ニ混合紋ナル譯語ヲ選定シタノテアリマス。

有胎蹄狀紋ノ原語ノ意義ハ中央（中核蹄線內）ニ袋ヲ有スル蹄狀紋ノ義テ我國ニ於テハ之ヲ有胎蹄狀紋ナル譯語ヲ撰定シタノテアリマス。

双胎蹄狀紋ノ原語ノ意義ハ雙子卽チ對ノ蹄線ヲ有スル蹄狀紋ノ義テ我國ニ於テハ之ニ双胎蹄狀紋ノ譯語ヲ選定シタノテアリマス。

二重蹄狀紋ノ原語ノ意義ハ側而ニ二重ノ袋ヲ有スル蹄狀紋ノ義テ我國ニ於テハ之ニ二重蹄狀紋ノ譯語ヲ選定シタノテアリマス。

變體紋ノ原語ノ意義ハ一色ヲ熱視スル時急ニ眼ヲ他ニ轉スルト偶然眼前ニ出現スル一種ノ現影ノ義テ卽チ一種不思議ノ形狀ヲ謂フノテアリマス我國ニ於テハ之ニ純變體紋ノ譯語ヲ選定シタノテアリマス。

線ノ原語ノ意義ハ醫學ニ謂フ乳頭線又ハ隆起線ノ義テ我國ニ於テハ之ニ單ニ線ナル譯語ヲ選定シタノテアリマス。

二　中心並外角（附內端、外端）

蹄狀紋及ヒ渦狀紋ニハ分類上ノ標準トナル重要點カアリマス卽チ中心及外角テアリマス。

蹄狀紋ノ中心ハ指紋ノ最モ內層ニ於テ核心ヲナス部分ヲ中心ト謂フノテアリマス而シテ蹄狀紋ノ中心ニハ棒狀線中心（又ハ棒軸中心）ト蹄狀線中心（又ハ蹄軸中心）ノ二種カアリマシテ中核蹄線內ニ軸アルトキハ軸ハ該蹄狀紋ノ中心テアリマシテ軸ノ項點ヲ中心點ト謂フノテアリマス。

中核蹄線內ニ軸ナキ時ハ中核蹄線ハ其ノ蹄狀紋ノ中心テアリマシテ中核蹄線ノ肩ヲ中心點ト謂フノテアリマス蹄線ノ肩トハ卽チ一個ノ蹄線カ其頭部ニ於テ逆流スルニ當リ最初ニ灣曲ヲ初メル點ト逆流シテ最初ニ灣曲ヲ初メタル點ト相對スルニ至リタル兩個ノ點ヲ其ノ蹄線ノ夫々肩ト謂フノテアリマス此ノ二點ヲ平斷スル直線ト該蹄線ノ頂部內面ヲ中心核ト謂ノテアリマス而シテ軸ノ頂高カ此ノ中心核內ニ達セナケレハ中心點ト認メナイノテアリマス此ノ理ヲ以テ現行中心點ノ規定ノ頂點ヲ以テ中心點トスル場合ハ該軸カ中核蹄線ノ頂部內面ヲ去ルコト該軸ノ太サヲ超エサルモノト謂フコトニナツテ居リマス又蹄線ノ肩ハ中核蹄線ノ頂部內面ニ該蹄線ヲ形作ル線ノ太サト等シキ餘地ヲ存シ平斷シタル肩測線カ該蹄線ト交ハル點ヲ肩トスルコトニナツテ居リマス。

渦狀紋ノ中心ハ之ヲ單數中心ト複數中心ノ二種トシテアリマス卽チ最初ニ渦狀ヲ卷キ初ムル點ヲ中心又ハ中心點トスルノテアリマシテ環狀ヲ畫ク線ニ於テハ環狀紋ノ最內層ノ環ヲ中心トシマシテ其ノ環內卽チ中心核內ノ最モ中央ヲ中心點ト謂フノテアリマス聯曲線ニヨリ形成サレタル二個ノ中核蹄線ハ互ニ二箇ノ中心ヲナスモノテアリマス。

外角ハ線ノ分岐ニヨリ形作ラルル三角島形ヲ謂フノテアリマシテ單線外角ト複線外角ノ二種カアルノテアリマス。

單線外角ハ指紋ノ中心ニ向ヒ單線ノ分岐スルコトニヨリ形作ラレタル三角島形ヲ謂フノテアリマシテ複線外角ハ指紋ノ中心ニ向ヒ竝行セル二線ノ分離スルコトニヨリ形作ラレタル三角島形ヲ謂フノテアリマス而シテ外角ノ外側ノ一角ヲ外端ト謂フノテアリマス。

蓋シ中心ナル語ハ物ノ心髓ヲ謂フ義テアリマシテ果實ナトノ核心又ハ物ノ窪ミノ心トナル所ヲ指シテ謂フノテアリマス而シテ中心點ト內端トハ實際取扱上ハ同意義ニ使用サレルノテアリマシテ內端ハ物ノ內部ノ境界トナル所ヲ謂フノテアリマシテ指紋法術語トシテノ內端ハ外端ヲ去ル最モ

遠キ中核歸線ノ肩部テアルト定メラレテアルノテアリマス其ノ意ハ指紋ノ最モ内部ニ於ケル境界卽チ指紋ノ中心點ニ最モ接近シタ所ト謂フ意義ニ外ナラナイノテアリマス。

外角ハ卽チ隆線ト隆線ノ間ニ生スル三角形ノ窪ミテアリマシテ其ノ狀恰モ三角洲ニ似タルヲ以テ指紋原語トシテ三角洲又ハ三角島ト謂フノテアリマス我指紋法ニ於テハ之ニ外角ナル譯語ヲ選定シタノテアリマス。

蓋シ外角ナル語ハ幾何學上ノ學術語テアリマシテ譯語ハ必スシモ幾何學的ノ角ソノモノヲ指示スルノテハナク單ニ其ノ名稱ヲ轉用シタノテアリマシテ幾何學ニ於テ内角ニ對シ外角ト謂フノカアリマスノテ指紋ノ内端ニ對シ外端又ハ外角ト謂ツタノニ過キナイノテアリマス故ニ別ニ深イ意義ハ無イノテアリマス。

外角ナル原語ノ意義ハ三角洲卽チ三角島ノ義テ其ノ語源ハ地文學ノ術語テアル三角洲ノ事テアリマス此ノ三角洲ハ水源ヨリ流レ來ル河水カ湖海ニ注クヤ速力頓ニ緩ムヲ以テ此處ニ上流ヨリ持チ來レル運搬物ヲ沈積シテ砂洲ヲ造ルノテアリマス此ノ河口ニ生シタル砂洲ノ爲ニ河流ヲ阻碍スルトキハ河流ハ數多ニ分流シテ三角ノ陸地ヲ狹ムノテアリマシテ之ヲ三角洲ト謂フノテアリマス。印度地方ノ諸川ニハ此ノ種ノ天然的三角洲カ最モ良ク發達シテ居ル河カアルト謂フコトテアリマスカ我東京附近テハ東京ト千葉ノ境界ヲ流ルル江戸川河口ニ最モ良ク發達シタ自然的ノ三角洲ヲ見ルコトカ出來ルノテアリマス又東京市ノ隅田河口ノ佃島月島ナトモ人工テ破壞サレテハ居ルカ三角洲ノ一例トシテ例示スルコトカ出來ルノテアリマス前述ノ如ク三角洲ハ河流ニ分岐ヲ生セシメルモノテアルカラ一般ニ角度ヲ示ス術語トシテ使用サレ數學ニ於テモ三角洲ナル學術語カアルノテアリマス之ヲ以テ指紋法ニ於テモ指紋法用語トシテ三角洲卽チ外角ナル名稱ヲ使用シテ居ルノテアリマス卽チ指紋法ニ於テハ隆線カ河流ニ譬ヘラレ其ノ分流點ニ生スル隆線溝ノ三角島形カ卽チ三角島テアリマス實際ニ於テハ此ノ河ノ分岐點ヲ外角卽チ外端トシテ兩語ハ同意義ニ使用セラルルノテアリマスカ尙ホ外端ヲ分テハ單線外角ノ場合ヲ接合外端複線外角ノ場合ヲ平行外端ト謂フノテアリマス。

今日ノ指紋法ニ於キマシテハ以上ノ如キ基準點カ確定セラレマシテ線數ノ計算法カ行ハレテ居ルノテアリマス此ノ指紋ノ總數計算法ノ原則ハ卽チ指紋ノ層ヲ計ヘル方法ニ依リ指紋ノ價カ定メラレルノテアリマス。

一般科學ノ例ニ見マシテモ其物體ノ層ヲ研究シテ其物質ヲ知ルコトカ出來ルノテアリマス例ヘハ化學ニ於ケル火焰ノ構造ノ研究ノ如キハ其ノ層ニ依リ光度ヲ知ルノテアリマス又植物ノ年輪ノ如キハ其ノ例テアリマシテ其横斷面（切口）ニ表ハルル木目卽チ幹ノ層ヲ數ヘテ見テ樹齡其他年々ノ氣候溫度ヲモ知ルコトカ出來ルノテアリマス此ノ理ニ基キマシテ指紋ノ計算法ニ於キマシテモ

指紋ヲ構造スル線ノ層ヲ數フルコトカ原則ニナツテ居ルノテアリマシテ蹄狀紋ノ場合ハ外端ヲ去ル最モ遠キ蹄線ノ肩ニ於テ基準點ヲ定メ其ノ蹄線層ヲ計ヘ得ルコトニナツテ居リマス。

附錄（其ノ四）

指紋法用語一覽表

（一）一般的術語

邦語	原語
指紋	Finger Prints (Daktytoskopie)
中心	Cores (Kern)
外角	Delta (Delta)
外端	Outer terminus (Äusserer Treminus)
內端	Innner terminus (Innerer Terminus)
弓狀紋（現行術語ハ普通弓狀紋）	Arches (Arcusod. Bogen)
天幕狀紋（現行術語ハ突起弓狀紋）	Tented arches (Tannenartige Bogen)
蹄狀紋	Loops (Lasso od. Sechilingen)
甲種	Radial Loops (Radialschilingen)
乙種	Ulnar Loops (Ulnarshilingen)
渦狀紋	Whorls (Wirbel)
上流	Inner (dnner)
中流	Meeting (Mittel)
下流	Outer (Äusser)
混合紋	Composites (Zusammengesezte)
有胎蹄狀紋	Central pocket Loops (Zentral caschenschilingen)
雙胎蹄狀紋	Twinned Loops (Zwillingsschilingen)
二重蹄狀紋	Lateral Pocket Loops (Doppelschilingen)
變體紋	Accidental (Zufallige Muster)
線	Ridge

（備考）本術語ハ司法省犯罪人異同識別法取調會ニ於テ選定シタル術語テアル而シテ邦語ハ卽チ其譯語テアル原語ハ英語、括弧內ノ原語ハ獨逸語テアル。

（二）線及線種術語

術語

線

隆線　乳頭線ヲ謂フ

隆線溝　隆線ト隆線ノ間ノ凹溝ヲ謂フ

線ノ性質

新線　隆線ト隆線トノ間ニ新ラタニ生シタル線ヲ謂フ

短線　新線ヨリ長サノ短キ線ヲ謂フ

點狀線（又ハ點）　短線カ極度ニ收縮シ單ニ一箇ノ點トナリタル線ヲ謂フ

分岐線　一箇ノ線カ二線ニ分岐セル線ヲ謂フ

接合線（又ハ接觸線）　一方ノ線ニ他ノ線カ結合又ハ接觸セル線ヲ謂フ但シ結合線ト分岐線トヲ區別シ難ハサルトキハ其ノ線ハ分岐線ト看做ス

島及島ヲ形作ル線　分岐セル線カ再ヒ相會シテ其ノ間ニ島ヲ圍ム場合又ハ一方ノ線ニ他ノ線ノ兩端カ結合又ハ接觸シテ其ノ間ニ島ヲ圍ム場合ニヨリ圍マレタル內部ヲ島ト稱シ島ヲ圍ム線ヲ島ヲ形作ル線ト謂フ

線ノ種類

弓狀線　左側若クハ右側ヨリ起リタル線カ弓形又ハ波狀形ヲ畫キ反對ノ側ニ向ヒテ走リ原ト起リタル方向ヘ逆流スルコトナキ線ヲ謂フ

蹄狀線　指頭ノ下部ノ左側若クハ右側ヨリ斜ニ上部ニ向ヒテ走リ指頭ノ中央ニ至リ中心ヲ圍リテ引返シ一方ノ線ト並行シテ原ト來リタル方向ヘ逆流スル線ヲ謂フ

中核蹄線　蹄狀紋ノ最內層ニ於テ中心ヲナス蹄狀（卽チ蹄軸）ヲ謂フ

中心線（又ハ軸）　指紋ノ中心ニ於テ軸ヲナス線ヲ中心線又ハ軸ト謂フ軸ハ棒狀又ハ其ノ他ノ形態ヲナス軸數箇アルトキハ最モ中央ナルモノヲ主軸トシ其ノ他ノモノヲ側軸トス但シ軸ノ先端カ中核蹄線ノ內側ニ接合又ハ接觸セルトキハ其ノ線ヲ區劃線ト謂フ

尖頭接合線　二線ノ項部相接合シテ尖頭ヲ畫ク線ヲ謂フ

棒狀線　棒狀ヲナス直狀線又ハ之ニ類似ノ線ヲ謂フ

介在線　複線外角ヲ形作ル二線ノ中間ニ介在スル棒狀線ヲ謂フ

渦狀線　中心ヲナス一點ヲ圍ミテ渦狀ヲ畫ク線ヲ謂フ

環狀線　中心ヲナス一點ヲ圍ミテ圓ヲ畫ク線ヲ謂フ

弓形線　中核蹄線內ニ於テ中心點ヲ圍ム弓形ノ弧線ヲ謂フ

聯曲線　線ノ延長カ聯曲シテ二個ノ締狀ヲ畫ク線ヲ謂フ

追跡線　左側標準角ノ下部一邊ヲ成ス線ヲ右側標準角ノ內側又ハ外側ニ至ルマテ追跡スヘキ線ヲ謂フ

標準線　弓狀紋ノ標準線ハ弓狀紋ノ中心ヲ圍ム弓狀線ヲ謂フ蹄狀紋ノ標準線ハ單線又ハ復線ノ分岐若シクハ分離ニヨリ蹄狀紋ノ中心ヲ圍ム線ヲ謂フ渦狀紋ノ標準線又ハ復線ノ分岐若シクハ分離ニヨリ渦狀紋ノ中心ヲ圍ム線ヲ謂フ

三角線　三個ノ線カ立體三菱形狀ヲ呈シ接合及ヒ並行ノ二種ヲ構成スル特種外角ナリ

（三）印象術語

術語 線ノ定性　線ノ組織及性質カ普通狀態ニアル場合ヲ謂フ

線ノ變性　線ノ組織カ性質上變化セル狀態ヲ謂フ

線ノ靜態　定性ノ狀態ニアル印象ヲ謂フ

線ノ動態　指紋押捺ノ際線ノ印象ニ變化ヲ來シタル狀態ヲ謂フ

（四）其他ノ術語

術語 假想線　計算定規ニ畫ケル直線ヲ假想線ト謂フ

假想線ハ蹄狀紋ニ於テハ內端ト外端トヲ結ヒ付クル直線トス渦狀紋ニ於テハ右側標準角ト追跡線上ノ一點ヲ結ヒ付クル直線トス

但シ該直線ハ左側標準角ノ下邊ヲ右側標準角ニ向ヒ追跡スルトキハ最初ニ右側標準角ニ於テ相對シタル位置ニ止マリ而シテ右側標準角ト追跡線トノ間ヲ結ヒ付ケル直線トス

附錄（其五）

附圖（其一）

指紋型種

圖解（附圖其一）

「附錄其二」ノ指紋及指紋ノ構造參照

附圖（其二）

缺損指紋

圖解（附圖其二）

瘢痕ノ印象

1、5、6傷痕、左側下部ノ痕跡ノ周圍ノ線カ傷ノ中央ニ多少引キ痙ラレ居ルハ輕微ナル傷痕ノ特徴ナリ右側ノ混亂セル痕跡ハ深酷ナル傷痕又ハ火傷ノ特徴ナリ

3、4、指紋内ニ黒又ハ白キ班點ノ混在セルハ皮膚病ノ痕跡ナリ、3ハ天然痘ノ痕跡ナリ、疣ノ痕跡ハ中央ニ黒點アリ白キ線ヲ圍ラス

皺及剝皮ノ印象

2、指紋内ノ白線ハ皺ノ痕跡ナリ輕微ナル傷ノ痕跡ハ輪廓明瞭ナラス恰モ彗星ニ光尾狀ヲ呈ス白キ大ナル班點ハ剝皮ナリ

外角缺失セル印象

7 美通渦狀紋ノ外角缺失セルモノニシテ價9ナリ

8 混合紋ノ左側外角缺失セルモノニシテ價9ナリ

9 純變體紋ニシテ價ハ9ナリ

附圖（其三）

中心及外角

線ノ計算法

蹄狀紋

圖解（附圖其三）

ト＝內端　マ＝外角

チ＝基點

イハ、イエ＝外角ヲ構成スル標準線

附圖（其四）

中心及外角（別表）

標準角

線ノ計算法

渦狀紋

圖解（附圖其ノ二）

ト＝內端　マ＝外角（標準角）

チ＝基點

イハ、イニ、＝外角ヲ構成スル標準線

1＝中流（逢着）

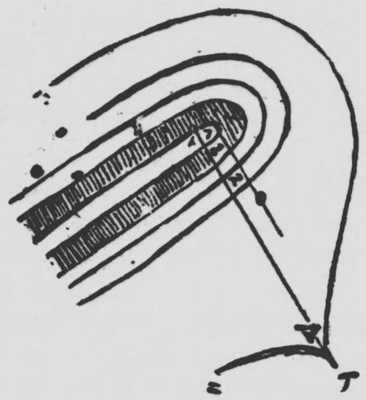
2＝上流

3＝下流

附圖（其ノ五）

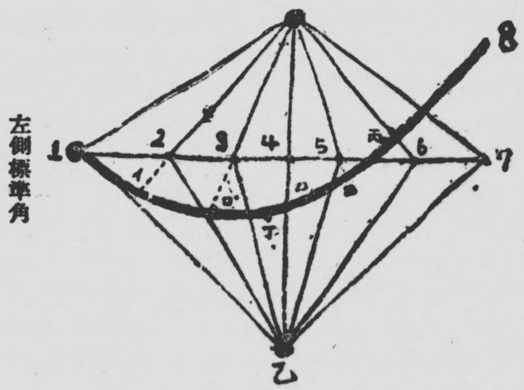
假想線ノ引キ方

(1)



(2)

右側標準角
流下



左側標準角

流上
右側標準角

圖解（附圖其五）

ト＝內端　マ＝外端（イハ、イニ、ハ外角ヲ構成スル線）

(1) 蹄狀紋

ヘ＝中心核

イヨリトニ至ル直線ハ假想線ナリ

(2) 渦狀紋

- 1ヨリ7ニ至ル線ハ假設追跡線ナリ
- 1ヨリ8ニ至ル線ハ追跡線ナリ
- 上流（乙ト丁ヲ結ヒ付クル直線ハ假想線ナリ）
- 下流（乙ト丙ヲ結ヒ付クル直線ハ假想線ナリ）

備考　1ヨリ7ニ至ル追跡線ニ對シ甲及乙ヨリ最短距離ハ甲4間乙4間ナリ1ヨリ8ニ至ル追跡線ニ對シ甲ヨリ最短距離ハ甲丙間ナリ同シク乙ヨリ最短距離ハ乙丁間ナリ。

標準角トハ渦狀紋ニ於ケル夫々二個ノ外角ヲ謂フ。

昭和五年十一月廿四日印刷
昭和五年十二月十日發行

個人識別法學具附
定價金一圓

著者　根本顯太郎
東京市神田區錦町一丁目十二番地

發行者　横尾留治
東京市本郷區眞砂町三十六番地

印刷者　龜谷良一

發行所　東京市神田區錦町一丁目十二番地
松華堂書店
電話神田二三一〇番
振替東京二一一九四番

著作權所有

（日東印刷株式會社印刷）

I.-2175

1

572
267